年報

平成 23 年度

Oita University of Nursing and Health Sciences

公立大学法人大分県立看護科学大学

平成23年度の年報発行にあたって

大分県立看護科学大学
学長・理事長　村嶋幸代

大分県立看護科学大学は、平成 10 年に開学後、平成 23 年度末で丸 14 年になります。この間、本学は、草間朋子前学長のリーダーシップの下に、全国に先駆けて様々な取組を行ってきました。

特に、平成23年度からは、現代の保健医療福祉の多様なニーズに応える看護師を育成するために、学士課程の４年間をかけて、看護師教育を行うようにしました。また、大学院修士課程における助産師教育と保健師教育を、全国に先駆けて開始しました。その前、平成20年度からは、大学院の博士前期課程（修士）でナースプラクティショナー（診療看護師）の教育を、全国で初めて開始しました。修了生は、既に、実践で活躍しつつあります。

この年報は、上記のような大きな流れの中で、教員と職員が取り組んできた実績をまとめたものです。

教育活動と研究活動（学内プロジェクト、先端・奨励研究、研究助成金獲得状況）、その成果としての業績、更に、地域貢献の状況が示されています。特に、地域貢献の項では、教員が大分県内および全国で求められて講演していること、更に、大分県内の病院で研究指導を活発に行っていることを示しています。

本学の建学の精神は、「看護学の考究」「心豊かな人材の育成」「地域社会への貢献」であり、年報の各々の頁が、この3つの精神に重なってまいります。

本学は、これからも、大分県の看護学の拠点として、教育・研究・社会貢献を通して看護の水準の向上に努め、また、地域に暮らす人々がより良い生をおくることができるように、これからも着実に歩みを重ねていきたいと思います。

年報をお読みになって、忌憚のないご意見、また、ご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

目次

1.　委員会／ワーキンググループの活動 1

2.　学内行事の概要 26

3.　教育活動 31

4.　学内セミナー 108

5.　学内プロジェクト研究 109

6.　先端研究 112

7.　奨励研究 113

8.　インターネットジャーナル「看護科学研究」 114

9.　業績 115

10.　地域貢献 126

11.　助成研究 139

12.　各種研究・研修派遣 142

13.　学外研究者の受入 144

14.　教職員名簿 145

１　委員会／ワーキンググループの活動

１－１　理事会

委員　　理事長：草間 朋子
　　理事：市瀬 孝道、甲斐 倫明、戸田 太治（以上、学内理事）
　　杉村 忠彦、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）

理事会の役割は、法人の経営に関する重要事項を審議することである。本年度は５回の理事会を開催し、教育研究審議会報告の後、年度計画に関する事項、地方独立行政法人法により知事の認可又は承認を受けなければならない事項、重要な規程の制定又は改正、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価などについて審議した。

なお、理事会委員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから、経営審議会と同時に開催した。

１－２　経営審議会

委員　　理事長：草間 朋子
　　理事：市瀬 孝道、甲斐 倫明、戸田 太治（以上、学内理事）
　　杉村 忠彦、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）
　　立花 充康、藤内 悟、本間 政雄、山西 文子（以上、経営審議会委員）

本審議会の役割は、法人の経営に関する重要事項を審議することである。本年度は５回の経営審議会を開催し、年度計画に関する事項のうち法人の経営に関するもの、地方独立行政法人法により知事の認可又は承認を受けなければならない事項のうち法人の経営に関するもの、重要な規程の制定又は改正に関する事項のうち法人の経営に関するもの、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価に関する事項のうち法人の経営に関するもの、組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価などについて審議した。

なお、理事会委員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから、理事会と同時に開催した。

１－３　教育研究審議会

委員　　草間 朋子（学長）、市瀬 孝道（学部長）、甲斐 倫明（研究科長）、三船 求眞人（学外委員）、各研究室代表者、各委員長、戸田 太治（事務局長）、各事務グループリーダー

本教育研究審議会の役割は、大学の教育研究に関する重要事項の審議を行なうことである。本年度は16回の教育研究審議会を開催し、各種委員会報告を行うと共に中期目標・中期計画に関する事項、学則の改正、学生の就業、進級判定、休学、復学、退学、学位の授与に関する事項、教員の人事及び評価に関する事項、教員の自己点検・自己評価に関する事項、各種諸規程等について審議・承認した。各回の教育研究審議会の議事内容は理事会にて報告された。

１－４　教授会

構成員　草間 朋子（学長）、市瀬 孝道（学部長）、各教授、各准教授、各講師、戸田 太治（事務局長）

本教授会の役割は、大学の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、卒業、その他在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行なうことである。本年度は５回の教授会を開催し、学部入試の合否判定、卒業判定および学生の表彰（学長賞、卒業研究の優秀賞、学生賞）に関する事項について審議・承認した。教育研究審議会で審議・承認された休学、復学、退学、進級判定についての事項は教授会で報告された。

１－５　研究科委員会

構成員　草間 朋子（学長）、甲斐 倫明（研究科長）、各教授、各准教授、各講師

本委員会では、大学院の教育課程における学生の入学、修了、その他在籍に関する事項及び学位の授与に関する事項の審議を行った。

１－６　自己評価委員会

構成員　佐伯 圭一郎、吉田 成一、小嶋 光明、安部 眞佐子、梅野 貴恵、徳永 一裕

FD活動

1)新任教職員を対象とした研修を実施した。今年度は職員の異動時期が異なったため、教員と職員が別途実施となった。2)海外短期研修に１名を派遣した。3)国内短期研修に6名を派遣した。4)ケアリング・アイランド九州沖縄構想による本学のFD研修会、CSD研修会を各１回実施した。参加他大学でのFD・CSD研修の広報を行った。5)全教員を対象とした科研費申請講習会を企画、実施した。平成24年度科学研究費補助金申請状況は、新規申請については該当者全員である33件、継続は13件、繰越３件であった。6)教員を対象に、FD活動の進め方や研修会、派遣研修に関する意見・要望をメールにより調査した。

授業評価

学生による授業評価を継続的に実施した。本年度より、講義に関するアンケートは各教員が３年に１回以上と、頻度を下げて回答者である学生の負担を軽減する方式を導入した。実習・実験に関するもの、２年次末と４年次末での本学の教育に関する総合的なアンケートは前年通り実施した。また、講義に関して前年度のアンケートで高い評価を受けた教員３名の講義を録画し、教職員に公開した。

さらに、本年度は看護研究交流センターの平成22年度卒業生への卒後３ヶ月、半年、１年時点でのアンケートに協力し、現場に入った後の本学の教育についての評価を調査した。

アニュアルミーティング

平成23年度アニュアルミーティングを３月２日に実施した。学内からの演題が15題、看護研究交流センターセッションでは学外からの演題が４題発表された。

年報

平成22年度年報を編集し、学外向けウェブサイト上に公開した。

人権啓発・ハラスメント防止

人権相談窓口の広報・周知を継続した。教職員を対象とした人権研修会を８月２日に開催した。

今後の課題としては以下の通りである。

1)他の委員会等へ、議事録および自己評価書や年報等に基づいて自己評価の観点から検討したコメントを定期的に伝達し、全学の自己評価活動の円滑な進行を推進する。

2)授業アンケートについては、オンラインによる方式を利用した場合の回答率が低い点について対策を検討する。また、授業評価の方法についてはこれからも継続的に項目や方法を検討する。また、卒業後に追跡して調査する試みも、看護研究交流センターと共同で継続し、本学の教育を評価する方法としての有用性を検討する。

3)短期海外派遣研修ならびに国内派遣研修の募集と選考が自己評価委員会の分掌となり、これら研修に関して適切な運用に留意するとともに、その評価を行うことが必要である。

１－７　教育研究委員会

構成員　市瀬 孝道、伊東 朋子、佐伯 圭一郎、李 笑雨、藤内 美保、小野 美喜、
神崎 正太（事務局）、甲斐 倫明（オブザーバー）

本委員会は学生の教育を効果的かつ円滑に行うために教育関連の活動と教育・研究予算の策定を行っている。本年度は11回の教育研究委員会を開催した。1)国家試験対策に関しては、国試の補講は例年と同じく12月上旬に行い、模試については例年どおり国試直前まで実施、また国試終了直後に国家試験対策に関するアンケート調査を実施した。2)看護学実習（第１段階～第５段階）に関しては、実習代表者会議のもとで全体の日程を調整し、教員や学生配置等を検討・実施し、本委員会で最終決定した。実習関連ＷＧに関する活動内容は下記に記述した内容によって看護実習の充実を図った。3)平成23年度学部生の助産学選考に関しては、WGが中心となって、口頭試問（実技含む）による選考を行い、４月の第２回教育研究審議会で合格者を決定した。4)卒業研究に関しては、例年どおり３月末に各研究室の卒論研究テーマを収集し、指導・調整を行なった。また県立病院、大分日赤病院、アルメイダ病院における卒論研究が研究内容や調査フィールドが重複しないように調整した。卒業研究関連の２つのサポートグループ（SG）を設置し、SGは卒業研究発表会要旨集と卒業研究論文集の作成、卒業研究発表会のサポートと、平成24年度の各研究室学生配置、看護研究の基礎 Iの講義のサポート（テキスト作成も含む）等の実務を行った。5)学部教育を看護師教育のみとした平成23年度カリキュラムが本年度１年生よりスタートした。平成21年度カリキュラムにおいて実施した在宅看護実習I（３年次前期後半）が非常に効果的であったため、平成23年度カリキュラムへも取入れるよう検討し変更した。また、編入学については平成25年以降廃止とすることを委員会内で検討した。6)４年次生を対象とした総合人間学の開講にあたっては講師の選定と企画を行い、例年どおり全８回の講義を実施した。本年度はピノキオコンサートを実施し、外部からの参加者も多く見られた。7)進級試験は、進級試験WGによって試験問題を選別し平成23年2月29日に実施した。再試験は平成23年3月7日に実施した。8)研究予算関連では例年どおりプロジェクト研究、先端研究、奨励研究を予算化し、プロジェクト研究は２件、奨励研究は３件を採択したが先端研究は０件であった。9)短期海外派遣研究員に関しては、本年度は教員１名を海外研修に派遣し、教員の研究の活性化を図った。10)平成23年度前期・後期の科目等履修生及び平成23年度の研究生の募集を行ったが、本年度も応募者はなかった。11）戦略的大学連携事業おけるケアリングアイランド九州沖縄構想では、本事業で作成中の相互受講科目「ケアリング・サイエンス」の本学選択科目への導入を検討した。またケアリングアイランドFDの企画として総合人間学における「災害看護」の講義、ローカルケアリングCSDとして「NP（診療看護師）・CNS（専門看護師）・PA（医師助手）の役割分化」についての交流会を実施した。12）平成24年度のシラバス作成を行った。13）教育研究委員会が担当する平成23年度の年度計画に関しては、全て遂行し、100％達成することができた。

来年度計画としては、平成23年度よりスタートした新々カリキュラムに関して実施上問題があれば本委員会で随時改善して行く予定である。

１）　国家試験対策ＷＧ

構成員　伊東 朋子、石田 佳代子、梅野 貴恵、小嶋 光明、高波 利恵、井伊 暢美、桑野 紀子、石岡 洋子、坂口 隆之、神埼 正太

平成23年度の国家試験受験対象者は看護師79名、保健師80名、助産師12名であった。昨年度よりの目標を引き継ぎ、保健師・助産師・看護師国家試験合格率100％をめざし国試対策WG会議を10回行った。教員・学生の対策委員は一丸となり役割分担を決め４月より精力的に対策の計画を実施した。具体的活動は９月に国試ガイダンスを行い、学生の自覚を促した。今年度も昨年と同様、学生の主体性を重んじ、補講科目を弱点教科、領域に絞り、精選した。また模試の見直しも行い、学内模試（看護師１回、保健師１回、助産師４回）、業者模試（看護師８回、保健師５回、助産師３回）を実施し、その結果を分析し、成績不振の学生には個人面接を行い、折にふれて学生への激励と国家試験へのモチベーションを喚起した。特に必須問題への補強として２年次生の進級試験内容（解剖・生理）を実施し、基礎科目部分の強化を図った。正解率が低く、国家試験に向けて、さらなる動機付けと奮起の必要性があり、卒論配置研究室の教室主任にも現状を報告し、指導強化を求めた。3月26日に発表された合格率は、看護師100％、保健師94％、助産師100％であった。

２）　実習代表者会議

構成員　市瀬 孝道、藤内 美保、伊東 朋子、江藤 真紀、梅野 貴恵 小野 美喜、影山 隆之、桜井 礼子、高野 政子、林 猪都子

実習代表者会議は、毎月定例で審議会修了後に10回の会議をもった。主に実習の単位認定に関すること、実習責任者としての判断を共有することが望ましい事項の検討、実習中に配慮すべき学生の情報共有などを行った。また実習指導者・教員交流会を８月に初めて開催し、大分県立病院、大分赤十字病院、アルメイダ病院の実習指導者が参加し、熱心にディスカッションし、実習指導に活かされる会議となった。また、平成21年度カリキュラム改正、23年度カリキュラム改正が導入への検討など、各実習領域での連携が必要であり、代表者会議により、意思決定がスムーズにでき、効果的であった。21年度カリキュラムで３年次に導入した老年看護学実習Ⅰ・在宅看護学実習Ⅰについて教員を対象にアンケートを実施し評価を行ったが、非常に効果が高い実習という結果が示された。そこで平成23年度も当該実習を継続することとなった。カリキュラム変更に伴う留年生への実習の履修などについて、個別の対応を学生生活支援委員会とともに連携して行った。

３）　実習関連ＷＧ

構成員　桜井 礼子、藤内 美保、足立 綾、小代 仁美、猪俣 理恵、桑野 紀子、秦 さと子、
栗林 好子、関屋 伸子、高波 利恵、津隈 亜弥子、津留 英里佳

今年度の新たな取り組みとしては、１）看護技術修得プログラムは、平成23年度から４つの段階の技術チェックとなる。これに伴い、プログラムの名称を段階別としていたが、実習の段階と混乱するため、ファーストステップ、セカンドステップ、サードステップ、フォーススステップと呼称を変更する。２）平成23年度改正カリキュラムで導入される２年次ファーストステップの技術チェックの目的、方法の提案をした。時期は２年次12月と決定した。３）看護技術修得確認シートを平成23年度改正カリキュラムの学生用に改定するため、根本的に見直し、学生が主体的・計画的に自己学主できるためのシート、４年間の看護師教育のみ教育効果もエビデンスとして導けるシートとなることを考慮して検討している。４）平成21年度改正カリキュラムにより統合領域に位置づけられた看護技術修得プログラムの第１段階技術チェックおよび総合看護学など単位認定のための基準を明確化し、実施した。来年度へのフィードバックのための意見も集約し、改善点を明らかにした。５）総合看護学実習では、実習指導者の評価を反映されるように改善した。６）これまで本WGで取り組んできたことを論文としてまとめ、雑誌掲載の予定である。①看護技術修得プログラムに関する論文、②第１段階技術チェックに関する論文　③第３段階技術チェックに関する論文である。

その他、７）実習センターの運営・管理および各実習施設の整備、８)平成23年度版実習ガイドブックの作成、９）事故対応マニュアルの見直し、10）看護技術修得プログラム（第１段階技術チェック、第２段階総合看護学、第３段階技術チェック）の実施、11）実習関連予算の管理等を例年とおり行った。

年間を通していくつもの業務があるが、実習期間との調整をしながら、ワーキングメンバーで協力して効率的・効果的に実施できた。

４）　進級試験ＷＧ

構成員　小野 美喜、佐伯 圭一郎、松本 初美、定金 香里、田中 佳子、津隈 亜弥子

今年度試験作成のための出題基準・出題範囲を確認し、各教員に問題作成依頼を行い、学生へは7月21日進級試験ガイダンスを行った。平成24年3月1日に２年次生に対し進級試験を実施した結果19人合格、59人が不合格となった。さらに不合格者に対し３月7日に再試験を実施した結果、１名が欠席し２名が不合格となったため、教育研究委員会での不合格者対応につなげた。

５）　助産学選考ＷＧ

構成員　梅野 貴恵、佐伯 圭一郎、吉村 匠平、伊東 朋子、関屋 伸子、樋口 幸、石岡 洋子

４月20日、22日に平成24年度助産学実習履修許可者の選考を行った。教育研究審議会の審議を経て７名に履修が許可された。

１－８　学生生活支援委員会

構成員　林 猪都子、関根 剛、宮内 信治、猪俣 理恵、河野 梢子、菅野 信子、佐藤 俊実

学生の大学生活を充実させるための環境整備をする、学生に必要とされるサポートをタイムリーに提供することを目標に下記の活動を展開した。

１．学生関連イベントの企画・運営

全学生オリエンテーション（４/６）、新入生オリエンテーション・のつはる少年自然の家 宿泊研修（４/７、４/８）、コンタクトグループ（４/６）（グループ編成・広報）、全学スポーツ交流会（４/22）（アルティメット、全学生・教職員への実況中継）などを企画し実施した。

２．学生相談

各学年担任を中心に学生相談業務を行った。内容は相談（ハラスメント相談窓口）、学習相談（単位取得、進級に関するもの）、休退学・復学相談と面談（保護者面談を含む）、過年度、休学中の学生支援などを行った。また、旧カリキュラムから新カリキュラム、新新カリキュラムの移行に伴い、休学者・留年者の個別カリキュラムによる単位取得状況を確認した。

３．学生の自主活動への支援

サークル活動支援、若葉祭における学生支援全般、自治会活動支援、新入生歓迎会参加などを行った。

４．経済支援

奨学金による経済支援（日本学生支援機構の奨学金支給など）、奨学金情報の収集、周知活動などを行った。

５．健康支援

学生の健康管理支援（集団健康診断、抗体検査、ワクチン接種勧奨、個別相談）、禁煙教育（禁煙希望学生に対する禁煙相談）、学生の保険関係の支援（加入手続き事務、退学・休学者の返還・追加、事故・疾病による入院、退院の補償請求に関する支援など）について保健室保健師を中心に行った。インフルエンザ罹患学生への対応、ワクチン接種の対応などを行った（保健室）。

６．交痛安全推進

交通安全指導の実施（自動車講習会４/20・自動二輪実技講習会６/18）、通学許可面接（通学許可交付面接、交通事故対応の指導）、学生が被害・加害者となった場合の交痛事故対応（一人暮らしの学生を中心に担任が対応）、駐車場管理（許可シールの交付、無許可利用者・違反者への対応）、交通事故データベースの作成などを行った。

７．学生生活に関する調査・広報

学生生活実態調査（質問紙作成、実施、集計、報告書の作成、公開）についてネコバスを使用して実施した。学生への広報活動、学生への情報発信としてネコバス上でのキャンパスカレンダーの構築やサークル紹介などを行った。

８．その他

新人教員オリエンテーション（４/４）、九州地区公立学生部長会議（９/16　開催校）、大学コンソーシアムおおいたへの委員派遣、ケアリングアイランドへの委員派遣、行事ポスター作成、学外者クレーム対応、学年進行に伴うクラス替え、教職員への学生に関する相談などを行った。

１－９　就職支援委員会

構成員　下田 浩、松本 初美、小嶋 光明、猪俣 理恵、秦 さと子、神崎 正太

学生の就職の円滑化と県内就職率50％を目指して、就職活動を支援し、年間計画に沿って活動を行った。具体的には全国からの求人訪問対応（70件）、就職ガイダンス（２回）、県内就職施設説明会（4/27；26施設）、公務員試験対策セミナー（２回）の企画・運営・実施、就職・進学ガイドブックの改訂、利用状況調査を行った。さらに、模擬面接（定期３回、臨時３回；62名）、学生の個別支援、全国及び県内からの就職情報の整備を行い、必要な学生には個々に情報をメールで提供した。在校生に対しては各委員が分担して学生個々を細やかに支援し、卒業生に対しては情報提供を行うだけでなく、県内就職施設に各委員が訪問し、勤務状況の調査や施設からのコメントなどを頂き、卒業生のフォローアップとともに、県内施設からの要望に応えるべく委員会活動を行った。今年度の求人数は14,515人、うち県内514人である。卒業予定者は83名であり、３名の進学者を除き、２月の時点で78名が就職を決定した。職種別人数は、保健師２名、助産師12名、看護師63名、その他１名である。

本年度の県内就職率は25.8％（２月現在）と大きく落ち込んでおり、その対策として今後、県内施設とのより緊密な連絡、県内施設からの非常勤講師招致、卒業後の緊密な連結を目的とした同窓会の設置による卒業生のＵターン確保などを進めていく必要があると考える。

１－10　広報委員会

構成員　高野 政子、稲垣 敦、安部 眞佐子、井伊 暢美、小野 孝二、田崎 真佐恵

1. 若葉祭：5月14日、15日に開催された若葉祭にて教員イベントの募集や調整をした。参加者は２日間で約1400名を超えており大学の現在の姿を伝える場としては有用であった。実習室の廊下に掲示したパネルは、大学概要、カリキュラム、大学院概要、研究室紹介などで、変更が生じているものは更新を依頼した。教員イベントは、学生の応援を頼み、学生と地域の人々とのふれあいの場ともなっている。実習室・実験室、カレッジホールにて、高齢者、妊婦などの疑似体験、小児、成人対象の救急法の体験、放射線の解説、身体組成の解説などによって看護大学の教育内容や設備の紹介を行った。その他にアロマハンドマッサージのケア技術の実際や、猫車などで来場者に親しみを持ってもらうイベント、産学官共同開発品の紹介も企画された。教員の研究紹介では、７人のポスターの掲示を行い、７月のオープンキャンパスの案内チラシ、今年度版大学パンフレットを自由配布し、一般の方々や進学予定者にも大学の内容が伝わるように配慮した。

2. オープンキャンパス：昨年度の参加者アンケート結果を確認し、H23年度の開催は、夏休み最初の３連休中日の７月17日（日）に実施し、参加者は230名であった。説明会・体験イベントなど教職員全員と学生の協力者とで取り組んだ。食堂も営業してもらい保護者等来学者に利用してもらった。教育・研究の展示はパネル展示物を一部新規作成した。また、教員７名 の研究紹介を掲示した。学生自治会によるTAKIOソーランや学生の話が聴ける合格体験発表や在学生からのメッセージ、教員による模擬授業15分の短縮し３講義を巡回するよう企画した。在学生が相談や実習室への誘導にも協力したので、高校生や保護者には入学後のイメージを深めることができたと思われる。

3. 地域ふれあい祭り：H23年度の地域ふれあい祭りは、大分市主催の大分七夕祭りに参加する形で、県民との交流と本学の広報を目的として開催した。当日の参加者は教職員38名と学生36名の74名であった。竹町ドーム広場で健康チェックを実施し、約150名の身体組成や骨硬度等の測定および進学相談を行った。また、学生および教員は踊りの先生の下で練習を行い、祭当日は駅前通りで、チキリンばやし、サンバチキリン、関の鯛つり踊りを披露した。

4. 出張講義など：看護系進学を希望する高校生を対象とする高校の出前講義に講師を派遣した。高校の依頼を受け、助教以上の教員に依頼・調整を実施した。中津北高校（6/10)、佐伯鶴城高校（7/21）、杵築高校（7/8)、別府鶴見丘高校（9/7）、中津南高校（9/17）、鶴崎高校（10/24)、安心院高校（9/28）、竹田高校（10/25）、雄城台高校（12/14）、その他、公民館活動講師派遣2件で合計13件であった。

5. 大学見学：オープンキャンパスに参加できなかった高校生や保護者の大学見学等の希望者、申し込みに随時対応した。埼玉県の高校生（8/2）愛媛県の高校生(8/9)、大分雄城台高校(8/16)、高校既卒者(10/11)、大分高校(12/12)　合計５回延べ７人。

6. 大学オリジナルグッズの作成：大学名の入った大学オリジナルグッズを作成し、大学広報を行った。シャープペンシル（1000本）、クリアファイル（1000枚）、４色ボールペン（1000本）、写真立て（50個）、タンブラー（300個）とした。

7. マスメディアによる広報：新聞、テレビ、ラジオ等に情報提供や取材依頼を行い、記者及び取材班の対応を担当した。また、大学HPで教員の研究紹介を依頼し、12件を掲載した。

8. 大学パンフレットWG:４名の教員と広報委員でWGを運営した。2011年度版の完成し、その後は2012年版を作成中である。

9. 学外Web-WG：４名に教員が分担作業を行った。新規の記事56件を随時更新した。

10. 英文Web-WG：４名の教員と広報委員で作業を行った。３年ぶりの大幅な改正で、2011年版を10月に完成した。

・地域ふれあい祭りは現在8月の大分市主催の大分七夕祭りに協賛する方法で行っているが、他の地域活動にも協同する方法をも検討する。
・大学オリジナルグッズの開発

１）　大学案内パンフレットＷＧ

構成員　定金 香里、樋口 幸（平成23年５月まで）、薬師寺 綾（平成23年５月まで）、
坂口 隆之（平成23年５月まで）、江月 優子（平成23年７月から）、
小嶋 光明（平成23年７月から）、田中 佳子（平成23年７月から）

2012年度版大学案内作成を１月から開始した。高校生が親しみを持てるよう写真を多く取り入れ明るい紙面作りを心がけた。５月上旬に完成し、若葉祭を始め、広く本学の広報活動に活用した。完成後、本学のニーズに合った大学案内を作成するため、教職員と学生を対象とするアンケート調査を行い、次年度の大学案内のイメージ作り、業者への依頼等の指針とした。これまで活動期間が短く作成に支障が生じたため、2013年度版大学案内WGは７月にメンバーを確定し、活動を開始した。現在、５月完成に向けて最終段階の作業を行っている（3月時点）。

２）　学外WebＷＧ

構成員　品川 佳満、岩崎 香子、佐藤 みつよ、田原 歩

学外Webサイトの情報の更新・掲載（大学案内、入試・入学案内、イベント案内・報告、研究紹介など）および管理・運営を行った。サイトは、１日約700～800人のアクセスを記録している。

３）　英文WebＷＧ

構成員　G. T. Shirley　岩崎 香子、佐藤 みつよ、渡邉 寿子、田原 歩

海外の利用者を重視した内容とし、学内行事等の報告掲載を随時行うことで、常に最新の情報を分かりやすく閲覧できるようにした。

４）　英文大学案内パンフレットＷＧ

構成員　G. T. Shirley、猪俣 理恵、岩崎 香子、桑野 紀子、佐藤 みつよ、渡邉 寿子、
田原 歩

本学の特徴と教育内容・活動を英文でまとめた“University Bulletin”を全面改訂した。配布の対象が主として海外の教育・研究関係者であることを考慮し、今回の改訂では写真を最小限にとどめ、文面の充実を図った。

１－11　国際交流委員会

構成員　G. T. Shirley、伊東 朋子、李 笑雨、小代 仁美、高波 利恵、桑野 紀子、江本 華子

国際交流委員会が平成23年度に行った活動は以下のとおりである。

1)　ソウル国立大学校派遣学生受け入れと交流

ソウル国立大学校看護大学から大学院生5名、教員1名の計6名（7月17日～7月24日までの8日間）を本学に受け入れ、日本の医療・保健・福祉制度、看護について理解を深めた。本学では、学生および教員がサポートグループとして交流を支援した。

2)　本学の学部生および大学院生の派遣

大学院生1名、学部生6名および同行教員1名の計8名を（8月21日～28日までの8日間）ソウル国立大学校看護大学に派遣した。韓国の医療・保健・福祉制度、看護について視察等を行い、理解を深めた。報告はWebに掲載した。

3)　第13回看護国際フォーラムの開催

大分県看護協会と共催である看護国際フォーラムを平成23年10月29日（土）に別府ビーコンプラザ国際会議場にて開催した。本年は「看護の展望－Nurse Practitionerに着目して－」をテーマとし、米国から1名、韓国から1名の講師を招聘、また、国内講師として本学学長の講演を企画した。参加者は281名と盛況であった。

4)　第12回NP国際会議の開催

平成23年10月28日（日）に、本学にて、第10回国際会議をNPプロジェクトと協力して開催した。米国インディアナ州、インディアナポリス大学看護学部から１名を講師として招聘した。

5)　第１4回大分看護科学大学・ソウル大学研究交流会の開催

今年度は第13回NP国際会議として、「NP（診療看護師）・CNS（専門看護師）・PA（医師助手）の役割分化」をテーマに、平成24年3月15日（木）に本学23講義室で開催した。米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校看護大学院、韓国ソウル国立大学校看護大学から各1名の講師を招聘した。海外講師2名および本学教員1名の計3名が講演を行い、参加者と共に活発に意見交換を行った。

平成23年度の計画を踏襲した計画を検討する予定である。基本的には、学生の国際的視野の育成と教員の研修の質のさらなる向上のため、国際交流の機会と内容を検討するよう試みる。そして、毎年、看護国際フォーラム後にアンケートを実施し、大分県内の看護職のニーズに沿ったテーマを選んで開催し、地域貢献にもつなげる。

１－12　公開講座委員会

構成員　平野 亙、福田 広美、松本 初美、定金 香里、佐藤 俊実、中野 麻梨子

「脳の働きとその障がい～それぞれの脳、それぞれの世界」を共通テーマとする有料公開講座（資料代500円）を4回開催した。各回の題目は、「脳が世界を生み出す～認知機能のはたらき」、「自閉症児の世界」、「高次脳機能障害を理解する」、「地域で支える認知症」であり、いずれも講義室を会場として実施された。受講者は各回40名以上、のべ208名で、うち9名が全回出席し、修了証を授与された。

シリーズ企画の講座とは別に、若葉祭において、無料の公開講座（ミニ講座）、「CALLを体験してみませんか」、「簡単な理科実験」を開催し、計33名が受講した。

今年度は、近年社会的関心の高いテーマを集約したため、多くの受講者があったものと思われる。周知広報の手段として、チラシによる認知が最も多く、今後の公開講座の充実のためには、市民の関心の高いテーマ設定とともに、保健センターや福祉施設など関心のありそうな人の目につきやすい場所でのチラシの配布が効果的と考えられる。

１－13　図書委員会

構成員　小野 美喜、江藤 真紀、吉村 匠平、石田 佳代子、児玉 正範、白川 裕子、工藤 信二

月に1度の委員会を開催し、大分県大学図書館協議会や全国大学協会図書館協議会等での検討会や学習会報告、および議題について検討した。

平成23年度の活動として

１）学部生対象に実施した図書館利用アンケート結果（平成22年度実施結果）をもとに、利用者に対するサービスを検討した。

２）図書館利用案内を改訂し、学生および外部の利用者が図書館を活用しやすいように全体的に修正を加えた。

３）毎月HPに掲載している教員図書紹介に事務職員を加え「教職員図書紹介」として掲載し、幅広いジャンルの図書紹介を行った。

４）学生が希望図書購入のリクエストをしやすいように、HPの学生のページからリクエストできるように改善した。

５）図書館利用に関して教員、大学院生にアンケート調査を行い、要望点について検討し改善をはかった。

６）NPおよび大学院教育に必要な図書、視聴覚教材を購入を増やし充実につとめた。

引き続き視聴覚教材を充実させ、DVD視聴のためのDVDプレーヤーを設置し利用を促進する。また、来年度は大分県図書館協議会の幹事校となるため、役割遂行のための準備と協議会開催運営に務める。

１－14　入試委員会

構成員　構成員は非公開としている。

本委員会は、平成23年度に実施した入学試験に関するすべての事項について審議し、入学試験を統括した。

広報委員会と協力して、入学試験に関する広報活動を行った。業者・県看護協会等主催の進学説明会の参加は17箇所、対高校説明会来場高校教諭29名であった。この他、若葉祭、オープンキャンパス、及び“ちきりんばやし”会場に、進学相談コーナーを開設した。

大学院入学試験（及び編入学試験）は例年通り8月に実施した(8/27)。大学院の外国人国費留学生入試についても実施方法を検討し、9月に初めて実施した(9/1)。大学院博士課程（前期）の実践者養成（助産学）入試では、実技試験を導入した（ただし今後は実施しないこととなった）。博士課程（前期）の実践者養成（NP、広域看護学、助産学）と健康科学専攻については二次募集を行い、入試を実施した(2/25)。

学部の特別入試(11/20)の志願者数は県内75名、県外21名、社会人８名で、前年度とほぼ同水準であった。学部の一般入試志願者数は前期124名、後期186名で、前年度より減少した。また編入学試験の出願者数は６名で前年度より減少した。編入学は今後、募集を停止することを決定した。

大学入試センター試験の科目が平成27年度以降変更されるのに伴い、利用科目の検討を行った。これについては、次年度のできるだけ早い時期に最終決定することとなった。併せて、独自試験および面接のあり方についても検討を行った。一般入試の後期試験の配点を見直し、特別入試の高校推薦及び社会人入学の定員についても見直しを行った。

編入学試験の英語の問題で同一問題が重複出題されたこと、およびセンター試験の地歴公民で問題冊子の配布方法に誤りがあったことから、同様のミスの再発防止方法について検討した。

入試の広報と運営方法の両面について、引き続き改善のための検討を重ねながら、年度計画に沿って活動を行っていく。

１－15　研究倫理・安全委員会

構成員　吉村 匠平、大賀 淳子、平野 亙、福田 広美、岩崎 香子、徳永 一裕

本委員会は、本学教員及び大学院生が行う研究について倫理・安全面の審査を行っている。今年度は、延べ100件の研究計画について審査を行った。卒業研究の審査に関しては、教育研究委員会と連携し９月までに審査を終了した。

本年度は以下の点を見直した。まず、NPコースに在籍する大学院生が、NP実習として行った活動を通して収集した情報を原資料として課題研究を行う場合の研究計画書と依頼文書（対象施設用、対象者用）を作成し、大学院生のHPにアップした。次に、本学学生を対象とした研究を委員会の審査対象とすることとし、併せて指針上の「研究対象者の人権の尊重」及び「苦情申し立て」について改訂した。さらに「公立大学法人大分県立看護科学大学における研究の倫理安全に関する指針」、「実験動物施設　利用の手引き」を大学HP上に公開した。

動物実験の実施状況について記載する。研究倫理安全委員会は、「研究機関等における動物実験等の実施に関する基本方針（文科省）」および「公立大学法人大分県立看護科学大学における研究の倫理安全に関する指針」、「実験動物施設　利用の手引き」、「研究計画の申請に関する手引き」等の学内規定に基づき、動物実験計画の審査、承認等を行っている。実験動物施設の全般的な運営管理は、動物施設管理責任者が「実験動物施設　利用の手引き」に基づいて行っている。

本年度の動物実験計画の審査件数は18件（新規13件、変更２件、追加３件）。審査結果は、採択が７件、修正採択が11件だった。研究計画書に記載された動物の予定使用匹数は2757匹（マウス2747匹、ラット10匹）、本年度の動物の使用匹数は1386匹（マウス1275匹、ラット111匹）だった。研究計画書に記載された予定使用匹数と実際の使用匹数は一致しないのは、研究期間が年度をまたぐ場合があるためである。４月15日に九州大学で開催された、実験動物の福祉および動物実験に関する法令対応に関するセミナーに委員一名が出席し、委員会、動物実験実施者間で情報の共有を行った。

研究倫理、安全の確保に必要な事項が遵守されるよう、今後とも、教員・学生の意識を高めると同時に、必要に応じて研究計画の申請に関するルールの見直しなどを進める。

１－16　情報ネットワーク委員会

構成員　稲垣 敦、品川 佳満、坂口 隆之、樋口 幸、小玉 富瑞

本学の情報ネットワークの管理運用を継続的に実施した。また、情報セキュリティや教職員のICTスキル向上のための活動、教材作成室やメディアセンターの機器の管理を継続した。特に、今年度は、

① 財務会計業務の効率化を図るために、財務システムを新システム（平成24年4月稼働予定）に変更する準備
② SINET4への接続を行う等、学外インターネット接続環境を見直し、合理化および費用削減
③ 学生用の学内無線LANのエリアを拡大して利便性を高め、電子申請システムを構築して申請や管理を効率化
④ 情報コンセントの設置や液晶プロジェクターの交換等、看護研究交流センターのICTインフラを整備
⑤ ウィルス対策システムをクラウド化し、情報セキュリティの向上と合理化
⑥ 各種サーバのハードウエア構成を見直し、仮想化することによるシステムの合理化
⑦ 教職員および学生用の電子メール環境を見直し、変更する準備

等を行った。

次年度の予定
１）教職員および学生用の電子メールシステムの更新
２）教育におけるnekobusシステムの活用

１）　ネットワークシステムＷＧ

構成員　品川 佳満、小嶋 光明、甲斐 倫明、佐伯 圭一郎

サーバ群（WWW、メール、グループウエア、ファイル、計算機など）およびネットワーク全般（インターネット・イントラネット）の管理・運営を行った。特に、今年度はインターネット接続回線について見直しを行い、さらに基幹ネットワークスイッチのリプレイスを行った。

２）　WinユーザーサポートＷＧ

構成員　坂口 隆之、佐伯 圭一郎、河野 梢子、樋口 幸、稲垣 敦、小玉 富瑞

学内に配置しているWindows PC（教職員、情報処理教室、メディアセンター・教材作成室、看護研究交流センター、CALL用ノートPC）の管理及びユーザサポートを行った。内容としては、トラブル対応、システムやソフトのバージョンアップなどを行った。

３）　Macユーザーサポート ＷＧ

構成員　小嶋 光明、小野 孝二

教職員用および学内に設置しているMac PCの管理（トラブル対応、システムやソフトウェアの更新）を行った。

１－17　研究科教育研究委員会

構成員　甲斐 倫明、高野 政子、梅野 貴恵、赤星 琴美、関根 剛、薬師寺 啓子

大学院研究科の運営および計画に関する次の事項について審議・実施した。

1）平成23年度から大学院での保健師養成教育の開始にあたり、保健師養成記念講演会を開催し、地域の関係者への周知を行った。

2）大学院での助産師および保健師養成の指定校申請を行い、承認を得た。

3）修士課程全コースの学生を対象とした大学院特待生授業料免除規定を策定し、評価要領を整備した。

4）インドネシアからの国費留学生の博士課程への受入のための入試を行い、９月入学を初めて実現した。

5）NPコースの教育では、NPプロジェクトグループと連携し、模擬試験、実習前試験（筆記試験、実技試験）および修了試験を実施した。

6）大学院アンケート結果を受けて、課題研究指導のガイドラインを再検討し、新ガイドラインを策定した。

7）研究（課題）計画報告会、研究（課題）中間報告会の企画・運営を行った。

NPの修了生や学生の状況を個別に把握する体制の整備を進める。

１－18　看護研究交流センター運営委員会

構成員　桜井 礼子、甲斐 倫明、関屋 伸子、秦 さと子、江月 優子、佐藤 弥生、越智 勲、
草間 朋子（オブザーバー）

１．地域貢献・地域交流事業に関すること

1）看護職者等を対象として研究支援・技術支援のための講師派遣

大分県看護協会の教育事業への協力として、実習指導者講習会、認定看護管理者教育課程、看護力再開発講習会、訪問看護基礎研修　、看護研究等の研修への講師派遣を行った。また、その他の講師派遣としては、大分県専任教員再教育研修をはじめ、病院等からの依頼により、「フィジカルアセスメント」「接遇」など看護職者への研修等に講師を派遣した。

2）研究指導等

(1)施設への講師派遣

施設からの依頼に対して、年間を通して研究指導の講師２名（人間科学講座から１名、看護系講座から１名）を派遣している。今年度は１施設追加し、６施設に対して12名の講師を派遣した（講師派遣施設：大分県立病院、大分赤十字病院、大分市医師会立アルメイダ病院、国立病院機構大分医療センター、国立病院機構西別府病院、中津市民病院）。また、継続教育支援として、大分健生病院に講師２名の派遣を行った。

(2) 統計・情報処理相談窓口の開設

今年度の相談窓口の件数は合計６件であり、昨年度と同じ件数であった。相談者は、看護職だけでなく医療保健等の専門職からの相談があった。相談内容に合わせて、４名の先生方に対応していただいた。

(3) 研究成果報告会（アニュアルミーティングの公開）

学内研究成果報告会（アニュアルミーティング）は、昨年度から学外からの発表を依頼しているが、今年度は、訪問看護、NP（特定看護師）に関連して、４名の学外の方に報告をいただいた。また、報告会の広報は、実習施設等に郵送にて案内を送付したが、学外からの参加者は、昨年と同様３名にとどまった。今後、効果的な広報等について検討が必要であると考える。

3）訪問看護認定看護師教育課程の開講

開講期間は平成22年９月1日から平成23年２月末の６ヶ月間であった。今年度の修了生は６名であり、平成24年5月、日本看護協会の認定看護師を受験する予定である。

4）認定看護師教育課程公開講義の開催

公開講義の開催　認定看護師教育課程の講義の一部を公開講義とし、講演会を開催した。日時は平成23年10月1日（土）13時～16時で、講師は山岡憲夫先生（やまおか在宅クリニック院長）、講演のテーマは「在宅での終末期緩和ケア～終末期ケアにおけるフィジカルアセスメントの実践～」であった。参加者は研修生を含め188名であり、県外からの参加もあった。一般参加者は病院からの参加が多く、看護職以外の参加者もあった。アンケート結果では、テーマ・内容ともに満足度が高かった。

２．国際協力・交流事業に関すること

1）JICA「ウズベキスタン看護教育改善」プロジェクト終了後のフォローアップ

プロジェクトのフォローアップとして、JICAからの依頼を受け、平成24年2月2名、3月2名の教員がウズベキスタンに派遣された。

2）海外からの研修の受入れ

(1) インドネシアから研修員の受け入れ（アジアシードを通して）

研修員は、Medicine and Health Sciences State Islamic University of JAKARTAの看護学部教員で、Ms. Puspita Palupi（母性看護学）、Ms. Zakiyah Mujahidah（精神看護学）の２名で、研修の受け入れ期間は、平成23年10月17日（月）から11月16日（水）までの１ヶ月間であった。主な研修プログラムは、学内では、母性看護学研究室、精神看護学研究室を中心として講義やディスカッション、関連の施設見学、学生実習等の見学を行った。また、研修員のプレゼンやウェルカムパーティなどを通して、教職員や学生との交流をはかった。

(2)韓国からの研修員の受入れ

研修員は、Dr.SunJoo Jang（ソウル大学病院・精神科マネージャー、専門看護師）で、研修期間は平成24年1月5日～1月27日（金）であった。研修内容は、学内での教員と交流や施設見学（丘の上病

院、こころとからだの相談センター）等を行った。

３．継続教育事業に関すること
1）卒業生への研究支援・技術支援
(1)第7回看護研究交流センターセミナー
セミナーは、平成23年10月15日（土）13時～16時、23講義室において開催した。
全体テーマは「スペシャリストを目指して」として、２期生２名を講師として招いた。講演1のテーマは「急性期看護の魅力」で、講師は清田和弘氏（東邦大学医療センター佐倉病院ICU所属）、講演2のテーマは、「行政保健師としての歩み」、講師は秋吉智美氏（大分市役所長寿福祉課）であった。参加者は在校生19名（２年生：4名、3年生：5名、4年生：10名）であった。在校生からは、「今後の学習や活動の参考になった」、「交流の場になった」との意見が寄せられた。卒業生にはメールにて、同窓会を通して連絡を行ったが、学外からの参加はなかった。
2）卒業生への就業状況調査
今年度から、平成22年度卒業生に対して、年３回（卒後３ヶ月、６ヶ月後、12ヶ月後）の就業状況調査を実施した。返信のあったもので中途退職者はおらず、悩みながらも仕事を継続している状況が把握できた。メールを用いて調査を行ったが、不達となる卒業生もおり、いかに回答率を上げるかは課題である。今後は、就業状況調査を継続するとともに、タイムリーな支援について検討をしていきたいと考える。

４．WGの活動について
1）認定看護師コース入試委員会
メンバー：外部委員を含む7名
主な活動：平成24年度入試について、入試要項の作成、受験資格の検討等を行い、入試を実施した。
2）認定看護師コース教員会
メンバー：甲斐 倫明、桜井礼子、佐藤弥生、突田、江藤真紀、岡本香代、河野智美（外部委員）、木元ちはる（外部委員）
主な活動：訪問看護認定看護師教育課程に関して、研修生の入学・修了、カリキュラムの検討や教育課程の運営等に関して会議をもち、検討した。

５．今後の課題
・看護研究交流センターセミナーのあり方について
・研究成果報告会の学外者の参加を高めるための広報のあり方について

１）　インターネットジャーナルＷＧ

構成員　草間 朋子、甲斐 倫明、G. T. Shirley、平野 亙、定金 香里、高波 利恵、秦 さと子

広報チラシの作成、学会等各種イベントでの広報、「看護科学研究」第10巻第1号の審査・編集に関する実務が行われた。

１－19　衛生委員会

構成員　戸田 太治（１号委員）、角 匡幸（２号委員）、江藤 真紀（３号委員）、影山 隆之、越智 勲（以上、４号委員）、管野 信子（オブザーバー）

本年度、３回の衛生委員会を開催し、苦情相談及び健康相談等について再確認するとともに定期健康診断結果の概要等の報告や職場巡視を行った。

職場巡視において、指摘された地震等への防災対策（避難経路確保や転倒防止対策）について、衛生委員会委員長名で全教職員に周知を図った。

１－20　評価委員会

構成員　市瀬 孝道、甲斐 倫明、戸田 太治、志賀 壽美代

学生授業評価を除いて、2010年度と同じ評価方法に従って実施することが教育研究審議会で承認された。学生授業評価は各学年から任意に選んだ５名の学生による評価を記述方式で実施した。評価委員会が、学長指名の教員評価委員として志賀特任教授が指名された。1月16日を評価書の提出期限として、教員評価結果を2月1日に学長報告を行い、評価結果を２月に各教員に配布した。

１－21　ＮＰプロジェクト

構成員　草間 朋子、藤内 美保、甲斐 倫明、戸田 太治、江藤 真紀、小代 仁美、小野 美喜、
桜井 礼子、下田 浩、高野 政子、林 猪都子、福田 広美、宮内 信治、佐藤 俊美

ＮＰプロジェクトは平成23年度年度計画に基づき以下のような活動を行った。

１.老年ＮＰおよび小児ＮＰの大学院教育

１）老年ＮＰは２年次生４名、１年次生７名、小児ＮＰは２年次生３名がＮＰ教育を受け、多くの医師の指導のもと医学教育を学んだ。

２）老年ＮＰおよび小児ＮＰの２年次生に対しては、実習前試験として筆記試験、ＳＰを活用したＯＳＣＥを実施し、全員が合格した。その後15週間のＮＰ実習を行った。老年ＮＰ実習は総合病院（８週間）、診療所（４週間）、老健施設（２週間）、探究セミナー（１週間）を実施した。小児ＮＰ実習では、一般病院の外来・病棟、個人病院やクリニック、障害児施設の実習を行った。実習終了後、１月に課題研究発表を行い論文も完成させた。２月は修了試験を実施し、３月３日に東京で行われた日本ＮＰ協議会が実施するＮＰ資格認定試験を受験し、全員が合格した。１年次生では、入学時に自己の知識レベルを認識してもらう目的で客観臨床能力試験を実施した。また医師国家試験必修問題レベルでの口頭試問や模擬試験を実施した。９月には韓国におけるＮＰ研修を行った。

３）カリキュラムの見直しを行い、修了認定単位を43単位以上から50単位以上とした。また実習期間や進め方の見直しをした。24年度からは実習を14週間連続ではなく段階的に進めることを検討している。また、高血圧、糖尿病、ＣＯＰＤのほか認知症を追加するなど、到達目標の見直しも検討する。

４）老年ＮＰの実習施設の指導者との合同会議を実習前に行い、説明を行った。また実習終了後も実習施設の指導者を招き合同会議を開催し、実習の評価および指導者からの意見をいただき、来年度の実習の進め方の見直しを行った。

２.実習施設の開拓

老年ＮＰは学生が増えたため新たな実習施設をさらに開拓した。小児ＮＰは平成23年度からに初めて実習が開始されるため、実習施設の開拓を行った。実習施設に対して、実習の説明や、実習中の実習指導、実習終了後の報告など密に連携をとりながら進めた。

３.制度化のための活動

１）厚労省の「チーム医療を推進する検討会」に引き続き「チーム医療推進会議」が継続され、看護師業務実態調査などが行われた。また特定看護師（仮称）養成調査試行事業に申請して、実習中に実施した医行為などの調査にかかわり、厚労省の検討資料となった。

２）日本ＮＰ協議会を年４回開催し、制度化に向けた活動、また学生の質担保の教育に関する協議を行った。

３）日本ＮＰ協議会は、本年度に修了するプライマリケア領域成人・老年、プライマリケア領域小児、クリティカルケア領域のＮＰ資格認定試験を実施することとしＮＰ資格認定試験ワーキンググループが準備を行い、3月3日に試験を東京で実施し、37名全員が合格した。この試験の質保証のため、ＮＰ資格認定試験評価委員会を開催し、ご高名な４名の医師および米国のＮＰの学部長に委員になっていただいている。

４.フォローアップ会議

修了生４名が初めて社会で活動するため、大学がフォローアップのための会議を毎月開催した。主な内容は、①修了生の近況報告・情報交換、②大学教育への要望　③カリキュラム等によるフィードバックの意見、④養成調査試行事業および業務試行事業に係る情報共有⑤ＮＰ学生（在学生）との情報交換などである。フォローアップすることにより修了生の状況を把握することができ、修了生・大学の両者にとって非常に有意義である。

５.就職支援

老年ＮＰ学生４名、小児ＮＰ学生３名が就職のためのフォローをした。特に実習病院ではない施

設や県外の施設は、特定看護師についての理解が十分とは言えないこともあり、草間学長自らが院長・看護部長に説明し、就職後の活動の仕方などについて説明した。

６.ＮＰ国際会議の開催および研修会開催

１）10月28日国際会議を実施した。講師はアン・トーマス（インディアナポリス大学、ＮＰ資格認定試験評価委員）、テーマはＮＰ学生のフォローアップについて、修了生やＮＰ学生とディスカッションした。

2）平成24年3月15日第13回ＮＰプロジェクト国際会議を本学で開催した。「ＮＰ(診療看護師)･ＣＮＳ（専門看護師）･ＰＡ（医師助手）の役割文化」と題して、サンフランシスコカフフォルニア大学のChan准教授とソウル大学のSong教授、本学の小野美喜教授が米国、韓国、日本の状況についてそれぞれご講演した。

７.ＮＰ学生のための初期体験実習（early exposure）の実施

平成23年8月21日（日）～24日（水）、ＮＰ学生および李先生、桜井先生が韓国を訪問し保健診療員および、2003年度から制度化されたＮＰの活動を視察した。保健所、大学病院、コミュニティヘルスセンターなどの施設で活動する保健診療員やＮＰの活動の実際を見学した講義を聴くことで、今後の学習への動機付けとなった。

８.第31回日本看護科学学会で交流集会開催

平成23年12月2日・3日、高知で開催された日本看護科学学会交流集会において、「大学院修士課程を修了した特定看護師（仮称）の活動の現状」について、修了生自らが活動の現状を報告した。また「チーム医療の推進における看護師等の専門性の向上・役割拡大に関する研究　看護師の専門職性の発揮の実際と発展」について交流集会を行った。

９.修了生の研修システム

国立長寿医療研究センター（名古屋）がプライマリケア領域の修了後の研修期間として受け入れ可能かどうかの検討をした。ＮＰメンバー2名が国内研修で研修をさせていただき、その後２回、修了後の研修システムの検討を施設と大学で行った。

10.研究報告、論文等

１）大分県立看護科学大学競争的研究のプロジェクト研究の一環として、修了生や看護部長や指導医、看護師、患者に対して、特定看護師の活動の評価をインタビューにより調査した結果を報告した。

2）日中韓看護学会が韓国で開催され、藤内、桜井がＮＰ教育について発表した

3）全国の訪問看護ステーションの訪問看護師約1000人を対象に、死亡確認に関するアンケート調査を行ったものを論文にまとめた。

4）「看護管理」4月号に特定看護師の特集として本学関係者が執筆した。

平成24年度は、１）平成20年４月から養成しているＮＰコースの教育環境をさらに整備・充実する。老年および小児ＮＰ関連の演習、老年および小児ＮＰ実習の整備・充実、実習前後の試験、模擬試験などＮＰの質を担保した修了生の育成を行う。２)就職の支援活動および修了生の研修システム構築に向けての活動を行う。３）修了生が対象者や家族、病院や施設、地域社会にとってどのような効果があるのか研究を通してエビデンスを蓄積する。

１－22　健康増進プロジェクト

構成員　稲垣 敦、桜井 礼子、平野 亙、江藤 真紀、赤星 琴美、江月 優子、河野 梢子、田中 佳子

【研究活動】
・ 高齢者の足指筋力と足の形状とバランス能力との関連
・ 運動日記の運動継続効果
・ 特定高齢者および要支援１・２高齢者の運動機能、ほか

【事業協力】
・ 運動機能向上標準プログラム（大分県版）の効果判定調査の解析（大分県高齢者福祉課）
・ 姫島村健康推進事業（姫島村健康推進課、同診療所）
・ 大分県森のセラピー事業（県民の森セラピーツーリスム研究会）
・ 大分市森林セラピー事業（大分市産業振興課）

【地域貢献・社会貢献】
・ 転倒予防教室等を野津原地区（上詰、新町、原村、竹ノ内、矢の原）や稙田地区（田島）等で開催
・ 介護予防運動指導（大分市社会福祉センター（5/18）、竹田市保健福祉センター（6/30）等）
・ 「いきいき姫島体操」の監修、収録指導（4/25-26）
・ 佐賀関こうざき校区社会福祉協議会の地域づくりに協力し、高齢者世帯調査を支援（6/9～）
・ 温泉と運動プログラム検討会で入浴法パンフレットを検討
・ 大分丘の上病院「sports day」（7/28）、大分七夕まつり（8/6）、大分トリニータホームゲーム（9/17）、おおいたスポーツ広場（9/19）、富士見が丘団地自治会体育祭（10/23）、大分丘の上病院「丘の上祭」（10/30）、大分市野津原地区「ななせの里まつり」（11/6）等で、参加者に健康チェックや健康相談を実施
・ 富士見が丘団地夏祭り（7/23-24）、大分七夕まつり（8/6）、福祉農場コロニー久住「収穫祭」（11/3）、大分県こころとからだの相談支援センター「玉沢祭」（11/6）、富士見が丘団地文化祭（11/12-13）、大分大学附属支援学校「学習発表会」（12/10）等で健康運動ボランティア演習の一環として本学１年生全員が各種イベントに参加
・ 日本テレビ「名峰・立山の風にふかれて」（放映10/8）の取材協力
・ ソニーセミコンダクタ九州大分テクノロジーセンター「３５歳健康セミナー」（11/8）
・ 大分県スポーツ学会第３回学術集会（大分大学12/23）の企画運営、座長
・ 大分県スポーツ学会および大分県看護協会と協力して、「スポーツ救護講習会」を企画し、平成24年度より「スポーツ救護ナース」を養成予定（大分県看護協会4/28～）
・ 大分県高齢者福祉課（運動機能向上専門部会）に協力して作成した「運動機能向上標準プログラム（大分県版）」の効果判定調査を解析し、大分県介護予防運動機能向上研修会でその結果を報告（1/31）
・ 大分県「森のセラピーロード」の車椅子使用者における生理・心理的効果の実証実験（3/4）およびその結果報告会（3/28）
・ 「大分市森林セラピーロード」の運動強度・運動量測定実験のパイロットスタディ（３月予定）
・ 「大分市森林セラピートレイルランニングプレ大会」（3/4）に協力（コース監修）
・ 「大分市誕生100周年記念森林セラピートレイルランニング大会」（12/4）に協力（実行委員）、ほか

【広報、その他】
・ 第70回日本公衆衛生学会総会の紹介ブースで活動を紹介（秋田、10/19-21）
・ 「地域高齢者の転倒予防：転倒の基礎理論から介入実践まで」（杏林書院）で活動紹介
・ 若葉祭（5/14-15）、オープンキャンパス（7/17）でパネル展示
・ 本学のパンフレットで活動を紹介
・ ケーブルテレビ姫島で「お元気しゃんしゃん体操」と「いきいき姫島体操」の毎日３回放映
・ 姫島村事業のHPで事業や活動を紹介し、姫島村HPのトップページにリンク
・ You Tubeで姫島村事業のイベントやお元気しゃんしゃん体操の動画を配信、ほか

・研究テーマの検討

・研究費の確保
・研究成果の公表
・地域貢献活動の推進
・メンバーの増員と協力体制

１－23　看護系全体会議

構成員　草間 朋子（学長）、市瀬 孝道（学部長）、看護系教員全員

看護系全体会議は４月、７月、12月の年３回定例で開催した。平成21年度改正カリキュラムや平成23年度４年間の看護師教育カリキュラムの移行期であり、新たな多くの取り組みおよび評価・改善を行い、共有した。

1. ４月の看護系全体会議

1）平成22年度の実習報告について、基礎看護学実習は、看護師に同伴させる実習を取り入れた効果があった。新カリキュラムの看護アセスメント学実習では、実習時間が16時までと長くなったが、患者のケアに時間の余裕が持てたという意見や病院によって実習開始が８時と早いため、担当教員の裁量で柔軟に対応することが決まった。

2）実習関連ワーキンググループより、第１段階看護技術習得プログラムは、今年度から単位化されることに伴い、評価方法を一部変更することが報告された。また看護技術習得確認シートの電子化についても検討している。

3）今年度の実習について、地域看護学実習は今年度から学部の実習に加えて大学院での実習が加わる。新カリキュラムで新たに導入した老年看護学実習Ⅰ・在宅看護学実習Ⅰは、３年次の５月に２週間、老人保健福祉施設で実習を行う。老年看護学実習Ⅱは４年生に例年通り実施する。助産学実習は希望実習も加わり、実習期間が延長する。

4）平成23年度実習の教員配置および基礎看護学援助論の支援教員が決定した。

2. ７月の看護系全体会議

1）実習報告として、老年看護学実習Ⅱ（４年生）、３年生の新カリの老年看護学実習Ⅰ・在宅看護学実習Ⅰ、地域域看護学実習、助産学実習が報告された。

2）実習関連ワーキンググループから、第１段階技術チェックは、単位化に伴う評価方法の変更、第２段階（総合看護学）の協力依頼があった。総合実習終了概要報告が行われ、今年度から実習施設からの評価を得ることとした。

3）９月から開始される第４段階看護学実習について報告があった。①成人・老年看護学実習の変更点は、５週間の実習となり1週間はケーススタディに充てる。②母性看護学実習は、実習中に行っていた沐浴技術チェックを実習前に一斉に行う。③小児看護学実習は、並行してNP実習が行われる。④精神看護学実習は、新カリキュラムへの変更に伴い、可能な範囲で看護計画立案・評価を全員に行い、昨年度まで帰学日は2週目のみであったが、１週目にも入れることとした。

3）ケアリングアイランド予算により担当教員実習配置変更を行う。第４段階の母性・小児の講師の実習担当を各々30日間の非常勤教員が代行する。今後、ケアリングアイランドの予算で一時的に代行というのでなく、継続的に特任教員予算をつけることとなった。

4）実習指導者・教員交流会の企画をしている。看護研究交流センターで８月４日に開催予定。県病、アルメイダ、日赤から40名、本学から20名程度、自律的な学生を育てるための実習指導方法の検討をテーマとする。

3. 12月の看護系全体会議

1）平成23年度カリキュラムの基礎看護学実習、平成21年度カリキュラムの看護アセスメント学実習について報告があった。

2）実習関連ワーキンググループから、第１段階技術チェック、および第２段階（総合看護学）の実施報告、第３段階技術チェックの依頼があった。看護技術習得確認シートは、新新カリに対応したシートを見直していることが報告された。平成24年度総合実習スケジュールと来年度の実習受け入れ確認が依頼された。

3）第４段階実習終了後の報告として、①成人・老年看護学実習は新カリに伴い、1週間のケーススタディを行い学びが深まった。聴診等のフィジカルアセスメントの到達度は8割が一人で実施できていた。８月に実習指導者交流会を設けたことによって、臨床側との連携がもてた。②小児看護学実習は保育所実習も含め無事終了。③母性看護学実習はハイリスク妊産婦の増加に伴い、受け持ち対象者が少ない。④精神看護学実習は看護診断を導入し、学習効果を高めた。⑤助産学実習は無事終了。

4）平成24年度看護学実習日程が報告された。新新カリの2年次生は、12月に第１段階技術チェック

を実施すること。新カリ４年次生の在宅看護学実習Ⅱは、保健管理学研究室の担当が確認された。
5）新カリで導入した老年看護学実習Ⅰ・在宅看護学実習Ⅰについて教員アンケートによる評価を行い、高い評価が得られた。新新カリキュラムに導入することを検討する。

平成24年度は、平成21年度改正カリキュラムが新しく3年次生・４年次生、平成23年度改正カリキュラムが１年次生・２年次生に導入されるため、変更点の周知徹底とその評価を行う。また平成23年度改正カリキュラムにより４年間の看護師教育がどのような効果があるか評価できる体制を整える。
カリキュラム改正の趣旨や変更点、強化する点などを実習施設に理解していただく努力をする。

２　学内行事の概要
２－１　学年暦

前期

4月

5	入学式
6	全学オリエンテーション
7,8	新入生オリエンテーション
8	2～4年次生授業開始
8,13	健康診断
8～22	前期履修登録
11	1年次生授業開始
22	全学スポーツ交流会

5月

9～6/17	地域看護学実習, 老年看護学実習Ⅱ（4年次生）
11	キャンパスクリーンデー
14,15	若葉祭
30～6/3	老年看護学実習Ⅰ（3年次生）

6月

6～10	在宅看護学実習Ⅰ（3年次生）
13	前期後半授業開始
15	学生大会
19	開学記念日
20～7/1	総合実習（4年次生）
20～7/29	助産学実習・前半（4年次生選択）

7月

5～12	初期体験実習（1年次生）
17	オープンキャンパス
21	夏期休業開始

8月

22～9/2	助産学実習・後半（4年次生選択）
27	編入学，大学院入学試験

9月

5	夏期休業終了
5～	成人，老年Ⅱ，小児，母性，精神看護学実習（3年次生）
30	前期授業終了

後期

10月

3	後期授業開始
3～14	後期履修登録
29	看護国際フォーラム

11月

20	特別選抜試験（推薦・社会人）
～ 25	成人，老年Ⅱ，小児，母性，精神看護学実習（3年次生）

12月

1	後期後半授業開始
2	卒業研究要旨提出締切（4年次生）
9 正午	卒業研究論文提出締切（4年次生）
12,13	卒業研究発表会
24	冬期休業開始

1月

7	冬期休業終了
10～24	基礎看護学実習（1年次生）
13	大学入試センター試験準備(2,3,4年次生休講)
14,15	大学入試センター試験
30～	看護ｱｾｽﾒﾝﾄ学実習（2年次生）

2月

～15	看護ｱｾｽﾒﾝﾄ学実習（2年次生）
下旬	看護師・保健師および助産師国家試験
25	一般選抜試験（前期）および特別選抜試験(私費外国人留学生)(休講)
29	後期授業終了
29	進級試験（2年次生）

3月

1	春期休業開始
12	一般選抜試験（後期）
16	卒業式

２－２　オープンキャンパス

今年のオープンキャンパスは７月３連休中の日曜日に実施し参加者は230人であった。講堂での全体企画、講義棟の模擬授業は15分の短縮版で２回繰り返す方法で参加者が複数聴講できるようにした。また、CALLへの参加が多く好評であった。アンケート結果で、学生による案内がよかったやわかりやすかったなどがあった。１年生がボランティア論参加で案内誘導係として参加し、教員企画に２年以上の学生が協力した。今年はお茶会や運動室、メディアの参加者増があった。

２－３　公開講座

一般市民を対象として「脳の働きとその障がい～それぞれの脳、それぞれの世界」を共通テーマとする有料公開講座を4回学内で開催した。また若葉祭において、ミニ公開講座を無料で開催した。

「脳の働きとその障がい～それぞれの脳、それぞれの世界」
・脳が世界を生み出す～認知機能のはたらき（吉村 匠平；7/15）
・自閉症児の世界　（平野 亙；7/22）
・高次脳機能障害を理解する　（福田 広美；7/29）
・地域で支える認知症　（大賀 淳子；8/5）

「若葉祭」ミニ公開講座
・CALLを体験してみませんか　（G. T. Shirley、宮内 信治、田原 歩；5/14）
・簡単な理科実験（岩崎 香子、佐藤 みつよ、G. T. Shirley、田原 歩；5/15）

２－４　第13回看護国際フォーラム

大分県看護協会と共催である看護国際フォーラムを平成23年10月29日（土）に別府ビーコンプラザ国際会議場にて開催した。本年は「高齢社会における健康とケアを学際的に考える」をテーマとし、米国から１名、韓国から１名の講師を招聘、また、国内講師として本学学長の講演を企画した。参加者は281名と盛況であった。

２－５　第12回NP国際会議

平成23年10月28日（日）に、本学にて、第10回国際会議をNPプロジェクトと協力して開催した。米国インディアナ州、インディアナポリス大学看護学部から１名を講師として招聘した。

２－６　第14回大分看護科学大学・ソウル大学研究交流会

今年度は第13回NP国際会議として、「NP（診療看護師）・CNS（専門看護師）・PA（医師助手）の役割分化」をテーマに、平成24年3月15日（木）に本学23講義室で開催した。米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校看護大学院、韓国ソウル国立大学校看護大学から各１名の講師を招聘した。海外講師2名および本学教員１名の計３名が講演を行い、参加者と共に活発に意見交換を行った。

２－７　看護研究交流センターセミナー

第７回看護研究交流センターセミナーは、平成23年10月15日（土）13時～16時に開催した。全体のテーマは「スペシャリストを目指して」で、２期生２名を講師として招いた。

講演１のテーマは、「急性期看護の魅力」で、講師は清田和弘氏（東邦大学医療センター佐倉病院ICU所属）、講演2のテーマは、「行政保健師としての歩み」、講師は秋吉智美氏（大分市役所長寿福祉課）であった。参加者は在校生19名（２年生：４名、３年生：５名、４年生：10名）であった。在校生からは、「今後の学習や活動の参考になった」、「交流の場になった」との意見が寄せられた。

２－８　姉妹校学生交流

ソウル国立大学校派遣学生受け入れと交流：

ソウル国立大学校看護大学から大学院生５名、教員１名の計６名（7月17日～7月24日までの８日間）を本学に受け入れ、日本の医療・保健・福祉制度、看護について理解を深めた。本学では、学生および教員がサポートグループとして交流を支援した。

本学の学部生および大学院生の派遣：

大学院生１名、学部生６名および同行教員１名の計７名を（8月21日～28日までの8日間）ソウル国立大学校看護大学に派遣した。韓国の医療・保健・福祉制度、看護について視察等を行い、理解を深めた。報告はWebに掲載した。

２－９　若葉祭（大学祭）

平成23年5月14日、15日に開催された若葉祭にて教員イベントの募集や調整をした。参加者は２日間で約1400名を超えており大学の現在の姿を伝える場としては有用であった。実習室の廊下に掲示したパネルは、大学概要、カリキュラム、大学院概要、研究室紹介などで、変更が生じているものは更新を依頼した。

教員イベントは、学生の応援を頼み、学生と地域の人々とのふれあいの場ともなっている。実習室・実験室、カレッジホールにて、高齢者、妊婦などの疑似体験、小児、成人対象の救急法の体験、放射線の解説、身体組成の解説などによって看護大学の教育内容や設備の紹介を行った。また、アロマハンドマッサージや猫車といった来場者に親しみを持ってもらうイベントや、産学官共同開発品の紹介も企画された。同時に、研究紹介として、７人の教員のポスターの掲示を行い、オープンキャンパスの案内用紙、最新の大学パンフレットを自由配布し、一般の人々並びに、進学予定者にも大学の内容が伝わるように配慮した。

２－10　地域ふれあい祭

平成23年度の地域ふれあい祭りは、大分市主催の大分七夕祭りに参加する形で、県民との交流と本学の広報を目的として開催した。当日の参加者は教職員38名と学生36名の74名であった。竹町ドーム広場で健康チェックを実施し、約150名の身体組成や骨硬度等の測定および進学相談を行った。また、学生および教員は踊りの先生の下で練習を行い、祭当日は駅前通りで、チキリンばやし、サンバチキリン、関の鯛つり踊りを披露した

２－11　アニュアル・ミーティング

平成23年度アニュアル・ミーティングを3月2日に実施した。学内競争的資金によるプロジェクト研究2題，奨励研究3題の発表を含む学内からの演題15題，および看護研究交流センターセッションでの学外からの演題4題が発表された。なお，一般公開で開催されたが発表者を除く学外からの参加者は3名であった。

演題と発表者は下記の通りである。

1)わが国におけるCT診断件数の推定，小野 孝二
2)慢性腎臓病における骨脆弱性の要因に関する検討，岩崎 香子
3)プラスチック原料の低用量経口曝露がアトピー性皮膚炎に及ぼす影響，定金 香里
4)Clinical Nurses' Perceptions of Loanwords,Abbreviations, and Jargon and the Actual Usage of this Terminology in the Clinical Setting, G.T.Shirley
5)筋萎縮性側索硬化症患者における心拍変動の1/fゆらぎ特性，品川 佳満
6)小・中学校の保健教育における子宮頸がん予防健康教育の現状に関する研究，関屋伸子7)訪問看護認定看護師教育課程のカリキュラムと修了生への支援，佐藤 弥生
8)（看護研究交流センターセッション)療養者と家族の意思決定を尊重した看取りへの支援，佐々木真理子
9)産後の家族計画指導に対する夫婦の意識，林 猪都子
10)生活指導による交替勤務者の睡眠改善のための予備的研究，影山 隆之
11)カラーカードを用いた簡易応答確認装置，吉村 匠平
12)終末期およびクリティカルケア領域実習で目指す学生像～臨床指導者の視点から～　第2報，津留 英里佳
13)看護技術のe-learningシステム開発プロジェクト～平成23年度活動報告～，秦 さと子
14)高齢者の服薬状況と保健師による保健指導の必要性，赤星 琴美
15)健康増進プロジェクト，稲垣 敦
16)プライマリケア診療看護師のアウトカム評価に関する研究，藤内 美保
17)（看護研究交流センターセッション）ナースプラクティショナー特定看護師（仮称）の活動の実際，塩月 成則
18)（看護研究交流センターセッション）老人保健施設シェモア鶴見での特定看護師の活動，光根美保
19)（看護研究交流センターセッション）特定看護師の受け入れ施設の立場から，甲斐 かつ子

３　教育活動

３－１　平成２４年度入学者選抜状況

１）概　要

選抜の区分及び募集人員、入学者選抜試験の概略は次表のとおりである。

選抜の区分及び募集人員

学部	学科	入学定員	募集人員					
			一般入試		特別入試			
			前期日程	後期日程	推薦		社会人	私費外国人留学生
					県内	県外		
看護学部	看護学科	80 人	35 人	10 人	30 人	5 人	注 1) 5 人以内	注 2) 若干名

注 1）社会人の募集人員「5 人以内」は推薦の（県内）30 人に含める。

注 2）私費外国人留学生の募集人員「若干名」は前期日程の 35 人に含める。

入学者選抜試験の概略

（単位：人、倍、%）

区分			志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
							計	県内（率）	男（率）
特別	推薦	県内	75	75	27	2.8	27	27(100.0)	3(11.1)
		県外	21	21	5	4.2	5	0(0.0)	2(40.0)
	社会人		8	8	4	2.0	4	4(100.0)	2(50.0)
	計		104	104	36	2.9	36	31(86.1)	7(19.4)
一般	前期		124	121	40	3.0	39	22(56.4)	3(7.7)
	後期		186	95	10	9.5	8	3(37.5)	2(25.0)
	計		310	216	50	4.3	47	25(53.2)	5(10.6)
合計			414	320	86	3.7	83	56(67.5)	12(14.5)

試験教科等

区分		教科	試験期日	出願期間
特別	推薦	総合問題、面接	平成 23 年 11 月 20 日（日）	平成 23 年 11 月 1 日（火）～11 月 7 日（月）
	社会人			
一般	前期	総合問題、面接	平成 24 年 2 月 25 日（土）	平成 24 年 1 月 23 日（月）～2 月 1 日（水）
	後期	総合問題、面接	平成 24 年 3 月 12 日（月）	

２）特別入学試験

① 推薦入試

大分県内外の高等学校卒業見込者の中から、各高等学校長が推薦した生徒を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。

② 社会人入試

社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人入試を実施した。

年齢が満 24 歳以上で、社会人の経験を３年以上有し、大学入学資格を有する者を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。

３）一般入学試験

平成 24 年度大学入試センター試験で本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、分離分割方式（前期日程、後期日程）により試験を実施した。

なお、本学で実施する試験は、前期日程、後期日程ともに「総合問題」と「面接」により実施した。

<table>
<tr><th>日　程</th><th>教科名</th><th colspan="2">科　　目　　名</th><th>教科・科目数</th></tr>
<tr><td rowspan="4">前期日程</td><td>国　語</td><td colspan="2">『国語』（近代以降の文章）</td><td rowspan="4">４教科６科目</td></tr>
<tr><td>数　学</td><td colspan="2">『数学Ⅰ・数学Ａ』、『数学Ⅱ・数学Ｂ』</td></tr>
<tr><td>理　科</td><td colspan="2">「物理Ⅰ」、「化学Ⅰ」、「生物Ⅰ」から２科目を選択</td></tr>
<tr><td>外国語</td><td colspan="2">『英語』（リスニングを含む）</td></tr>
<tr><td rowspan="5">後期日程</td><td>国　語</td><td>『国語』（近代以降の文章）</td><td rowspan="4">３教科３科目を選択</td><td rowspan="5">４教科４科目</td></tr>
<tr><td>地理歴史
公　　民</td><td>「世界史Ａ」、「世界史Ｂ」、「日本史Ａ」、「日本史Ｂ」、「地理Ａ」、「地理Ｂ」、「現代社会」、「倫理」、「政治・経済」『倫理、政治・経済』から１科目を選択</td></tr>
<tr><td>数　学</td><td>『数学Ⅰ・数学Ａ』、「数学Ⅱ」、『数学Ⅱ・数学Ｂ』から１科目を選択</td></tr>
<tr><td>理　科</td><td>「物理Ⅰ」、「化学Ⅰ」、「生物Ⅰ」から１科目を選択</td></tr>
<tr><td>外国語</td><td colspan="2">『英語』（リスニングを含む）</td></tr>
</table>

注１）「国語」については、「近代以降の文章」の得点のみを合否判定に用います。

注２）「地理歴史・公民」、「数学」及び「理科」において、複数科目を受験した場合は、高得点の科目をその教科の得点とし、合否判定に用います。なお、後期日程については、「国語」、「地理歴史・公民」、「数学」及び、「理科」の全ての教科を受験した場合には、高得点の上位３教科を合否判定に用います。

注３）前年度大学入試センター試験の結果は利用できません。

注４）上の指定科目をすべて受験していなければ、本学が実施する個別試験を受けられません。

３－２　平成２４年度３年次編入学試験状況

概　要

就業看護職員等の生涯学習に対する強いニーズに対応するため、３年次編入学試験を、看護系短期大学、看護系大学又は看護系専修学校の専門課程を卒業した者及び卒業見込者を対象に、「英語」、「総合問題」及び「面接」により実施した。

募集人員

学　　部	学　　科	募集人員
看護学部	看護学科	10 人

試験の概略

（単位：人、倍、％）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県　内（率）	男（率）
大　　学	0	0	0	－	0	0(　0.0)	0(　0.0)
短期大学	1	1	1	－	0	0(　0.0)	0(　0.0)
専修学校	5	5	2	－	2	2(100.0)	0(　0.0)
合　　計	6	6	3	2.0	2	2(100.0)	0(　0.0)

試験科目等

試験科目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
英　　語 総合問題 面　　接	平成 23 年 8 月 27 日（土）	平成 23 年 8 月 1 日（月）～8 月 8 日（月）

３－３　平成２４年度大学院看護学研究科博士課程（前期）入学試験状況

１）看護学専攻

概　要

看護職の指導的役割を担う人材を育成し、地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、大学卒業者等を対象に、「総合問題」、「専門問題」（実践者養成のみ）、「実技試験」（実践者養成助産学のみ）及び「面接」により実施した。

募集人員

研究科名	課　程　名	専　攻　名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	看護学専攻	研究者養成		3 名
			実践者養成	ＮＰコース	5 名
				管理コース	2 名
				広域看護学コース	5 名
				助産学コース	10 名

試験の概略

（単位：人、倍、%）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
修士課程	18	18	13	1.4	12	7(　58.3)	3(　25.0)

試験科目等

試験科目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
総合問題 専門問題 実技試験 面　　接	平成 23 年 8 月 27 日（土）	平成 23 年 8 月 1 日（月）～8 月 8 日（月）

二次募集

概　要

8月に実施した看護学専攻実践者養成（ＮＰ・広域看護学・助産学コース）の試験結果、合格者が募集人員に満たなかったため、再度募集を行った。

募集人員

研究科名	課　程　名	専　攻　名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	看護学専攻	実践者養成	ＮＰコース	1 名
				広域看護学コース	4 名
				助産学コース	8 名

試験の概略

（単位：人、倍、%）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
修士課程	6	6	2	3.0	2	2(100.0)	0(　0.0)

試験科目等

試験科目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
総合問題 専門問題 面　　接	平成 24 年 2 月 25 日（土）	平成 24 年 1 月 16 日（月）～2 月 1 日（水）

２）健康科学専攻

概　要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を充分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、大学卒業者等を対象に募集したが、出願者がなく試験は

実施しなかった。

募集人員

研究科名	課　程　名	専　攻　名	募 集 人 員
看護学研究科	博士課程（前期）	健康科学専攻	2 名

試験科目等

試 験 科 目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
総合問題 面　　接	平成 23 年 8 月 27 日（土）	平成 23 年 8 月 1 日（月）～8 月 8 日（月）

３－４　平成２４年度大学院看護学研究科博士課程（後期）入学試験状況

１）看護学専攻

概　要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。

募集人員

研究科名	課　程　名	専　攻　名	募 集 人 員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	2 名

試験の概略

（単位：人、倍、%）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
博士課程	2	2	1	2.0	1	1(100.0)	0(　00.0)

試験科目等

試 験 科 目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
総合問題 面　　接	平成 23 年 8 月 27 日（土）	平成 23 年 8 月 1 日（月）～8 月 8 日（月）

外国人国費留学生

概　要

外国人国費留学生の志願者１名を対象に、「総合問題」と「面接」により実施し、１名を合格とした。

試験科目等

試験科目	試験期日
総合問題 面　　接	平成 23 年 9 月 1 日（木）

２）健康科学専攻

概　要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を充分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	健康科学専攻	2 名

試験の概略

（単位：人、倍、%）

区　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内（率）	男（率）
博士課程	1	1	1	1.0	1	1(100.0)	0(　00.0)

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面　　接	平成 23 年 8 月 27 日（土）	平成 23 年 8 月 1 日（月）～8 月 8 日（月）

進学相談

概　要

本学に進学を希望する高校生等に本学の入試情報や受験についてＰＲするため、看護協会や業者主催の進学相談会に参加し、県内１７カ所に教員及び職員を派遣した。全体の来場者は、６，１４７人であり、本学の説明を受けた学生及び保護者は、２３５人であった。

また、高大連携の観点から、県内外の高校等の進路指導担当教員を招いて学内で進学説明会を開催した。来場者は２９人であった。

この他、若葉祭、オープンキャンパス等の会場に進学相談コーナーを開設した。

平成２４年度大学院看護学研究科博士課程（後期）進学審査状況

１）看護学専攻

概　要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、本学大学院博士課程（前期）を平成２４年３月修了見込みの者を対象に、特別研究に関する発表、面接及び出願書類を総合的に評価して選抜した。

募集人員

研究科名	課　程　名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	若干名

審査の概略

（単位：人、倍、%）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
博士課程	1	1	1	1.0	1	1(　100.0)	0(　　0.0)

審査科目等

試験科目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
特別研究 面　　接	平成 23 年 8 月 25 日（木）	平成 23 年 7 月 19 日（火）～7 月 26 日（火）

２）健康科学専攻

概　要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を充分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、本学大学院博士課程（前期）を平成２４年３月修了見込みの者を対象に、特別研究に関する発表、面接及び出願書類を総合的に評価して選抜した。

募集人員

研究科名	課　程　名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	健康科学専攻	若干名

審査の概略

（単位：人、倍、%）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
博士課程	1	1	1	1.0	1	1(　100.0)	1(100.0)

審査科目等

試験科目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
特別研究 面　　接	平成 23 年 8 月 25 日（木）	平成 23 年 7 月 19 日（火）～7 月 26 日（火）

３－５－１　生体科学研究室

１　教育方針

当教室ではあらゆる医学の基盤となる解剖学、生理学、生化学の教育を担当する。人体を発生・分化・構造形成から生理・代謝機能、さらにはその障害や破綻によって生じる病態形成まで連関して理解・考察できる、加えて生命への尊厳と畏怖を備えた医療人を育成することを教育方針としている。

２　教育活動の現状と課題

生体構造論として細胞から個体レベルまでの人体の成り立ち（解剖学）を、生体機能論として生命活動、生活行動を営むための人体の生理機能（生理学）を、両者を連鎖させながら教育している。生体代謝論として生体分子の特徴と代謝ならびに健康増進のための食物情報について教育を行っている。教育形式はテキストに準じた講義を主体としているが、学習要点と臨床医学情報などを補填した学習材料を配布している。また、人体の構造・機能的特殊性に基づく病態生理や臨床医学的事項についてレポートを課すことで、自学自習による医学的興味と学習効果の向上を図っている。一部の学生は解剖学、生理学に強い興味を抱き、積極的に学習しているが、すべての学生の興味を大いに引き出し、自らが学ぶ姿勢を育て上げるための体制・環境や人体解剖実習教育を確立、充実させていくことが今後の課題である。

３　科目の教育活動

１）　生体構造論

１年次　前期

下田 浩

生命体としての人体の成り立ちを理解し、塞翁から組織・器官・個体レベルまで人体の構造と機能形態学的特徴を説明できることを学習目標とし、人体の正常構造について系統的に概説した。さらに、「だから・なぜ」を中心に、臨床医学的側面より見た局所解剖学、ならびに人体の解剖学的特徴と疾患の発生、病態生理との関連について概説した。加えて、自学自習、自らの考察を促すために、臨床医学的事項についてレポート作成を指導・評価した。

２）　生体機能論

１年次　前期

下田 浩、岩崎 香子

生命体としての人体の構造と機能を統合的に理解し、細胞から組織・器官・個体レベルまで生命活動、生活行動を営むための人体の生理機能を説明できることを学習目標とし、人体の生理機能について構造的特徴と連鎖させながら概説した。さらに、臨床医学的側面より見た生理機能調節システムならびに生理機能と疾患の発生・病態生理との関連について概説した。加えて、自学自習、自らの考察を促すために、臨床医学的事項についてレポート作成を指導、評価した。

３）　生体代謝論

１年次　後期

安部 眞佐子

本年度は、自然科学の基礎で教科書が指定され、生化学の基礎知識は既に学習済みと考え、栄養学の本をテキストとして講義を行った。内容は、生体物質の基本的な性質、生体物質の機能から始めたが、カタカナ語を書いて理解するという作業をすることが学生としては困難なようで、代謝に進んだところで学習が困難となったようであった。エネルギー代謝、ビタミン、ミネラルの種類と役割、食事摂取基準をまじえながら、講義をした。

４）　生体科学特論

４年次　前期

安部 眞佐子

生体代謝論のアドバンス講義として、主に疾病時の栄養学をとりあげた。栄養補給ルート、循環器疾患の栄養、消化器疾患の栄養、代謝性疾患の栄養、腎疾患の栄養、妊娠期とこどもの栄養について解説した。

５）　健康科学実験　Ⅰ　組織学１

下田 浩、安部 真佐子、岩崎 香子

細胞から組織レベルの人体の構造を熟知することは疾病の発生や病態生理を理解する上で不可欠である。本実習では、器官の組織形態を理解し、器官の構造と機能発現を説明できることを学習目標としている。組織学１では呼吸器と消化器の組織標本を光学顕微鏡を用いて自らの目で観察・記録（スケッチ）し、それを考察、完成させていくことを指導した。これより、生体組織の精緻な機能形態を把握し、解剖生理学の学習で得られた知識と統合することで細胞から組織・器官・個体レベルまでの人体の理解に努めた。記録（スケッチ）は学術的視点より評価を行った。

６）　健康科学実験　II　組織学２

下田 浩、安部 真佐子、岩崎 香子

細胞から組織レベルの人体の構造を熟知することは疾病の発生や病態生理を理解する上で不可欠である。本実習では、器官の組織形態を理解し、器官の構造と機能発現を説明できることを学習目標としている。組織学２では泌尿・生殖器と内分泌器官の組織標本を光学顕微鏡を用いて自らの目で観察・記録（スケッチ）し、それを考察、完成させていくことを指導した。これより、生体組織の精緻な機能形態を把握し、解剖生理学の学習で得られた知識と統合することで細胞から組織・器官・個体レベルまでの人体の理解に努めた。記録（スケッチ）は学術的視点より評価を行った。

７）　健康科学実験　Ⅹ　心電図の成り立ちと心拍変動解析

安部 真佐子、岩崎 香子、松本 佳那子（外部講師）

心電図は心臓の機能を評価する基本的手法である。心電図計を装着し、その記録（波形）のを読むことは看護技術の基本である。本実習では学生すべてが心電図の装着、記録を実施し、自己の記録から心機能を評価した。さらに例題として装着不備で得られた波形や筋電位が混入した波形を取得し、正常波形と比較することでその特徴をとらえることを行った。

４　卒業研究

・個体発生におけるリンパ管の発達と形態形成
・リンパ管の発達における5'-nucleotidaseの発現と意義
・男性を対象としたバランスの良い食事情報を提供するホームページの製作
・妊娠中の葉酸サプリメント摂取と児の1歳6ヵ月までの食物アレルギー発症に関する分析
・尿毒症物質フランジカルボン酸が骨芽細胞に与える影響
・尿毒症物質p-Cresolが骨芽細胞に与える影響

３－５－２　生体反応学研究室

１　教育方針

生体反応学研究室では看護の専門基礎分野の科目である病理学、薬理学、微生物学を看護の視点から理解させることを目標として教育を行っている。外的・内的要因に対する生体反応、これによって発症する様々な疾病、その発生メカニズム、薬の作用、病原微生物による生体反応を科学的に理解することによって、体の変調や病気の成り立ち、回復過程を科学的に捉え、これらから得た知識が１年次～４年次に行われる看護実習や将来の看護実践に結びつけられるように看護の基盤教育行っている。

２　教育活動の現状と課題

本年度は平成21年度カリキュラム（生体薬物反応論：２年次生）と平成23年度カリキュラム（生体反応学概論、生体反応学各論、微生物免疫論：１年次生）の中で講義を進めている。看護学を学ぶ学生はこれらの専門基礎分野の科目の理解度が低く、２～４年次での実習に結びつけられていない場合が多い。また２年次で行なっている進級試験でもこれらの科目の正答率は低い。それ故に、看護実践を行ううえで、様々な外的、内的要因によって起こる疾病・病態や薬理作用を十分に理解しておくことの重要性を認識させ、より看護の視点からこれらの科目を理解できるように講義を進めることが重要である。教育上の工夫として、生体薬物反応論では基礎的な薬物の作用から臨床に用いられている薬物について幅広く講義を行なっている。しかしながら現状では３年、４年になっても生体薬物反応論の単位が取得できない学生がいる。マンツーマン方式で学生が理解できるまで教育、再試験を行っている。生体反応学各論では、看護専門基礎の看護疾病病態論の講義に繋げるために、系統別疾患を病理学総論の病気の基本事項と結びつて理解させるのに努めている。

３　科目の教育活動

１）　生体反応学概論

１年次　後期前半

市瀬 孝道

本講義は一般的には病理学総論と言われものである。病気の本体や成り立ち、修復過程が理解できるように、以下に示す病気の基本となる病変について具体的な疾患名や臨床症状等を挙げながら講義を進めた。学生が各種疾病の成り立ちや病態を理解し易い内容の易しい教科書を選択し、更に教科書を分かりやすく整理したプリント配布して講義を進めた。講義内容は以下に示すとおりである。退行性病変、進行性病変、代謝障害、循環障害、炎症、免疫、感染症、腫瘍、先天異常、小児・老人性疾患。

２）　生体反応学各論

１年次　後期後半

市瀬 孝道

これまで行って来た生体反応学演習を本年度開始された新カリキュラムから生体反応学各論とし、系統別に発生する疾病（病理学各論）についての講義を行った。病理学総論から各論へと疾病の基本から系統別疾患の病態を十分に理解させるのに努めた。講義内容は以下に示すとおりである。消化器疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、泌尿器疾患、生殖器疾患、内分泌疾患、血液疾患、脳・神経疾患、運動器、感覚器。

３）　微生物免疫論

１年次　後期

吉田 成一、西園 晃

微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について、および病原微生物に対する生体の防御反応について、理解させることを主要な目標として、以下の項目について講義した。微生物の特徴、消毒・滅菌法、感染症、各種感染症とその原因、免疫学、アレルギー、自己免疫疾患、腫瘍と免疫。講義プリントを配布することで学生の学習がしやすくなるよう努めた。

本年度より、テキストを変更し、臨床内容を導入に用いることで学生の興味を高めるよう努めた。興味関心が高まり、学習効果に反映されたと思われる学生群がいた一方、著しく、成績不良の学生もおり、本講義においては、修得状況の二極化が進み、次年度以降の課題である。

４）　生体薬物反応論

２年次　前期

吉田 成一

疾病の薬物治療に用いる医薬品の作用原理に主眼を置き、薬物を投与した際の生体反応（主作用及び副作用）を中心に講義した。特に総論を始め、薬理作用の基礎知識の正しい理解が可能なような講義を行った。教科書を２冊指定するとともに、臨床での話題を織り交ぜたが、２年次生が医薬品に関する事柄を実習で体験していないため、効果は不十分であった。また、出席率が低いことと、講義範囲が広範囲にわたることから、復習を行わず、修得度が低い状況が続いている。本年度は極めて学習状況が不良の学生が多数となり、複数回、修得状況の確認を行ったが、本講義内容を理解できたと判断できる状況にはならない学生が多数存在した。しかし、そのような学生であっても単位を認定せざるを得ない状況となったのは、残念であった。次年度以降は本年度のような状況にならないようする必要がある。

５）　病態特論

４年次前期、１単位

市瀬 孝道、卜部 真吾

これまで教科書を中心として病気や病態を講義してきたものを、本講義では臓器の肉眼観察や、組織の顕微鏡観察をすることによって、より深く病気を理解させることを目的として行っている。例年どおり、県立病院の臨床検査部において、１回目、２回目の講義では炎症や代謝障害を起した臓器、種々の臓器に発生した良性腫瘍や悪性腫瘍の肉眼観察や病理組織標本の観察を行い、実際に眼下に起きている病態を理解させた。３回目の講義では卜部先生によるスライドによるプレゼンテーションも取入れた。

６）　健康科学実験　III 血液検査

定金 香里

貧血・感染症に関わる血液検査のうち、ヘマトクリット値の測定、CRP検査、赤・白血球数測定、末梢血血球・組織球の形態観察を行った。実習では、ラット静脈血を検体としたが、検査方法はヒトの血液検査に準じて行い、それぞれミクロヘマトクリット法、CRP定性測定法、視算法、ディフクイック染色法を用いた。学生各自が標本作製を行ったのち、貧血かどうか診断した。また診断基準に関する考察も行った。

７）　健康科学実験　IV　基礎微生物学実験

吉田 成一

実験内容：環境中に細菌が存在することを確認させる目的でヒトの表皮、日用品に常在する細菌を培養し、観察した。さらに手洗いによる指先に付着している細菌数の変化を測定した。また、温度によって細菌の増殖に差があることを視覚的に認識した。細菌が抗生物質により発育が阻止されることを認識させる目的で薬剤感受性試験を行った。各種病原微生物の抗生物質に対する感受性を測定し、臨床使用時での使い分けについて考察した。

８）　健康科学実験　V　ラットの解剖

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

ヒトの構造を知る一手段としてラットの解剖を行った。ラットを開胸、開腹後、系統立てて臓器・器官を観察し、臓器の相対的位置や相互の関連性について理解させた。また、各臓器を摘出して、色、大きさ、重さ等を測定、スケッチすると共に生きた臓器を実際に触れてその形状や感触を理解させた。スムーズに解剖が進行する工夫として、先にデモンストレーションを行いながら十分に方法や内容を説明した。また、心脈管系の図を白板に詳しく描き、実物と比較しながら理解させた。

４　卒業研究

以下の６テーマを行った。

1. 黄砂から分離不活化した微生物の気管支喘息増悪作用の検討
2. 発生地が異なる黄砂の気管支喘息増悪作用に関する比較研究
3. 黄砂の成獣・胎児期曝露による雄性生殖機能への影響とそのメカニズム解明
4. 黄砂の胎児期曝露が出生仔の免疫担当細胞に与える影響
5. 黄砂の経皮曝露がアトピー性皮膚炎に及す影響
6. 好乾性真菌アスペルギルス抽出物を長期吸入したことによるアトピー性皮膚炎への影響

３－５－３　健康運動学研究室

１　教育方針

健康運動学研究室では、まずは体を動かすことの楽しさを体感するとともに、生物の進化等を通して、人間が機能を正常に維持するには、ある程度の運動が必要であることを知り、個人、社会、人類にとって運動がいかに重要であるかを理解することを目指している。また、理解するだけではなく、在学中に自分の健康・体力を維持・増進するために運動量を確保し、将来のために自分に合った運動習慣を身につけることも目指している。学生時代から健康と運動の関係を自分の問題として捉えることにより、将来、自分の健康管理に役立つだけではなく、他者（患者、地域住民、生徒、家族）に対して実感を伴った看護、保健指導、健康教育、保健事業の立案および実施できるようになる。また、高校までは科学的知見を理解し、覚えるという学習をしてきているが、「科学」自体については教育されていない。そこで、学部及び大学院の授業や研究指導の中では、科学自体や科学的なものの見方や考え方などを学ぶ機会を取り入れている。一方、学生が学外に出て現実の社会に接する機会も重視している。

２　教育活動の現状と課題

授業では、看護系の授業や実習を視野に入れて、学生のレディネスにも配慮しながら、授業を構成してきた。今後も、自己から他者へ、過去から未来へ、体験から指導へ、経験から理論へ、個から集団へ、基礎から専門へという流れを考慮して、体験と科学的知見に基づいた教育を進めることを意識している。

大学時代は一人暮らしになり、食事、運動、休養がおろそかになる場合も多い。さらに、本学では体育に相当する授業は１年次だけであり、運動クラブに所属する学生も少ないため、体力の低下や体脂肪率の増加も心配される。男子学生の中には放課後に自主的にスポーツを行っている学生もいるが、全体的には思いっきり体を動かす機会が少なく、ストレスが溜まりがちで、自律神経活動の低下やアンバランスも危惧される。このような点を考慮して、授業では実習を入れて体を動かす機会を増やす努力をしている。今後も、学内外の人的資源を活用して、学生の運動量や体験を増やし、さらに、２年次以降の選択科目として自主的にスポーツを行う科目等について検討したい。

特に、今年度から１年生の健康運動ボランティア演習が始まり、多くの教職員の支援のお陰で学外の多くのイベントにボランティアとして学生が参加するようになった。当日の学生の様子やレポートを読むと有意義な体験が出来ているようであり、看護学実習と同様に学生が学外に出てゆく重要性や必要性を再確認した。この授業では、学生が複数のボランティア体験から何かを見つけ出すこと、いわゆる帰納的プロセスを重視しているのが特徴である。今後、ボランティアイベントを開拓して、イベントの選択肢とボランティア参加回数を増やしていくとともに、学生が自分でボランティアを探して参加するような方向性も検討したい。平成24年度は、こちらからも複数のイベントを提供するが、指定回数に達しなかった場合は自分でイベントを探して参加させるような形式を考えている。

３　科目の教育活動

１）　健康運動ボランティア演習

１年次　前期

稲垣 敦、大賀 純子

はじめにグループに分かれてTAKIOソーラン節の踊りを練習し、グループ毎に発表した。次に、12のイベントを提示して希望調査を行って調整し、各学生が３つのボランティアを体験し、ボランティア参加毎にレポートを作成した。今年度は体験を通した議論をする時間がとれなかったため、来年度の授業の中で実施予定である。参加している学生の様子やレポートから有意義な体験ができているようである。

２）　健康運動

１年次　後期

稲垣 敦

運動の楽しさや健康の素晴らしさを体感するため、多くのレクリエーションやニュースポーツを実施した。運動量の確保にも充分に配慮した。今年度は外部講師の都合で、大分トリニータによるフットサルの指導はなく、ヨガも行えなかった。また、福祉レクリエーション関係のビデオを視聴し、社会や個人におけるレクリエーションの重要性、看護や介護における必要性や可能性について考えた。

３）　健康運動論

２年次　前期

稲垣 敦

生物の進化に伴う形態や機能の変化、加齢や不活動による体力の低下などに関する科学的根拠に基づいて、体力や運動の重要性や健康との関連性を講義し、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても解説した。

４）　健康運動学演習

２年次　後期前半

稲垣 敦

生物の進化に伴う形態や機能の変化から、立つことや二足歩行の意味を考えた。また、看護に関するボディメカニクスやスマートダイエットを解説するとともに、科学的根拠に基づくストレッチング、エネルギー消費量、骨密度、身体部位別の体脂肪率・筋量等の測定実習も行った。

５）　運動療法特論

３年次　後期後半

稲垣 敦

はじめに健常者の健康運動や厚生労働省の運動の指針2006等を解説した。概論では、運動処方の流れや心電図についても講義し、各論では広く運動療法について疾患・障害別に講義した。選択科目であるが受講者が80名と多かったため、実習としてはシングルマスター試験を行った。

６）　運動指導特論

４年次　前期前半

稲垣 敦、大賀 淳子

他の研究室の教員に協力して頂き、精神障害者の運動表現療法、子供のレクリエーション、介護予防運動、肩こり・腰痛体操、ネイチャーゲーム等を体験し、指導法について講義した。外部講師の都合でヨガは行えなかった。

７）　健康科学実験　Ⅸ　呼吸循環器系持久力の測定

稲垣 敦

自転車エルゴメーターを用いた最大下運動負荷時に心拍数と運動負荷を測定して、心拍数と仕事率の関係、自転車の機械的効率、仕事量と酸素摂取量の関係から最大酸素摂取量を推定し、呼吸循環器系持久力を評価した。実習ではペアを組み、被検者と検者の両方を経験できるようにし、実験中は全ての学生に対し個々に指導した。また、テキストに加えて、測定および計算の仕方を説明したレポート用紙を準備した。説明では、患者や高齢者の運動指導を想定し、安全性や倫理に関して注意すべき点を含めた。実験にあたっては、年齢、運動習慣、運動歴、現病歴や既往歴、当日の体調に配慮した。計算方法のわからない学生には、個別に指導した。

４　卒業研究

１）運動日記の運動継続効果
２）足浴の精神的・身体的効果：全身浴と比較して

３－５－４　人間関係学研究室

１　教育方針

人に関する理解を基盤とし、人と喜びや苦しみを分かち合うとともに、自他の独自性を尊重することのできる豊かな人間性を養うため、心理学の知見をベースとした、人間関係に関わる基本的な知識やスキル、人間の行動や発達についての理解・洞察を深めるために必要な知識、精神看護学の基礎となる知識の習得を目的としたカリキュラムを編成している。各科目の具体的な教育目標は以下の通り。１）人間関係を形成し維持する方法についての体験的理解（「コミュニケーション論」）、２）カウンセリングの基礎となる理論の理解とコミュニケーションスキルの習得（「カウンセリング論」）、３）環境を認識する存在としての人の機能・人の発達についての基本的知識の習得（「人のこころの仕組み」）、４）人間を社会や集団内の人間関係を通して理解する視点及び対人援助に関する基本的な知識の習得（「人間関係学」）、５）対人援助技術の習得（「行動療法論」「カウンセリング論」、６）発達心理学の知見をベースとした発達障がいの理解（「発達心理学」）、７）自分自身の在り方や他者とのコミュニケーションの在り方を課題遂行を通して体験的に理解する（「人間関係学演習」８）看護と関わる心理学的知識についての理解（「人間関係学」「行動療法論」「カウンセリング論」「発達心理学」）、８）人間と社会について幅広い観点から学ぶ（非常勤担当科目）（「音楽とこころ」「美術とこころ」「哲学入門」「経済学入門」「法学入門」「人間と社会」「文化人類学入門」「保健医療ボランティア論」「大分の歴史と文化」）。

授業に際しては、個々の心理現象を看護実践や各自の日常生活での体験と関連づけ、援助スキルや心理検査などを体験に基づいて理解できるようにするため、授業時間内に演習を行ったり、学生が話し合う時間を確保している。授業終了毎に学生に感想・コメントの記述を求め、学生の授業理解程度や授業評価の一助としている。

２　教育活動の現状と課題

人間関係学研究室としての基本的な教育目標、人のこころに関する基本的な知識の習得、集団レベル・個人レベルでの人間関係の理解、対人援助技術の理解、についてはこれまで同様である。授業評価アンケートや授業終了後のコメントから得られたデータに関しては、備品の整備・教室変更・演習時のボランティアの活用など、教育活動の改善へと結びつけている。

他の看護系教室の講義との連携・教育内容の調整を進めること、学生の時間外学習を支えるオンライン学習システムの構築が、今後の課題である。

３　科目の教育活動

１）　人のこころの仕組み

１年次　前期

吉村 匠平

外界の対象を感覚器官を通して認識する存在としての人の機能の特徴、２年次前期「発達心理学と行動療法」の理解に必要な学習心理学の基本的な知識、人の発達のプロセス等について、小実験・DVD視聴を併用しながら授業を行った。毎回くじ引きによる座席指定を行い、講義時間中にペアで行うグループワークを積極的に取り入れた。またカラーカードによる意思表示を行わせ、教室全体で意見や考えを交流させながら講義を進めた。学生から寄せられたコメントについては、それを全体にフィードバックすることで、周囲の学生の興味関心、理解状況を理解することができる環境を構築した。社会構成主義的な授業観に基づき、授業者が終了時にまとめる形を取らず、受講者が毎回レポートを作成し、それを採点して返却する形式をとった。

２）　コミュニケーション論

１年次　前期

関根 剛

昨年と同様、コミュニケーションにおける非言語的要素と言語的要素の重要性を中心に３回のグループエクササイズ、行動観察のまとめ方と計画と実施、プレゼンテーションの技術について、講義と演習を行った。具体的には、相手の発している情報に気づく事、受け取った情報を自分がどのように理解しているかについて知ること（自己の振り返り）、相手に対して適切な情報を発信することである。コミュニケーションは、これら受信－理解－発信の繰り返しであることを、プロセスレコードを例に示しながら，体験的にりかいさせた。ほかに、４年間を通じて、学生はグループワークを行う機会が多いことから、リーダーシップに関する講義も行っている。

３）　人間関係学

１年次　後期

吉村 匠平

前年度に引き続き、２クラス編成で授業を行った。毎時くじ引きによる座席指定を行い、ペアワークを積極的に行った。発言単位を個人ではなくペアとすること、発言に対し平常点を付与したことなどから、参加者が積極的に発言し、意見を交流することができた。問題演習の際には、小教室・40名前後での講義であったことから、机をコの字型に配列し、カラーカードによる意思表示を求め、受講者の理解状況を授業者と受講者の双方がリアルタイムで確認出来るようにした。学生から寄せられたコメントについては、それを全体にフィードバックすることで、周囲の学生の興味関心、理解状況を理解することができる環境を構築した。授業者が終了時にまとめる形を取らず、受講者が毎回レポートを作成し、それを採点して返却する形式をとった。

４）　カウンセリング論

１年次　後期

関根 剛

昨年同様の構成である。前半はカウンセリングスキルスキルに関する講義及びロールプレイを実施した。昨年度からカセットテープをＩＣレコーダーに切り替え学生の保存再生などの利便性を向上させている。音声添付については、メールボックスを圧迫することから実施しなかった。後半は、精神分析から認知行動療法などのカウンセリング理論および不登校や非行、犯罪・災害被害者への危機介入など、看護職が関わる可能性があるテーマを中心に解説した。

５）　行動療法論

２年次　前半

関根 剛

認知行動療法、行動分析に関する講義をおこなった上で、学生自身の日常的な健康行動など改善したい行動をターゲットに、行動改善を試みるプログラム作成および実施を行わせた。これらにより、体験的に行動療法的アプローチを理解することをめざした。

６）　人間関係学演習

２年次　前期後半（集中講義）

吉村 匠平、関根 剛、佐藤 みつよ

二年生対象の集中講義。60名が受講登録し、36名が受講した。受講者が、自分自身の在り方や他者とのコミュニケ-ションの在り方を、課題の遂行を通して振り返ることを目的として、構成的エンカウンターグループ、グループによる問題解決、フォトコラージュ作成～相互観賞、ディベートを行った。

７）　発達心理学

２年次　後期前半

吉村 匠平

言語、身体運動機能の発達原理について講義を行った後に、発達障害を社会的、歴史的な視点から理解する枠組みについて、個々の体験の振り返り～他者との交流を通して構築した。その上で広汎性発達障害を持つ対象者との関わり方について、環境構成を中心に演習を行った。

４　卒業研究

・電子メールにおける絵文字使用が送信者の印象形成に及ぼす影響
・愛着の定義の両面性に関する文献的研究
・大分市における医療機関のシンボルマークの分析
・看護師のカラーコンタクトレンズ装用が印象形成に与える影響
・チェック方法の違いがヒューマンエラー防護に与える影響
・作業における背景音の効果に関する文献的研究

３－５－５　環境保健学研究室

１　教育方針

環境保健学研究室では、環境保健学が直接カバーする知識や問題以外に、物理、化学、生物、統計学に関係する基礎的事項から社会的な問題まで広くカバーすることで、学問の奥深さを学ぶ機会を提供している。学部教育では環境保健学概論に加えて、環境保健学詳論がスタートし、基礎的な項目と社会的な問題との関連を意識しながら、学問に対するモチベーションを育成する講義となるようにしている。健康と環境は、看護の基礎にある科学的な見方として不可欠であること、健康がどんな要因と関係しているのか、そのことを知るためにどんなアプリーチがとられていて、また、どんな考え方で健康に対処しようとしているのかを環境保健の講義から学ぶように指導している。一方で、放射線は医療において不可欠な存在であることから、放射線の基礎知識から健康影響、医学利用まで保健医療に携わる者が身につけるべき知識を教授している。

２　教育活動の現状と課題

１年次から２年次に進学すると、他の科目の負担が大きくなるために、国家試験との関係が比較的薄い内容であるためか、環境保健に対する関心が低下することは従来からの課題である。２年次の環境保健学詳論では、参加型の授業を取り入れ、環境と健康の関係を自ら調べ考えるよう指導した。４年次の選択科目である「環境倫理学」は選択する学生が年々少なくなっているため、平成23年度入学生からは、他の科目と統合して「環境疫学・生物学演習」に衣替えをし、演習方式で環境保健全体に関係する課題へのアプローチを学ぶことにした。

３　科目の教育活動

１）　環境保健学概論

１年次　前期

甲斐 倫明、小嶋 光明、小野 孝二

環境保健全般をカバーすることではなく、基本的な考え方や健康との関係を理解するための方法を中心に講義をしている。講義内容は次の通りである。1)公害から環境リスクへ：歴史、2)現代の環境問題、3)健康影響の考え方、4)がんの生物学、5)がん以外の健康影響、6)人における発がん、7)環境疫学:基礎、5)環境疫学:事例、9)安全性試験１、10)安全性試験２、11)ライフスタイルと健康、12)環境リスク論、13)環境リスク心理学、14)環境リスクの諸問題とまとめ、15)試験および解説

２）　環境保健学詳論

２年次　前期後半

小嶋 光明、甲斐 倫明、小野 孝二

環境と健康との関係を方法論と事例を通して学ぶために、学生に参加型の授業を導入し理解を促す配慮をした。講義内容は次の通りである。
1)環境と健康、2)身の回りの環境因子、3)疫学データ解析、4)リスクアセスメント、5)リスク比較、6)リスクと便益、7)温熱環境と気圧、8)電気と電磁界、9)騒音、振動、悪臭、10)室内汚染、11)上水道と下水道、12)食品添加物と食品中の残留物質、13)食中毒、14)試験

３） 放射線健康科学

２年次　後半

甲斐 倫明、小嶋 光明、小野 孝二

放射線と健康との関係を理解するために、放射線の物理、生物、医学、リスクまでの広範囲の知識をコンパクトにして講義を行っている。その際、物理や生物は同時期に実施している健康科学実験と合わせて理解できるように配慮している。また、医療における放射線利用に対する基礎知識を持たせる。講義内容は次の通りである。
1)放射線影響と放射線防護の歴史、2)放射線とは何か、3)放射性同位元素と放射能、4)放射線と物質との相互作用、5)放射線の線量、6)身近な放射線・放射線源、7)放射線の生体応答（DNA損傷と突然変異）、8)放射線の生体応答（染色体異常と細胞死）、9)放射線の健康影響（確率的影響）、10)放射線の健康影響（確定的影響）、11)放射線リスクの評価とその不確かさ、12)安全の考え方と放射線防護基準、13)患者のための放射線防護、14)医療における放射線利用、15)試験および解説

４） 環境保健学演習

２年次　後期後半

甲斐 倫明、小嶋 光明、小野 孝二

課題を与え、課題ごとにレポートにまとめる作業を教員が支援するやり方で演習を行っている。課題作業に入る前に、講義を行い、ポイントを理解させる。課題は基本的な理解を必要とする内容を選び、コンピュータのエクセルと用いて計算とグラフ作成を行う技術も合わせて学ぶように工夫してある。課題は次の通りである。1)データのばらつきと基準値、2)血圧データの分布と正規性の検定、3)身長/体重/BMIデータの分布と正規性の検定、5)がん統計の年齢調整死亡率の年次変化、6)がん統計の標準化死亡比の県別比較、7)生命表を用いた平均余命の計算

５） 環境リスク論

３年次　後期後半

小嶋 光明、甲斐 倫明

「リスク論」は現代の環境問題の背景と複雑さに関係して生まれた理論である。環境問題の解決へ向けた取り組み等について、リスクをキーワードに、社会・政策的な側面も交えて論じた。テーマとして取り上げたのはいずれも現在進行形の問題であり、学生に多角的な視点を提供するとともに、最新の情報を伝えるよう努めた。講義内容は次の通りである。1)環境リスク論とは、2)BSEのリスク、3)遺伝子組み換え食品のリスク、4)食品添加物・残留農薬のリスク、5)鳥インフルエンザのリスク、6)化学物質の発がんリスク、7)自然災害のリスク、8)地球温暖化のリスク

６） 環境倫理学

４年次　前期

甲斐 倫明

環境倫理が看護とは距離のある名称であることから学生の関心は高くないため、生命倫理との比較を交えながら、現代の環境倫理問題を考える講義にしている。講義内容は次の通りである。1)倫理とは、2)代理母などの生殖問題、3)現代の生命倫理学の考え方、4)人間中心主義と生命中心主義、5)現代の環境問題と倫理、6)自然の生存権の問題、7)世代間倫理の問題、8)地球全体主義

７）　健康科学実験　VI　放射線

小野 孝二

本実験では、自然環境中の放射線の存在と量とを理解させた。また、医療の現場で一般的に用いられる診療用X線照射装置からの散乱線を定量的に測定し、放射線防護について考察した。

８）　健康科学実験　VII　空気汚染と水質汚染

甲斐 倫明

医療では様々な測定が行われ、その測定値をもって判断が行われる。測定値は、測定の原理や測定条件、あるいは測定器の特性などから同じ対象を測定しても同じ数値を得るとは限らない。本実験を通して、測定値のもつ誤差および影響を与える因子よる変動を区別して理解し、測定データの読み方を学ぶ。実験内容は次の通りである。1)血圧測定の誤差と変動、2)体温測定の誤差と変動、3)血液酸素飽和度測定の誤差と変動

９）　健康科学実験　VIII　染色体異常

小嶋 光明

染色体の実体と染色体異常の発生機序について理解を深めるために、正常染色体および放射線によって誘発した異常染色体の標本を、学生一人一人に検鏡させた。また、染色体異常が疾患の原因となり得る例としてダウン症候群と慢性骨髄性白血病を取り上げ、核型分析等を通して異常染色体を同定させた後、疾患との関係について簡単な解説を加えた。

４　卒業研究

・日本と欧米諸国の乳がん罹患率の年齢変化分析からみた閉経年齢による影響
・放射線の繰り返し照射は二動原体染色体異常の出現頻度を増加させるか？
・放射線誘発肺がんリスクに及ぼす喫煙習慣の影響に関する考察
・社会診療報酬データからのCT画像診断利用の実態把握と米国、英国との比較
・繰り返しX線照射によるDNA初期損傷の動態
・X線照射したC3H系マウスの骨髄細胞と末梢血リンパ球におけるDNA初期損傷の比較

３－５－６　健康情報科学研究室

１　教育方針

情報の収集と分析および発信のための知識と技術を修得し、科学的根拠に基づいた看護実践の基礎とする目的で教育にあたっている。また、学生時代から就職語を通じた学習と情報処理のツールとしてのICT関連のスキルを早期に獲得できるように配慮している。

また、単なる理論および情報処理技術教育でなく、看護の様々な場面において、自らが考えるための能力を養うため、具体的な事例も多数交えながら教育を行っている。

２　教育活動の現状と課題

平成21年度カリキュラムにおいては、本研究室担当科目は指定規則上保健師領域の科目であり、講義演習において想定する事例として保健師の活動場面を多数扱っていた。しかし、平成23年度カリキュラムとなった１年次生については、看護師のみの養成であり、事例として保健師分野を除き、より一般的な形で扱っている。講義・演習の内容については看護師教育の領域としてより適切な事例を収集して扱い、今後の学生がより興味を抱き理解を深められるように、改善を進めていく必要がある。

また、学生においてはPCを中心としたICT機器の取り扱い能力は比較的良好な状態であるが、情報の分析・評価のための基礎的能力としての数的処理や読解能力、論理的判断の知識・技術が低下傾向にあることに対応し、「自然科学の基礎」中で担当する数学分野のコマ数が４コマへと倍増した部分を活用して、それら能力の向上を図っているが効果を十分に感じていない。講義、演習等での小レポートや提出課題などで学生の状況をきめ細かくチェックすることを進め、一定の教育上の効果を認めたが、今後は小レポート等へのフィードバックから、より学習効果を高める指導を行う必要があろう。

３　科目の教育活動

１）　健康情報学

１年次　前期

佐伯 圭一郎

本年度より看護師のみの教育となるため、保健統計・疫学の領域において保健師に特に必要とされる部分を削り、内容を精選してより一般的な事例を増やして教育を行った。

内容としては、集団の健康情報を理解するための様々な指標の意味と現状、根拠に基づいた看護の基本的な考え方としての疫学の諸理論を教授した。みずから、保健統計指標の現状について情報収集を行うことや疫学データの基本的な解析については、健康情報処理演習において実施し、理解の確認と定着を図った。

２）　生物統計学

１年次　後期

佐伯 圭一郎、中山 晃志

統計学の基本的な考え方と知識を教授した。記述統計から推測統計といった講義内容の時間配分は例年通りであったが、特に推測統計に関しては極力数式や計算を排し、統計的な考え方を身につけるべくじっくり考える時間を増やすためである。

実際のデータ解析部分は健康情報処理演習において実施し、統計学の実践能力の獲得にも配慮したが、教育の主眼を統計手法を適切に選択できること、ならびに誤用や乱用を避ける力を養うことにおいており、そのための小レポートを課した。

３） 健康情報処理演習

通年

品川 佳満、坂口 隆之、佐伯 圭一郎

パーソナルコンピュータを活用して、学習や保健医療の場における情報管理の道具として役立てるための技術について演習形式で教授した。主な演習内容は、ネットワークの利用（WWW、メール、ファイルサーバ、コミュニケーションサーバ）、ワードプロセッサ、表計算、プレゼンテーション、ホームページ作成、画像処理、データベースの利用、統計データの分析である。また、演習に加えて、実際に医療現場で扱う情報システム（オーダリングシステム、電子カルテシステムなど）について講義形式で解説を行った。さらに、コンピュータの技術的な面だけでなく、ネットワーク、情報セキュリティ、情報モラルなど情報を扱う上で重要となる知識についても解説を行った。

４） 応用情報処理学

３年次　後期後半

佐伯 圭一郎

高度な統計手法について、グループ単位で自ら手法について学び、実際にデータ解析を行った。また、その手法についてプレゼンテーションを行い、プレゼンテーション能力を養うとともに自らが扱わなかった統計手法についても学んだ。

今年度は34名の履修者が5グループに分かれて、以下のテーマについて学習を行った。

・因子分析
・コレスポンデンスアナリシス
・GISの手法
・尺度の作成
・生存時間分析

統計手法自体の学習もだが、事例データを解析し、その結果を解釈して報告するというプロセスは看護研究の基礎的な演習として有効であった。

５） 実務情報処理学

４年次　前期後半

佐伯 圭一郎

主に保健師領域におけるトピックを扱い、講義各回で完結する形式をとった。扱った内容は以下のとおりである。

・疫学および保健統計、統計学の復習
・尺度の作成と評価
・デザインの考え方と事例：外部講師（デザイナー）による講義と演習
・因果推論の手法
・統計パッケージ演習応用編

履修登録者は24名と少数であったが、個別の理解を確認しながら、実務における応用力を養った。

４　卒業研究

患者支援におけるICT活用の現状と効果に関する文献的研究　－専門職者と患者の双方向システムに着目して－
医師と看護師の協働に関する文献的研究
更年期女性に対する健康に関連した情報提供のあり方
医療情報の取り扱いに関する事故事例の分析　－流出防止のための対策とは－
敷地内禁煙実施による喫煙率の変化に関する研究
献血率低下の要因に関する研究　－都道府県の違いに着目して－
果物のアルツハイマー型認知症予防効果　－日米欧の疫学調査データより－

３－５－７　言語学研究室

１　教育方針

言語活動の四技能であるSpeaking, Listening, Reading, Writingをバランスよく伸ばすことを念頭に、将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くよう、実用的で易しい英語コミュニケーション（Speaking, Listening）に取り組ませている。また、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるために、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施している。更に、教室内での活動を課外でも維持継続できるよう、CALL（Computer Assisted Language Learning:コンピューターを用いたウェブ学習システム）によるTOEIC対策英語学習プログラムを実施している。

２　教育活動の現状と課題

ネイティブ・スピーカー教員の授業では、自作の教材を毎回配布し、学生はパートナー同士、または、小さなグループで英語コミュニケーション（Speaking, Listening）を練習する。１年次生の講義内容は、一般的な日常生活の話題（Food, Shopping, Home, その他）、２年の講義内容は、看護英語である。各話題について３－４週間かけてじっくり練習を行い、同じ学生が毎回同じグループに含まれないように配慮することで、新鮮な気持ちで楽しく学習できるよう工夫している。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換などの言語活動を行う。また、１年次生前期の授業では、CALL学習を必修授業として取り入れている。授業を二部構成とし、上記の自作教材を用いたグループでの英語コミュニケーションの練習と、CALL学習を行なう。１クラスを２グループに別け、グループ毎に交互に講義を行っている。両者をバランスよく組み合わせ、学生の英語運用能力の維持、向上を目指す。

日本人教員の授業では、授業を二部構成とする。前半では、英文テキストの日本語訳を最初に配布し読ませることで、テキストの内容を理解、把握させ、それをもとに、課題となるテキスト部分についての語彙、文法、発音についての講義を行う。こうした基本的な理解を基盤として、ネイティブ・スピーカーの発話を音声CDで確認し、実際に発声の反復練習を行う。講義で取り扱った課題テキスト部分は次週までに暗唱できるようにしてくることが課題となり、次週には実際に暗唱（含む筆記）できるかの確認を行う。後半では、易しい英語で書かれた書物を、辞書を用いることなく読み、総読書語数100万語を目指す多読を実施する。「辞書は使わない・分からない部分は飛ばす・つまらない本は途中でやめる」を原則に、学生自らが読む本を自由に選択することで学習動機を維持しつつ、英語運用能力の維持、定着、向上を目指す。

言語能力の向上には継続学習が不可欠である。しかし時間的な制約もあり、教室内での活動は限定的にならざるを得ない。そこで、年間を通し、全ての学生（１～４年次生、大学院生）が自ら自由に英語学習に取り組めるよう授業外での多読教材の貸し出しや、CALLシステムによるTOEIC対策のための英語学習、学習期間前後のTOEIC IP試験を実施している（前期：１年次生必修。後期：全ての学生を対象に希望制にて実施）。受講した学生は、真剣に取り組み、結果として学習効果の向上がみられた。

CALLシステムについては、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、７月１７日（日）のオープンキャンパスにて、午前･午後１セッションずつ合計２回の模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際にCALLシステムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

学生の英語学習に対する意欲の維持や学習活動の継続を図るべく、日々学習環境の整備を模索している。さらに魅力的な教室内活動の実現と自主的な学習へのきっかけ作りをいかに構築していくかが今後も継続課題である。

３　科目の教育活動

１）　英語Ｉ－Ａ１

１年次　前期

宮内 信治

英語の音声については、母音を中心に発音記号と発声法について確認と練習を行い、その定着を図った。講読では、デイル・カーネギー、アン・リンドバーグ、ミッチ・アルボム、バートランド・ラッセルなど20世紀のエッセイや文学、哲学を題材にした英語名文集を教科書として用いた。テキストに併記されている日本語訳を参考に、その解釈に至る基本的な文法の理解を深め、添付の音源CDを活用してスムーズな音読を習得すべく、発声練習を試みた。学んだ英文を帳面に書写し、次の講義までに暗唱音読ができるようにすることを課題とした。現代においてもなお規範となる英文テキストの一部を暗唱をすることにより、英語の世界の教養の一端を体得できたと思う。多読による総読書量は、前期期間中一人平均27000語。最も多く読んだ学生の語数は71000語。

２） 英語Ｉ－Ａ２

１年次　後期

宮内 信治

英語の音声については、子音を中心に発音記号と発声法について確認と練習を行い、その定着を図った。講読では、前期と同じ教科書を用いて、リチャード・ファインマン、アインシュタインのエッセイに触れて理解を深めると同時に、国際的に著名な日本人が英語で著した規範的名文として、新渡戸稲造『武士道』、鈴木大拙『禅と日本文化』を読むことで、日本人とはいかなるものか、という問いに答える英語を、書写と音読、暗唱で体得した。多読による総読書量は通年で一人平均43000語。最も多く読んだ学生の語数は110000語。

３） 英語Ｉ－Ｂ１

１年次　前期

Gerald T. Shirley

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session, and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. Students took the TOEIC test before and after the CALL session. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students had to participate actively in every class.

４） 英語Ｉ－Ｂ２

１年次　後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

５） 英語II－Ａ１

２年次　前期

宮内 信治

原書Word Power Made Easyを用いて、英語語彙の増強を図った。ギリシャ語、ラテン語起源の語源についての知識を習得しつつ、性格を描写する語彙、医療職者を表す語彙を学び、さらにそこから派生する様々な語彙についての習得に努めさせた。学習した次の週に単語小テストを課し、学習の確認と評価とした。期間の中ほどと終了直前には、教科書本文の中から教員が指示した原文について、音読暗唱の課題を与え、評価した。

６）　英語II－A２

２年次　後期

宮内 信治

前期に引き続き、原書Word Power Made Easyを用いて、英語語彙の増強を図った。医療職者を含めた実践者(practitioners)と、科学者についての語彙を学習し、さらにそこから派生する様々な語彙についての習得に努めさせた。学習した次の週に単語小テストを課し、学習の確認と評価とした。期間の中ほどと終了直前には、教科書本文の中から教員が指示した原文について、音読暗唱の課題を与え、評価した。多読による総読書量は一年次からの通算で後期終了時一人平均104900語。最も多く読んだ学生の語数は258000語。

７）　英語II－B１

２年次　前期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

８）　英語II－B２

２年次　後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

９）　英語III

３年次　後期

Gerald T. Shirley、宮内 信治

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

講読担当　チーム医療に携わる様々な医療職者について書かれた400単語程度の英文を読み、内容把握とともに文章構成にも着目し、論理構成の把握に努めさせた。また、英語で書かれた看護学関連の原著論文の要旨を英和辞典などを用いて読解する作業も行わせた。双方ともに、看護・医療に関連する新しい語彙と知見に触れることができた。

４　卒業研究

・特別支援学校における看護師と保護者の関わり合い
・看護学生・一般学生・外国人留学生の色彩感覚の違い～病室・ナース服に着目して～
・緩和ケアに携わる看護職が捉える「寄り添う看護」とケアの実態との関連
・視覚障がい者に対する看護師の対応の実態と課題
・看護学生の英語に関する意識と学習効果の関連～CALL学習・TOEIC IP導入に焦点をあてて～

３－５－８　基礎看護学研究室

１　教育方針

看護学の導入部分として看護の歴史やその発展及び看護理論を理解するとともに援助方法の基礎について学ぶカリキュラムを実施している。具体的な教育目標と該当する科目は(1)看護とは何か、看護の本質と機能および看護専門職の役割と活動を理解する(「看護学概論」)、(2)日常生活の援助技術および医療に伴う看護技術の基礎を理解する(「生活援助論・医療技術論」)、(3)看護を学ぶ初学者が実践と理論は表裏一体の関係であることを知る(「看護理論入門」)、(4)入院患者に接しながら、看護の対象の生活環境や心身の状態をふまえ、専門職としての看護師の役割を理解する(「基礎看護学実習」)等である。

講義を行うにあっては上記の科目の学習進度にそってさまざまな看護実践と関連づけたり、実際に体験させたりしながら理解が進むように配慮している。

２　教育活動の現状と課題

基礎看護学研究室としての基本的な教育目標である看護とは何か、及び看護を展開する場合の方法論の理解に変更なはい。専門職である看護師について理解させ、将来の進路に対しても方向づけできるように学生同士の討議やグループワークも取り入れて行った。また演習での視聴覚教材の活用にも努めた。昨年同様にe-learningシステムの充実に取り組み、学生が活用できるDVDの作成に力を注いだ。学生が大学だけでなく、自宅でもe-learningシステムが活用できるように、関係部署にも働きかけて取り組んでいるが、同時に、少ない講義時間や演習時間を補い、効果的な指導ができるように、講義、実習前後のレポート指導なども強化して行く必要がある。

３　科目の教育活動

１）　看護学概論

１年次　前期・後期前半

志賀 壽美代、伊東 朋子

看護学の導入として看護とは何か、看護の本質と機能および看護専門職の役割と活動について理解させ、自らの看護に対する興味関心を高揚させることができるように配慮した。講義中心の授業展開に偏らないようにできるだけ、学生が主体的に考えることができるように教材の精選や提示方法を検討して、積極的な参加が可能となるように配慮した。

２） 看護理論入門

１年次　後期

志賀 壽美代、伊東 朋子

看護活動に必要な看護理論に焦点を当てて、看護理論とは何か、看護理論の必要性などについて理解させた。主な理論家についてグループワークさせ、発表会を設けて、内容を共有できるように配慮した。2段階実習への橋渡しとして、ヘンダーソンを取り上げ、生活援助論で学んだ具体例なども提示しながら、実際の臨床現場における看護理論の考え方や記録方法などについても指導した。2段階実習終了後には、実習で学んだ内容を看護理論の視点から考察させた。

３） 生活援助論

１年次　前期後半・後期前半

志賀 壽美代、伊東 朋子、秦 さと子、栗林 好子、水野 優子、福元 幸志、佐藤 秋子、桑野 紀子、山田 淳子

看護援助を行う意義や、これまで学習した基礎知識を根拠として看護援助と結び付けること、看護基礎技術を対象者にどのように応用していくのかという点を主軸に授業構成をし、授業展開の工夫をした。また、演習では、原理原則にのっとった手順+応用力の習得のために毎回、単元の担当教員を中心に演習構成に関しての事前の打ち合わせを行い、対象学生のレディネスに応じた授業展開に努めた。昨年より開始したe-ラーニングシステムの導入により、ビデオ学習なども取り入れた反復学習を促すことで、技術の定着を図った。

４） 医療技術論

２年次　前期

志賀 壽美代、伊東 朋子、栗林 好子、水野 優子、福元 幸志、佐藤 秋子

学内実習は援助技術習得のために２人１組を基本的枠組みとして２コマ続きの展開としている。また少ない時間数を補うためにも積極的に課外での時間を有効活用させて技術試験や筆記試験に臨ませている。昨年より開始したe-ラーニングシステムの導入により、ビデオ学習なども取り入れた反復学習を促すことで、技術の定着を図った。

５） 基礎看護学実習

１年次　後期

志賀 壽美代、伊東 朋子、秦 さと子、藤内 美保、石田 佳代子、栗林 好子、水野 優子、福元 幸志、佐藤 秋子、津留 英里佳、津隈 亜弥子、井ノ口 明美、橋口 久代、安東 照美、江月 優子、河野 梢子、井伊 暢美、田中 佳子、中垣 紀子、山田 淳子

既習科目の理論と実践が統合できるように実習前指導・実習後指導には特に力を入れた。第２段階実習施設の17病棟での実習が望ましい形で展開できるように担当教員や学生のグループメンバー構成等は充分に検討した。実習センターの備品・消耗品等の整備にも努めた。

４　卒業研究

・コミュニケーション手段としての文字盤使用に対する抵抗感を少なくする方法の検討
　～ALS在宅介護者に着目して～
・看護学生のアルバイトと社会的スキルとの関係
・基礎看護技術のe-learningシステム活用に向けて～本学の看護学生のe-learning
　システム利用に関する実態調査～
・若年層の酢による保湿効果の検証

３－５－９　看護アセスメント学研究室

１　教育方針

看護アセスメント学は、基礎看護科学講座に位置づけられ、人の健康問題を科学的にアセスメントできる能力を養うことを目的としたカリキュラムを実施している。看護の基盤となる人間科学講座で教授された内容との融合を図りつつ、身体的、心理的、社会的側面から看護学の視点でアセスメントできることがねらいである。現在教授している具体的な科目は、「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」「ヘルスアセスメント」「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」「看護アセスメント学実習」である。主要な疾病の理解や病態の理解、さらにヘルスアセスメントにおいては、看護師の五感を活用し頭部からつま先まで身体の観察ができる能力を身につけ、身体的なアセスメントができる知識・技術に加え、これらを踏まえて健康障害をもつ患者の看護過程の展開ができる基礎的能力を身につける。看護過程は、講義を行い、さらに演習でペーパーペイシェントによる個人およびグループワークでの看護過程の展開を行い、臨地実習で受け持ち患者をもち看護過程の展開を行う。講義・演習・実習へと段階的に進めていき、専門看護学領域への基盤とする。

２　教育活動の現状と課題

平成21年度改正カリキュラムで変更した授業科目について、授業の目標、授業構成、授業方法、授業評価等に対して、見直し、改善を行った。改正カリキュラムで新たに加わった「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」の科目を実施し、看護アセスメント学実習へスムーズに実習できることを目指したが、学生の到達度の個人差が大きく、個人の能力にあった指導方法が課題である。看護アセスメント学実習では、看護過程の評価までできることとし、到達目標を高くした。クリティカルシンキングやアセスメントの思考プロセスが形成されつつある。今後、さらにヒトの構造や機能、病態との融合を図りつつ、人間を包括的に観る視点と分析的に観る視点を深め、エビデンスに基づいた判断ができる能力を身につけることが課題である。

３　科目の教育活動

１） 看護疾病病態論I

１年次　後期後半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子

主な疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に講義形式で行う。アレルギー・膠原病・感染症、感覚器系の眼・耳・鼻・皮膚、消化器、呼吸器、腎疾患を行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。教科書は系統看護学講座シリーズを使用するとともに、進級試験の範囲である病気の地図帳、健康の地図帳を活用し、配布資料も提供して教授した。専門的内容が多いため、中間試験を実施して、知識の獲得ができるよう配慮した。後期後半の途中に基礎看護学実習が行われるため、学生は疾患をしっかり学ぶ必要性を認識するようである。

２） 看護疾病病態論II

２年次　前期前半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

主な疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に講義形式で行う。脳・神経系、代謝・内分泌系、生殖器系、血液・造血器系、循環器系、運動器系を行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。教科書は系統看護学講座シリーズを使用するとともに、進級試験の範囲である病気の地図帳、健康の地図帳を活用し、配布資料も提供して教授した。専門的内容が多いため、中間試験を実施して、知識の獲得ができるよう配慮した。

３） ヘルスアセスメント

２年次　前期後半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

ヘルスアセスメントでは、身体的側面からの観察に主眼を置き、ヘルスアセスメントの意義、基本技術、健康歴聴取、消化器系、呼吸器系、循環器系、脳・神経系、運動器系のアセスメントについて、講義・演習を行った。講義と学内実習は、別の日に実施するように変更したことで、学内実習に臨むにあたっては事前に復習する姿勢が確認できた。さらにこれまで既習した知識・技術を活用することを目的に高齢者のボランティアグループに協力を得て、フィジカルイグザミネーションをさせていただき、高齢者へのインタビューや、正常と異常の判断、フィジカルアセスメントの技術等を効果的に学んだ。

４） 看護アセスメント概論

２年次　後期

藤内 美保、石田 佳代子

看護過程の展開の基礎的能力を身につけるため、看護過程の概要、看護過程と基礎理論、アセスメント、看護診断、計画、実施、評価について、講義とペーパーペイシェントによる個人ワークを交互に行い、具体的な事例で理解できるよう工夫した。個人ワークのペーパーペイシェントはイメージしやすい糖尿病事例を用い、身体面、心理面、身体面からのアセスメントが必要な事例で看護過程を展開させた。個人ワークでは最終的成果をレポートそして提出させたが、提出段階に至らない学生も一部おり、段階的にレポート提出する必要がある。また、病態を導けない、検査データをアセスメントできないなど、強化すべき点が明らかになった。

５）　看護アセスメント演習

２年次　後期

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

看護過程の基本的知識を活用するために、１グループに５名～６名でペーパーペイシェントによる看護過程を展開させた。事例は、乳がん、肝硬変、内包出血、白血病の４事例とし、病名や発達段階、性別、それぞれ異なる看護診断が導けるような事例を作成した。学生は既に個人ワークで看護過程の展開を行った上で、グループワークで検討させ、グループメンバーとディスカッションすることで視野が広がりや内容の深まりに繋がったようである。中間発表会と全体発表会を行い、患者の全体像やアセスメントの深まりは確認できたが、病態を踏まえた考え方が課題であった。看護アセスメント学実習で担当教員となる教員にも発表会に参加してもらい、実習指導の際の参考にしてもらった。

６）　看護アセスメント学実習

２年次　後期後半

藤内 美保、石田 佳代子、志賀 寿美代、伊東 朋子、秦 さと子、安東 照美、井伊 暢美、井ノ口 明美、江月 優子、河野 梢子、栗林 好子、田中 佳子、津隈 亜弥子、津留 英里佳、中垣 紀子、橋口 久代、福元 幸志、堀 裕子、水野 優子、山田 淳子

１名の受け持ち患者を持ち、看護過程を展開する基礎的能力を身につけることを目的にした。県立病院８病棟、大分赤十字病院５病棟、アルメイダ病院４階東西、５階東西の計16病棟に４～６名の学生を配置した。１年次の基礎看護学実習で配置された同じ病院で異なる病棟に配置をした。平成21年度改正カリキュラムの初めてのアセスメント学実習で、基礎看護学実習は１年次に行われ、１年ぶりの実習であり、個人差が見られたが、ほぼ全員が実習目標を到達した。学生の自己評価では、看護技術の評価が低く、未熟であると自覚していた。実習中は感染性胃腸炎など４名が罹患し、４名が補習実習を行った。

４　卒業研究

・脳卒中患者への看護師の「声かけ」とその効果に対する認識　―軽度の意識障害の改善に焦点を当てて―
・シミュレーターを用いた呼吸音・心音聴取の効果的な習得方法
・外来通院患者におけるMRSAの鼻腔内保菌状況　―慢性疾患との関連―
・特定看護師（仮称）導入による役割の効果と課題　―日本初のNP養成コース修了生の活動に焦点を当てて―
・看護学生の初期実習中におけるストレスの変化と影響要因　―アンケート調査より―
・東日本大震災において非被災地域の大学生が行ったボランティア活動の動機と心理的効果の関連

３－５－10　成人・老年看護学研究室

１　教育方針

成人・老年看護学の学習は、成人期・老年期の対象への看護実践に必要な専門知識・判断能力・援助技術を習得することを目標としている。そのため、成人看護学概論、老年看護学概論、成人看護援助論・老年看護援助論、成人・老年看護学演習、成人・老年看護学実習の各教科を設定している。概論では成人老年領域の発達段階や保健に関すること、理論について学び、援助論では専門的知識を習得するとともに、実践する力を養うために、担当教員以外に臨床で働く様々な医療職者を学外講師として招き、援助方法を学ぶことができるようにしている。さらに成人・老年看護学演習において、健康段階の特徴をとらえられるように、急性期・慢性期・終末期の模擬事例へのケアについて考え学びを深め、ロールプレイを通して関連の看護技術習得する機会を取り入れている。最終的に、成人・老年看護学実習では、医療機関や老人施設において、知識・技術・態度を統合した看護の実践を学べるように組み立てている。

２　教育活動の現状と課題

成人・老年看護学は青年期から老年期までの長いライフスパンにある対象者への看護の学びであり、学習範囲は非常に広範囲にわたっている。そのため限られた時間数の中での学習内容と方法を吟味しながら展開している。成人および老年看護学概論では基礎となる対象者の理解と看護について学生が考えることが必要であり、対象者を理解するための理論を主体的に学習し思考を深められるようにしている。また、成人および老年看護援助論や成人・老年看護学演習では、幅広い年齢層の対象理解や多様な疾病とその治療方法や援助方法の理解を助けるために、具体的な事例、機械器具を提示し臨床経験のない学生の関心と学習意欲を高め印象に残る講義をするようにしている。講義や試験などの質問対応、解答等の時間確保が例年と課題であり、学生との通信ネットワークを用いた対応などフィードバックを強化することに今後も取り組んでいく。

３　科目の教育活動

１）　成人看護学概論

２年次　前期前半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美

成人期に生じる多様な健康問題と対象へ看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける成人期の位置づけと特徴を発達課題・行動、健康の側面から総合的に理解し、看護を実践していく上で基盤となる知識を教授した。グループワークを取り入れ、学生自身が成人の健康観と健康障害をもつ成人の理解を深めていけるようにした。また、中範囲理論を学習し、成人看護におけるアプローチ学習を深めた。学生の実習体験をいかしながら成人看護学の授業につなげていくことが課題である。

２）　老年看護学概論

２年次　前期前半

小野 美喜

老年期に生じる健康問題の特徴と高齢者への看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける老年期の特徴、健康問題をもつ高齢者の身体的、心理的、社会的問題を理解し、慢性疾患や機能障害を持ちながら日常生活を送る対象への看護援助に必要な知識を教授した。老人施設から外部講師を招き、施設で生活する高齢者の実情について講義する機会を設け、認知症に伴う症状や援助役割などが実例をもって示されたため、学生の理解が深められた。また、高齢者の機能低下とQOLに関するディベートを実施し、主体学習を導入した。ディベートは学生の参加意欲が高く学習効果もあがったため引き続き来年度も実施する。

３）　成人看護援助論

２年次　前期後半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、中釜 英里佳、橋口 久代

成人期・老年期にある対象を身体的、心理的、社会的側面から総合的に理解し、急性期および慢性期、終末期の健康問題への援助を学ぶ目的で様々な領域の看護援助について教授した。周手術期、循環器、消化器系、内分泌代謝系の障害をもつ対象者の看護援助について、学生が必要な知識と技術を習得できるように講義媒体や教授方法を工夫して授業を展開した。また、臨床現場で活躍する外部講師による講義を取り入れることにより、援助論の学習内容が強化されるよう実施した。特に成人看護に重要となる技術については、ストーマパウチ交換などを実施し、自ら患者体験をする機会も設けた。

４）　老年看護援助論

２年次　後期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、中釜 英里佳、橋口 久代

成人期・老年期にある対象を身体的、心理的、社会的、精神的側面から総合的に理解し、急性期および慢性期、終末期の健康問題への援助を学ぶ目的で様々な領域の看護援助について教授した。高齢者によくある呼吸器系、血液系、運動器系の障害をもつ対象者や、終末期にある対象者への援助について、講義の媒体や教授方法を工夫して授業を行った。特に、終末期の看護については、外部講師を招きホスピスケアの実際について学ぶ機会をつくり、学生が終末期にある患者について理解を深められるようにした。

５）　成人・老年看護学演習

３年次　前期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、中釜 英里佳、橋口 久代

成人期・老年期の対象者の健康問題に応じた看護展開を学習する目的で、学内演習を取り入れている。学生はすでに基礎看護学で看護過程の展開を学んでいることから、ここでは、成人期・老年期にある対象者の急性期、慢性期、終末期の健康問題に着目し、事例を通して、対象者の理解、アセスメント、看護診断、ケアプランの作成および評価を行い、看護過程の一連の流れを技術トレーニングも含めながら行った。演習冒頭の講義では、３年次で新たに学ぶ健康問題や看護過程の展開に必要な基礎知識を確認し、個別性のあるケアプランの重要性を強調した。演習では、老人保健施設に入所中の事例と、循環器疾患により手術を必要とする事例をもとに個人ワークとグループワークを組み合わせて看護過程を展開した。学生は、自ら立案したケアプランを学生同士のロールプレイで実践し、患者役や看護師役の体験を通して立案したプランを互いに評価し合った。教員は各グループの学生を担当し、個別指導やグループ指導を通して指導を行った。

６）　成人看護学・老年II看護学実習

３年次　前期後半・後期前半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、中釜 英里佳、橋口 久代、水野 優子、福元 幸志、河野 梢子、田中 佳子、山田 淳子、高波 利恵

成人・老年Ⅱ看護学実習は、各看護領域別の看護の特性や看護過程をふまえ、個々の対象に応じた看護実践を学ぶことを目的とし、大分県立病院および大分市医師会立アルメイダ病院にて実習を実施した。今年度から新カリキュラムとなり12週間（学生一人5週間の臨地実習と1週間の学内セミナー）の実習展開を行った。これまで、看護スタッフとの連携を自らとり能動的に実践できる自律した学生を育てるために、実習指導者と教員の連携を課題としてきており、今年度は実習前に指導者との連絡会をもち学生の問題点と指導方法の検討をおこなった。その結果、大学と臨床側の共通理解ができ今後も継続する意向となった。また、学生自身のレディネスも新カリキュラムによって変化があり、看護展開や看護実践に反映された。

７）　老年看護学実習I

３年次　前期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、中釜 英里佳、橋口 久代
河野 梢子、田中 佳子、栗林 好子、福元 幸志、佐藤 秋子、津隈 亜弥子、足立 綾

新カリキュラムによる改善で３年次生の前期に実習を導入した。施設に入所している高齢者およびデイサービス、デイケア利用者の生活の支援を通して高齢者を理解する目的で、大分市内および由布市内にある介護老人保健施設６施設、介護老人福祉施設6施設の合計12施設において２週間の実習を行った。担当教員は臨地に定期的に巡回する形をとり、臨地での指導は全面的に実習指導者に依頼し、学生の自主性を促せるようにした。特に事故なく学生も積極的に指導者と連携を図れていたことから、来年度も意図的な距離を保つ指導を取り入れていく。

８）　老年看護学実習II

４年次　前期（旧カリキュラム）

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、中釜 英里佳、橋口 久代

施設に入所している高齢者の生活の支援を通して、対象を理解し、保健・医療・福祉分野における看護職の役割と課題を学ぶ目的で、大分市内および由布市内にある介護老人保健施設3施設、介護老人福祉施設2施設の合計5施設において２週間の実習を行った。1グループあたり6～10名配置であり、前半・後半に分けて実習を行った。短期間の実習ではあるが、各担当教員が施設で実際に指導にあたり、学生の学習課題が達成できるようにした。さらに、実習最終日に共通テーマを設け、少人数でのグループ討議を実施し意見交換が活発に行われた。

４　卒業研究

・NICUにわが子が入院する父母が体験する危機と医療職者の介入に関する文献的研究
・糖尿病患者を治療中断させないための看護師の支援
・失語症となった人のライフヒストリー～社会との関係を促進させた要因に関する事例研究～
・乳がん患者の診断からの期間とQOLの関連
・一般病棟看護師の家族観とがん終末期患者・家族に対する捉え方の変化
・術後せん妄の効果的な予防ケアに関する文献的研究

３－５－11　小児看護学研究室

１　教育方針

小児看護学の講義と演習、実習を通して、発達過程にある小児の保健と小児看護の特殊性を理解することをねらいとしている。そのため、小児看護学では対象である小児の成長と発達について発達理論を学び、小児の健康の維持増進・健康障害の現象に対する家族を包含する小児看護の特殊性について理解を深め、小児看護の看護過程の展開とそれに必要な援助技術を学ぶことが目的である。

小児看護学では、基礎看護科学講座で看護理論や看護技術を学んだ学生に対して、小児とその家族への関わりにおいて、小児看護の倫理を思考し小児看護の実践ができるよう成長することを期待して教育を行っている。学生が健康・不健康に関わらず小児とその家族への援助者としての態度を身につけ、肯定的な子ども観を構築できるよう配慮している。

２　教育活動の現状と課題

小児看護学の講義は、２年次前期に15コマ1単位で行う小児看護学概論と、3年次前期に3単位45コマで行う。概論では小児を取り巻く保健、福祉、看護などの課題を学ぶ。学生が自分自身の「子ども観」をレポートし、自己の子ども観を認識するように工夫している。３年次前期はより小児看護の専門的な講義と学内演習を通して、学生は多くの小児に関する学びを深める。後期は、それまで学んだ専門的知識を臨地実習で実践し、看護場面に知識を応用する。初めて学生は対象である小児とその家族と出会い、小児看護とは何かを悩みつつ、看護職あるいは大人としての役割を意識し、看護活動ができるように成長するようにカリキュラムを構成している。

最近は少子化で兄弟姉妹も少なく周囲に子どもがいない、また子どもに接したことがないという学生が少なくない。講義では視聴覚教材を多用して、動的な子どものイメージを持つことができるように配慮している。毎回の講義終了後に、講義内容に対する質問や意見を求め、次の講義時間に質問に答え、学生の疑問を残さないようにしている。学生は欠席も少なく意欲的に受講していた。小児看護学の学習内容の定着のために２回に分けて小テストを行い工夫した。また、再試験を実施してフォローした。

次年度も講義コマの変更について再検討し、講義内容を吟味して構成する。

３　科目の教育活動

１）　小児看護学概論

２年次　前期前半

高野 政子、小代 仁美

今年度は新カリキュラムとなり従来の７コマから15コマとなった。主として、小児看護の特質と概要を理解することを最終的な目的としている。基本的概念として小児の特徴を発達的にとらえ、小児と小児を取り巻く環境を考え、小児保健、小児医療の動向を述べ、教育や福祉の視点からも小児看護の役割と重要性について教授した。具体的な内容は次の通りである。1)小児看護学の変遷と小児看護の特殊性、2)世界の子どもの健康と医療、3)子ども観の変遷と子どもの権利、4)日本の母子保健・行政と母子福祉、家族と親子関係、5)小児の成長と発達総論、6)小児の形態・機能的発達、7)心理的・社会的・言語的発達である。８回～14回までは、乳児から学童・思春期までの成長・発達について理論等を展開した。最終回は、学生のフィールドワークの親と子の観察レポートを発表して意見交換することで、子どもを意識的に観察するように動機づけを行った。

２）　発達と援助論

３年次　前期前半

高野 政子、小代 仁美、足立 綾

小児の発達過程の特質を理解するための主要理論に基づき、小児の行動を多面的に捉え、発達過程の応じた日常生活の援助方法と保健を講義し演習を行った。また、健康障害のある小児とその家族への援助方法を教授した。主な講義項目は、1)小児期の主要な発達理論、2)小児各期の発達アセスメント、3)乳児期、幼児期の保育理論と技術、4)学童期、思春期の保健と看護、5)病気の子どもと家族、6)小児の健康障害と看護、7)障害のある子どもと療養生活の援助、8)親子関係に問題のある場合の看護ほか。実習は昨年同様に、総合病院の小児病棟と療育施設の2施設で実施した。学内での技術演習は、看護師等の協力を得て６名で、援助技術として高機能シミュレータを用いてバイタルサイン測定の実施と技術小テスト、静脈点滴の固定、服薬介助や離乳食の実際などを指導した。指導の方法や内容は指導者間で統一して、20名ずつの４グループに分けてローテーションする方法で指導した。一方、看護過程の展開は、全員で発表会を開催し、グループワークで展開を完成した事例を２グループずつ発表し意見交換を行った。

３）　小児看護援助論

３年次　前期後半

高野 政子、小代 仁美、足立 綾

前半は、小児領域の主要な病態と疾患について講義形式で解説を行い、後半は学生のグループワークによる主要な疾患と看護について調べ学習の作業とその発表形式で行った。
後半は臨地実習でよく出会う事例を５事例提供し、グループワークで看護過程を検討し、まとめて発表する。２つのグループワークを行ったが、学生は積極的な参加を求められ、学生個々に事例展開を求め、グループワークを通して互いの疑問点を話し合い発表する方法で行っている。真面目な取り組みが見られた。一部の学生が個人ワークを軽視する傾向もあり、グループワークに全員が取り組んでいるかに注意している。

４）　小児看護学実習

３年次　後期前半

高野 政子、小代 仁美、中垣 紀子、渡邊 文子

小児看護学実習は、大分県立病院に1G学生９～10人で６グループ（合計58人）、別府発達医療センターに学生３～４人で６G（合計21人）配置とし、専任教員と担当教員と臨床実習指導者の連携により指導を行った。学生１人に対象児１人の受け持つことを目指したが、在院日数の短縮化に伴い、約1/3の学生は実習中に２人の受け持ちを経験した。１人の子どもを継続できた場合は、学生が遊びの工夫などもみられたが、複数の子どもを受け持った学生は看護実践まで至らないということに指導側に課題となった。３日間の保育所実習は、７月末から８月第１週までに実施した。子どもの理解やコミュニケーションができるようになること、病児と家族への関わりがスムーズとなるので健康な子どもの保育は今後も必要と考える。実習時期は夏季休暇最初に行うことが冬の感染面からもよいと評価している。

７日間のうち外来実習を半日行った。外来診療の場面に立会い子どもや家族の様子、外来看護師の指導のもと、子どもの発達に合わせた看護技術について学ぶことができた。実習では、受け持ち患児のバイタルサイン測定は全員が経験することができた。

実習終了後、実習施設の実習指導者と専任、担当教員で実習反省会を持ち、意見交換を行った。学生の実習到達度や記録に差があると報告された。実習に対して学生が動機づけられ積極的な実習を行えるように指導することが課題と考える。

５）　小児看護学演習

３年次　前期後半

高野 政子、小代 仁美、足立 綾

前半は、小児領域の主要な病態と疾患について講義形式で解説を行い、後半は学生のグループワークによる主要な疾患と看護について調べ学習の作業とその発表形式で行った。
後半は臨地実習でよく出会う事例を５事例提供し、グループワークで看護過程を検討し、まとめて発表する。２つのグループワークを行ったが、学生は積極的な参加を求められる学生個々に事例展開を求め、グループワークを通して互いの疑問点を話し合い発表する方法で行っている。真面目な取り組みが見られたが、一部の学生が個人ワークを軽視する傾向もあり、グループワークに全員が取り組んでいるかに注意している。

４　卒業研究

・小児病棟看護師と原籍校、病院内学級の連携についての検討－病棟看護師長への調査から－
・入院中の幼児の安静度の違いによる看護師の遊びの支援に関する研究
・保育所（園）における発熱がある子どもと保護者に対する支援の実態－保育士が看護職に期待すること－

３－５－12　母性看護学研究室

１　教育方針

母性看護学では、女性のライフサイクルおよびマタニティサイクルにある妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子およびその家族への援助の理論と方法について学ぶことを目的としている。科目は母性看護学概論、母性生理・病態論、母性看護援助論Ⅰ、母性看護援助論Ⅱ、母性看護学演習、母性看護学実習で構成している。特に母性看護学実習は周産期に重点をおいて実習を展開している。

２　教育活動の現状と課題

母性看護学では、学内で学んだ理論と技術を実習で実践し、理論と実践を結びつけることを目標としている。今年度は母性看護学演習の時間の延長に伴い、実習事前学習としてパンフレット作成に取り組んだ。母性看護学実習は、実習施設は２か所であり、実習期間中の分娩数が施設によって異なっている。受け持ち患者の症例も正常褥婦だけでなく、帝王切開術後の褥婦や妊婦を受け持ち対象者として工夫している。また、施設によっては受け持ち患者の対象者が少なくなっており、受け持ち患者が初日に決定しない学生がいる時は2人ペアーで実習を行っている。今後に向けて実習施設を3か所に増やすことを予定している。

３　科目の教育活動

１）　母性看護学概論

２年次　前期

林 猪都子

母性看護学の基本概念および意義を理解し、人間の性と生殖の側面から、女性の生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への援助活動を学び、母性各期における母性看護の役割と重要性について認識を深めることをねらいとして、母性の概念、母性看護に有用な概念・理論、セクシュアリティー、リプロダクティブヘルス／ライツの概念、母性看護の歴史、母子保健施策、母子保健統計からみた動向、母性看護に関する組織と法律、母性看護の対象の理解、ライフサイクル各期の女性の理解と看護、女性の健康問題と看護などについて教授した。本年度はテキストを変更し内容の再構成に努めた。来年に向けては講義資料や内容を修正して講義内容の充実に努めていきたい。

２）　母性生理・病態論

２年次　前期後半・後期

林 猪都子、猪俣 理恵、宇津宮 隆史、上野 桂子、佐藤 昌司、堀永 孚郎、肥田木 孜、谷口 一郎、西田 欣広

女性のライフサイクルにおける性と生殖に関連する生理的変化を踏まえて、産婦人科学的な疾患および妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態および検査・治療について理解することをねらいとした。不妊症の病態生理・診断・治療、妊娠期および分娩期の異常、子宮頸癌、子宮体癌、子宮筋腫、子宮内膜症、月経異常・更年期障害などの病態生理について教授した。各専門領域の先生によるオムニバス方式の講義であったが、学生の関心が高く熱心に受講していた。本年度で開講が終了する科目である。

３）　母性看護援助論Ｉ

２年次　後期

林 猪都子、猪俣 理恵、戸高 佐枝子

妊娠・分娩による母体及び胎児の生理的変化と母子とその家族の看護について学ぶことをねらいとして、妊娠の生理・経過、妊婦の健康診査、母体と胎児の管理、妊婦への看護、分娩の生理・経過、産婦への看護について教授した。今年度は講義資料の作成に時間を費やし、講義内容の充実に努めた。また、具体的な事例を提示したり、重要な箇所は何度も説明を繰り返した。看護についての学びは、グループワークにて学生自ら学習を深めるよう工夫した。

４）　母性看護援助論II

３年次　前期前半

猪俣 理恵、林 猪都子

妊娠期・分娩期・産褥期の母子及びその家族のニーズと母性看護の役割について学ぶことを科目のねらいとした。看護師業務については、「じよく婦に対する療養上の世話又は診療の補助を行う」と保健師助産師看護師法に規定されているため、主に妊娠・分娩経過が褥婦と新生児に及ぼす影響とその看護について授業を展開した。講義回数は全15回で、発言毎に評価ポイント加算制を取り入れた参加型とした。学生は興味を持って授業に参加していたが、発言に消極的な学生も一部見られたため、今後はさらに主体的な取り組みができる授業方法の工夫が必要である。

５）　母性看護学演習

３年次　前期前半

林 猪都子、猪俣 理恵、安東 照美

母性看護の実践に必要な看護技術を理解し基本的技術を習得することを科目のねらいとした。講義回数は、看護技術演習7回とウェルネス看護診断に基づいた母性看護過程の展開8回の全15回であった。看護技術演習では、モデル人形を用いた妊婦腹部触診・計測、胎児心拍数陣痛図モニター装着、新生児計測や沐浴など母性看護を行う上で必要な看護技術の演習を実施した。また、臨床場面で必要となる知識や技術をグループワークでまとめマニュアルを作成し発表した。母性看護過程の展開では、正常4事例、異常4事例をグループワークでまとめ、発表し学習内容の共有をはかった。学生は、技術演習に関しては熱心に取り組んでいたが、グループワークでは一部の学生が担当箇所以外の内容に対し無関心な傾向もあったため、今後は効果的な知識の共有方法を工夫する必要がある。

６）　母性看護学実習

３年次　後期

林 猪都子、猪俣 理恵、安東 照美、石岡 洋子

母性看護学実習施設は２施設であり、実習期間は１グループ２週間（延べ12週間）であった。学生および教員の人数は、堀永産婦人科医院は学生４～５名配置（合計28名）、担当教員１名配置、大分県立病院は学生８名～９名（男子学生１～２名）（合計50名）、担当教員２名配置した。実習は学生１～２名につき妊婦または褥婦を1名受け持ち、妊産褥婦、新生児の看護について学び、母性各期の特性とニーズに応じた看護過程の展開を学習した。本年度は受け持ち対象患者の決定に苦労して、学生２名で患者を受け持つことが多かった。すべての学生に生命の誕生の場面を通して自己を振り返る実習を期待し、母性各期の保健指導をそれぞれ工夫して取り組むように努力した。分娩に見学ができなかった学生が24名いた。また、帰学日は木曜日に設けることで、記録のまとめや技術の見直し、最終カンファレンスの準備がスムーズに行えた。今年度は事前学習としてパンフレットを作成して実習に望んだが、その活用が不十分であった。今後は、実習施設を3か所に増やし、事前学習のパンフレットの活用についての検討が必要である。

４　卒業研究

・大分県のフリースタイル分娩に関する援助の実際と産婦の受け止め
・大分県の助産師が行うフリースタイル分娩への援助実態
・妊娠末期妊婦のマイナートラブルと体重増加量、身体活動量の関連
・入院による妊婦の睡眠への影響　－妊娠末期における入院妊婦、正常妊婦の比較－

３－５－13　助産学研究室

１　教育方針

助産学（選択科目）は、助産師独自の判断で妊娠・分娩・産褥・新生児期の助産過程を展開し、さらに母子および家族の健康と福祉を促進するための理論と方法を学ぶことを目的としている。教授しているカリキュラムは、助産学概論、助産診断・技術学Ⅰ、助産診断・技術学Ⅱ、助産診断・技術学Ⅲ、助産診断・技術学Ⅳ、地域助産活動論、助産学実習で構成されている。助産学実習の分娩取扱いについては、指定規則で助産師又は医師の監督の下に学生１人につき10回程度行うことが決められており、本学では学部生９例以上、ダブルスクール（大学院生）12例以上を取扱うことを基本的な考えとしている。助産師教育では、卒業時点までに、少子化や周産期医療に対する社会のニーズの多様化に対応でき、母子の安全性（正常・異常の区別）が守れる判断力と実践力を持つことを教育目標としている。

２　教育活動の現状と課題

本学の助産学教育は、３年次に助産学専攻者を決定し開始している。３年次の助産学の講義開始にあたっては、母性看護援助論や母性看護学演習と並行して行われており、母性看護学実習も未経験の時期であり、既習知識を活用できないなど講義進行上の問題がある。また、分娩取扱いを実施する助産学実習は６週間で、規定の実習期間では分娩例数が９例に到達できず、夜間実習と夏期休暇に２～３週間の延長実習を行い目標数に到達した。今年度の１学生の分娩介助数は、10例から12例で、平均10.3例であった。しかし、学部の助産学教育は時間外の実習時間が多く非常に過密であることが課題である。次年度以降、助産学を大学院に移行させて講義時間、実習時間を確保し教育目標にそったカリキュラム展開に取り組んでいく。

３　科目の教育活動

１）　助産学概論

３年次　前期

梅野 貴恵

助産の基本概念および女性をとりまく社会的背景を認識し、助産師の責務と社会変化のなかで期待される役割と重要性について、さらに助産師活動に積極的に取り組む姿勢について系統的に教授した。授業方法は主に講義形式で資料を用いて行った。女性をとりまく社会の変化や親子関係をめぐる諸問題などについては、グループディスカッションを行い、問題の中核を理解するように試み助産師に求められる役割を検討することができた。今後は、助産師としてのアイデンティティを培うことができるような授業展開を行うことが課題である。

２） 助産診断・技術学Ⅰ

３年次　前期後期

関屋 伸子、石岡 洋子、佐藤 昌司

母子とその家族への具体的な支援を修得すべく、妊娠期及び分娩期における母子の健康状態に関するアセスメント及びマタニティ診断とそれに基づく妊娠期の保健指導や分娩準備教育、親になる準備教育を教授した。具体的には、助産診断・技術学の概要をはじめとして、マタニティ診断、妊娠期のフィジカルアセスメント、妊娠期における日常生活適応へのケア、親になる準備と心理・社会的ケアなどを教授した。正常経過を辿る妊産褥婦に加えて合併症を持つ産婦へのケアや分娩経過異常および緊急時の対応を含めた。周産期医療におけるチーム医療とそれに伴う助産師の役割を見越して、産科医師による妊娠期の超音波検査を取り入れた。また、保健指導計画立案ではグループワークを取り入れたが学生の学習態度は積極的であった。評価は筆記試験及びレポート課題、出席状況、演習等の参加状況とした。これにより助産過程の展開に必要な助産技術及び助産の実践に必要な基本的技術を学び妊産婦の主体性を尊重した出産を支援する能力を養うことができた。

３） 助産診断・技術学II

３年次　前期後期

梅野 貴恵、和田 美智代

女性のライフサイクルにおけるセクシュアリティに関する諸問題を理解し、マタニティサイクルにある褥婦および新生児の助産診断を行い、助産を実践するために求められる内容を教授した。授業方法は講義と演習を組み合わせて行った。産褥の母乳育児支援は、実践で活躍する外部講師に2コマ依頼し、講義と演習を行った。学生は助産師の支援で母乳育児を推進していくことが可能であることを学んだ。また、授乳指導の演習を取り入れ、実際の指導場面を想定し体験した。産褥期の退院指導では、3グループに分かれ、指導案・パンフレットの作成を行い、ロールプレイで発表し意見交換や自己評価を行った。新生児の演習では、「新生児蘇生法アルゴリズム2010年版」に則り、新生児モデルで気管挿管まで体験した。学生はすべての講義・演習に積極的に参加した。

４） 助産診断・技術学III

３年次　前期後期

佐藤 昌司、飯田 浩一、豊福 一輝、嶺 真一郎、軸丸 美枝子、後藤 清美、中山 裕晶、堀友 希子、宇津宮 隆史、関屋 伸子

女性の性機能に対する知識に基づき、妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期における一般的な医学的管理及び各期における主な異常に対する病態とその検査・治療・予後について教授した。特に、妊娠経過の正常・異常を判断するために必要な最新の医学的な知識と技術の習得を目指して産科医師・新生児科医師を講師とした。講義はすべて看護研究交流センター講義室で実施した。講義内容は、女性の性機能を踏まえ、婦人科疾患とその管理、妊娠・分娩・産褥の病態、妊産褥婦の異常および胎児・新生児の生理と管理について展開し、NICUにおける新生児管理として低出生体重児の病態生理と管理も取り入れた。また、母体救命の意義と周産期医療システムを理解し緊急事態における判断と助産師の役割に対する理解を深めた。学生は講師からの発問の際にも積極的に回答していた。評価は講義終了後に筆記試験を実施した。

５）　助産診断・技術学Ⅳ

４年次　前期前半

梅野 貴恵、関屋 伸子、樋口 幸、石岡 洋子

助産学実習で活用するために、ペーパーペイシェントによる分娩期の助産過程の展開を実施させた。助産診断の考え方は、日本助産診断・実践研究会のマタニティ診断の概念枠組みを用いて講義を行った。正常経過をたどる初産婦の事例を用いて各自でアセスメントを学習したのち、グループワークを行った。全体発表の後、教員が解説することで理解を深めることができていた。ダブルスクールの２名は、異常経過をたどる産婦の事例にも取り組み、時間外に事例検討会を行った。

分娩介助演習では、側面介助法、正面介助法をとりあげ、講義とＶＴＲ試聴で一通りの流れを確認した。その後、デモンストレーションを行い３グループに分かれて、役割（直接介助者、間接介助者、新生児係、産婦）を決め、教員の指導のもとで実施した。学生は、最初は手順に沿って実施することで精一杯であったが、空き時間を利用して分娩介助技術を一通り行うことができるように評価表を用いて５回以上の練習を実施した。課題としては、分娩時期に応じた産婦への声かけなど、配慮を意識した技術習得には至っていない点を強化することである。

６）　地域助産活動論

４年次　後期前半

関屋 伸子、梅野 貴恵、宮﨑 文子、宮崎 豊子、生野 末子

母子保健の現状と動向を踏まえ地域母子保健行政の体系を理解し、助産の場を包含した地域に住む母子を対象とする助産活動を教授した。講義内容は、女性の健康ニーズにそった適切な助産管理として、特に、助産所（開業助産師）の経営管理と働く場の違い（病院・診療所等）を理解できるよう工夫した。また、関連法規と助産の義務・責任、国際化時代の母子保健、周産期の医療事故とリスクマネジメントなどの地域母子保健サービスについて展開した。評価は筆記試験とした。

７）　助産学実習

４年次　前期

梅野 貴恵、関屋 伸子、樋口 幸、石岡 洋子、渡邉 文子

助産学実習は、妊娠期から産褥期までの母子とその家族に対して助産診断・技術を用いて助産を展開する能力を身につけることを目的に実施した。本年度の助産学選択学生は12名（うちダブルスクール２名）である。実習施設は、分娩介助ができる病院・診療所４施設と助産所２施設の計６施設である。例年通り、分娩介助目標例数を学部生10例程度（９例以上）、ダブルスクール12例以上として取り組み、今年度は12名全員が10例実施し、平均分娩介助例数は10.3例であった。今年度は、実習中の体調不良者もなく実習終了できたが、夏季休暇中の休養が十分とはいえず、実習の成果を振り返り、整理する時間が限られていた。課題は、夜間待機実習と夏期休暇中の延長実習３週間によって分娩介助目標例数を到達していることである。

４　卒業研究

・思春期における性教育の現状についての文献検討－性教育における助産師の役割と課題－
・母親の育児不安を軽減する支援の文献的検討－母子をとりまく環境に着目して－
・女性の出産体験の満足感に関する文献的研究－日本女性と海外女性の認知の比較－
・我が国における子宮頸癌及びHPVワクチンに関する文献的検討－対象者の意識及び啓発活動から見えてきた課題－

３－５－14　精神看護学研究室

１　教育方針

看護の全領域で「人の心に焦点を当てた看護を行う」ために必要な視点・知識・技術・態度の習得をめざし、講義・学内演習・臨地実習の流れを構成している。特に、「対象者理解、自己理解し、および互いの関係性の理解」のために、知識を深めるだけでなく、演習・実習を通して体験的に学習できるよう努めている。卒業研究に関しては、できるだけ各学生の関心に沿ったテーマで研究を進められるよう配慮している。

２　教育活動の現状と課題

講義では、心の健康と疾患、精神看護と医療の歴史、精神的健康問題をもつ人への援助方法などについて、できるだけ具体例を紹介し、学生がイメージをもちやすいよう努めている。演習は続く実習への準備性を高めることをめざし、上記の目的に沿った体験的学習、当事者やその家族の実際にふれる機会、作業療法等の模擬体験で構成している。学生の感想・疑問・希望などは、その都度の小レポートで把握している。実習は、精神科医療機関において、精神疾患をもつ人、その家族、およびさまざまなスタッフの協力により行っている。実習に対する学生の不安も含め、自分について、相手について、互いの関係性について振り返ることを支援しながら、精神的健康に重点を置いた看護展開について学ぶ実習とした。初めはとまどいがちの学生も、さまざまな人との関わりを通して、座学では経験できない学びと、精神科医療に対する認識を深めたようであった。

３　科目の教育活動

１）　精神看護学概論

２年次　後期

影山 隆之

疾患と病態、治療の構造と方法について重点化を図ると共に、要点を示したパワーポイントを印刷配布し、nekobusでも公開した。出席確認を兼ねて授業内に小レポートを課し、次回にコメントを添えて返却した。これとは別に、授業の最後に、興味・理解・自由質問についての無記名式アンケートを自由提出させ、これに基づいて次の時間に振り返りと追加説明をして、学生が理解不十分だった点の解消に努めたことは、理解度の向上につながった（アンケートより）。

２）　精神看護援助論

３年次　前期前半

大賀 淳子

講義内容の精選方針は例年にならい、精神科医療および実習施設の現状を重視した。精神科医療の地域移行を踏まえ、講義の早い段階で地域における精神科医療と看護師の役割について扱った。さらに、毎回のミニレポート、ミニテストのフィードバックは今年度も踏襲し、学生の講義への積極的な参加を促すことができていると判断している（授業アンケート結果より）。毎回のポイントを明確に示すこと、ハンドアウトの資料の質を高めることが次年度への課題である。

３）　精神看護学演習

３年次　前期後半

影山 隆之、大賀 淳子、津隈 亜弥子

実習への準備性を高めるために、紙上事例について看護計画を立案し、事例の理解や看護計画について討論する演習を行った。自己理解、対象者理解、関係性の理解を深める方法を学ぶために、異和感の対自化、プロセスレコード、自己一致に関する演習を行った。実習の場で行われている治療プログラムのうち作業療法と生活技能訓練をとりあげ、体験演習を行った。また、実習施設の病院長や当事者の家族による特別講義も組み込んだ。提出物からは、学生の高い興味や関心がうかがえた。

４）　精神看護学実習

３年次　後期前半

影山 隆之、大賀 淳子、津隈 亜弥子、栗林 好子、桑野 紀子、井ノ口 明美

精神的健康に重点を置いた看護過程の展開と、自己理解、治療的関係についての理解、および地域で生活する精神障がい者を生活者として捉えることについて学ぶ目的で、大分丘の上病院で実習を行った。学習の場は入院治療と通院治療の二種類で、前者（病棟実習）は全員が経験し、後者（デイケアや訪問看護など）の実習は希望者のみ（実習施設が提示した定員枠の範囲で）が経験した。

入院患者のための治療プログラムを学ぶ演習を事前に行ったことで、学生はプログラムの意義を理解して積極的に参加できたようである。デイリーカンファレンスでは、各学生の学習体験の共有を図ることと、不安やとまどいを共有しながら自己、相手、相手との関係、などについて理解を深めさせることに、配慮した。今回の実習で初めて、対象者のアセスメントに基づき看護診断を考える作業を課したことは、他領域における看護との共通点を理解するという面では有益だったが、目標の達成度には学生により差が見られた。記録様式を集約した実習ノートは使いやすい面もあるが、指導者による添削の便宜などを考えて工夫すべき余地もある。カンファレンスやレポートでは、学生自身も治療的環境の一部であることや、自身の感情をアセスメントの道具として相手との関係を構築していくことの重要性を学んだ様子がうかがえた。

引き続き、実習構成、講義・演習との連続性について、検討を重ね改善を図ってゆきたい。

４　卒業研究

・統合失調症患者・家族の回復過程における社会資源活用の有効性－家族へのインタビューを通して
・認知症を疑って受診した患者・家族の現状
・看護学生が経験している″共感″についての文献的研究－実習場面に着目して－
・交替勤務者の生活習慣と不眠症状－夜勤時の就寝時刻および食事との関連

３－５－15　保健管理学研究室

１　教育方針

地域社会で生活する人々の健康を支える看護職者に必要な知識と技術を習得するとともに、学生が自律して学習する態度を身につけて欲しいと考え、教育プログラムを組み立ててきた。さらに、新カリキュラム、新新カリキュラムへの移行に伴い、統合領域の科目が増え、今年度から在宅看護についても教授することとなった。このため、これまでの講義・演習の組み立てに加えて、地域で生活する人々の多様な健康ニーズにあった看護を提供するためには、ケースマネジメントが重要であり、社会資源の活用や他職種との連携・共同など、在宅ケアにおけるマネジメント能力を育成したいと考えている。

２　教育活動の現状と課題

講義においては、今日の社会の変化に応える最新の知識の提供を目指すとともに、多様な健康ニーズと社会の要請に対応できるよう内容の検討を行ってきた。また、例えば３年次前期の在宅看護論では、１年次、２年次で学習した内容から、学生が在宅で療養する対象について具体的なイメージができるよう、実習で経験した事例をもとに退院後の計画を考えたり、小グループでの演習を取り入れるなどの工夫をした。

今後は、災害看護、在宅看護、看護管理など統合領域のカリキュラム内容を充実させる必要があり、地域資源を活用したマネジメントができる看護職を育成していきたいと考えている。このためには、学生の学習状況に応じた教授方法を工夫しつつ、これまで学んだ内容を統合して看護ケアを提供していくことができる能力が養われるよう演習やディスカッションを組み入れたさらなる学習方法の工夫をしていきたいと考えている。

３　科目の教育活動

１）　健康論

１年次　前期前半

桜井 礼子、平野 亙、井ノ口 明美、山田 淳子、坪山 明寛

健康の概念と健康に対する考え方の歴史的変遷を理解し、健康の意味を考え、健康の維持・増進の重要性について学ぶことを目的とした。さらに人々の健康ニーズを把握し、健康増進活動における看護職の役割を認識するとともに、生活習慣と健康との関連を意識し、学生が自らの生活体験を通して健康を考え、また生活習慣を見直すきっかけとなるよう講義を行った。また、今年度から早い時期に救急法を身に付けられるよう、日本赤十字社の赤十字救急法基礎講習（AEDを含む）を受講、講義と演習を通して心肺蘇生法を習得した。

２）　保健福祉システム論

２年次　後期

平野 亙

社会資源に関する理解は単なる国家試験対策ではなく、看護職に必要な事項であり、とくに、社会保障が国民のいのち・健康と生活を守るための制度的保障であることを理解する必要がある。そのため、まず「生存権」について論じたのちに、社会保険、国家扶助および保健・医療・介護・福祉を内容とする社会保障制度の概要とその意義を論じた。また保健師に必要な行政・財政について理解するため、その概要を教授した。授業回数が15回に限定されているため、保健活動論等の講義で詳述される項目は省略したうえで、福祉・介護をはじめ高齢化社会に求められている制度を中心に講義を整理し、できるだけ体系的に理解できるよう構成した。加えて、臨床におけるルールであるインフォームド・コンセント、個人情報保護法、ノーマライゼーションの理念など、患者・障がい者の諸権利を保障するための基本事項について論じ、専門職としての行動に必要な基礎知識を獲得できるようにした。

今年は出席した学生の学習態度が比較的良好であったが、出席率が低くない学生の中にも、成績が著しく良好でないものがおり、たんなる講義出席への動機付けによる学習意欲の向上ではなく、理解を支援するための講義方法について工夫の要があると考えられる。

３）　保健管理学演習

３年次　後期後半

桜井　礼子、平野 亙、井ノ口 明美、山田 淳子

保健・医療・福祉の場において、看護職の視点から集団の健康問題に対して、保健活動のひとつである健康教育の展開方法とその実践力を養うことを目指した。演習方法は、地域、学校、産業などの保健活動の場での事例を用いて、それぞれの健康問題を明確にして健康教育をどのように行うか、グループに分かれてグループワークを行った点は、昨年度と同様である。発表会では、各事例についてすべてのグループが教育場面のロールプレイを含むプレゼンテーションを行い、ディスカッションを通して考えることができる場とした。学生は、健康教育の対象となる個人および集団の特性を現実的にとらえアセスメントすることや、様々な条件を考慮して教育プログラムを考えるといった点で、グループによって差がみられた。しかし、発表会での討論ではポイントをおさえた質疑が出され、活発な意見交換ができ学びを深めることができていたと考える。

４）　初期体験実習

１年次前期（7月5日（火）～7月12日（火）の6日間）

足立 綾、安東 照美、井伊 暢美、石田 佳代子、井ノ口 明美、江月 優子、大賀 淳子、河野 梢子、栗林 好子、桑野 紀子、佐藤 弥生、高波 利恵、田中 佳子、津隈 亜弥子、津留 英里佳、橋口 久代、福元 幸志、堀 裕子、水野 優子、山田 淳子、平野 亙、桜井 礼子

初期体験実習は、３日間の施設実習と学内でのグループワーク、発表会で構成されている。施設実習を通して、看護職の活動を見学し自ら体験することにより、保健・医療・福祉の場において、看護の実践の場の広がりや看護の役割を理解すること、また対象となる人々の多様な健康ニーズを理解すること目指している。さらに、施設実習後に学内でのグループワーク、発表会を通して、今後の学習の動機付けをすることも目標としている。学生にとって第一段階の初めての臨地実習であり、学生が実習で自らが体験して学ぶプロセスも重要な課題ととらえ、学生へのオリエンテーションを充実させるとともに、担当教員にも係わってもらいながら実習をすすめることができた。

実習施設：20ヶ所
事 業 所：新日本製鐵株式会社大分製鐵所、昭和電工株式会社大分事務所
保健福祉施設：大分県こころとからだの相談支援センター
健 診 機 関：大分労働衛生管理センター
学　校：大分県立新生養護学校、大分大学保健管理センター
病　院：大分県立病院、農協共済別府リハビリテーションセンター、
湯布院厚生年金病院、別府発達医療センター、緑ヶ丘保養園、
大分赤十字病院、国立病院機構 西別府病院、大分市医師会立アルメイダ病院、
中村病院
介護老人保健施設等：介護老人保健施設　わさだケアセンター、
介護老人保健施設 健寿荘、特別養護老人ホーム 百華苑、
特別養護老人ホーム 寿志の里
地域保健：大分市

４　卒業研究

・三次元動作解析を用いた床面からの立ち上がり動作の特徴と介助方法の検討
・障がい児保護者への心理的支援のあり方　～自閉症児保護者の経験から～
・高齢者におけるインピーダンス法を用いた体組成測定値と体力の関連
・在宅ケアにおける訪問看護師と訪問リハビリテーション専門職との協働のあり方に関する検討
・高齢者の足指筋力と足の形状とバランス能力との関連

３－５－16　地域看護学研究室

１　教育方針

看護を展開する対象として個人・集団・地域へと視点を拡大し、地域全体を包括的に捉えた看護活動をおこなうために必要となる基本的な思考力を身に付け、支援方法を学ぶことを目的とし、地域看護学概論、家族看護学概論、地域生活支援論、地域生活援助論Ⅱ、地域看護学実習を展開している。特に15コマの地域看護学概論、30コマの地域生活支援論では、保健所や市町村で働く保健師の講義を取り入れ、地域看護活動の現状や課題について学習が深められるようにしている。担当科目および関連領域科目との講義と演習、実習の連動性を考慮して、演習や実習の内容や展開方法に工夫を凝らしている。

２　教育活動の現状と課題

地域看護学概論、地域生活支援論の講義では実践活動との連動性を重視し、保健所や市町村で働く保健師の講義を取り入れている。さらに、実習の場において個人・家族、集団、地域を対象とした具体的な看護展開が実施できるように、学内演習では実習場面を意識した事例を用いて、ロールプレイ等をおこなっている。開講時期が実習直前である地域生活援助論Ⅱでは、地域の健康問題を踏まえた活動内容が理解できるよう、実際に学生が実習をおこなう市町村の既存資料を基に、地域看護診断をおこなっている。また、個人・家族を対象とした支援では、新生児や生活習慣病などの事例を基に、保健師がおこなう家庭訪問における看護過程の技術を展開することで、地域での看護活動の視点や具体的な支援技術について理解し習得できるように工夫している。今後も社会の変化に対応し得る看護支援を目指して、常に教育内容を繰り返し検討していく必要がある。

３　科目の教育活動

１）　地域看護学概論

２年次　後期

江藤 真紀、赤星 琴美、藤内 修二、中野 洋子

地域における個人・家族、集団への看護活動をおこなうために、地域住民の主体性を重視し地域看護学の基本的内容について講義をした。今年度より新カリキュラムになったためコマ数が倍となったためその分、公衆衛生の概要や地域看護学の概念、プライマリ・ヘルスケアとヘルスプロモーション、地域看護活動の場の特性、地域看護活動の対象と方法（個人・家族、集団、地域社会）など十分な時間の確保ができた。また、地域看護の変遷や大分県の地域看護活動等についても教授することができた。常に資料やパワーポイント、DVDなどを活用することで学生が保健師像をイメージでき、かつ地域看護学についての理解が深められるように教授した。

２）　家族看護学概論

３年次　前期

赤星 琴美、江藤 真紀、高波 利恵、堀 裕子

家族が主体的にセルフケア能力を高め、健康的なライフスタイルを獲得していくために必要とされる家族看護の基本的な考え方と支援方法について講義と演習をおこなった。内容は、家族看護学の概念、家族の機能と家族看護、家族を理解するための諸理論、家族看護における看護職の役割、家族看護過程、家族看護過程の演習である。特に家族看護過程の演習では、家族をひとつのユニットとして捉えて援助するカルガリー看護アセスメントを取り上げ、その意義や方法が理解できるようにグループワークをおこない、より具体的に看護過程の展開が学習できるように工夫した。

３） 地域生活支援論

３年次　後期後半

江藤 真紀、赤星 琴美、高波 利恵、加来 理香、浜野 清子

保健所、市町村を基盤とした行政機関における地域看護活動の展開や対象別地域看護活動について講義と演習をおこなった。内容としては、地域看護活動の展開、地域におけるケアシステム、家庭訪問、健康相談、地区組織化活動（セルフヘルプグループの育成）、対象別地域看護活動（母子保健活動、難病保健活動、成人保健活動、高齢者保健活動、障害者保健活動、精神保健活動、感染症保健活動、災害看護活動）、市町村における地域看護活動などであった。保健所や市町村の保健師を講師として招くことで、地域看護活動の実際や課題などについて活動方法や事例を使いながら講義をおこなった。また、地域看護活動の一部では演習を組み入れることで、二次データの使い方、地域の健康問題の抽出、生活の場としての地域の捉え方を教授した。さらに感染症保健活動では講義と連動させた感染症法に基づく二類感染症である結核の事例を用いた演習を実施し、保健師がおこなう看護過程の展開をすることで、具体的な支援方法について学習をおこなった。演習終了後には常に学生へのフィードバックをおこない、演習内容の自己評価とともに学習に深みを持たせられるように配慮した。

教育方法については、学生が知識やイメージを深められるようにパワーポイント、DVDや資料を活用した。今後も授業の進捗状況と学生の理解度に合わせた教材の選出と効果的な活用方法について検討を重ねていきたい。さらに地域保健領域での目まぐるしい法改正や保健事業の見直しなど、常に新しい情報をすばやくキャッチし、新鮮な情報を学生へ提供しつつ、複雑化する行政機関における地域看護の役割・機能を具体的に理解できるよう努力をする必要がある。

４） 地域生活援助論II

４年次　前期前半

江藤 真紀、赤星 琴美、高波 利恵、桑野 紀子、堀 裕子、佐藤 弥生

地域看護学実習の直前の演習として位置づけ、実習地域の二次的データを用いた地域診断の実施、新生児家庭訪問時の育児指導と児の計測実技、生活習慣病の事例に対する家庭訪問時の保健指導、高齢者の入浴介助等のロールプレイをおこなった。毎時、グループワークをおこなう中で学生の理解度、技術習得状況に応じて指導をした。特に二次的データを用いた実習地域の地域看護診断の結果を実習開始時に実習指導者に提出し、実習指導の反映させていただく資料をするなど、地域看護学実習との連動性を高く維持した。さらに新生児家庭訪問での母親に対する育児に関する訪問指導では、知識と技術の統合の重要性を実感できるように工夫した。

５）　地域看護学実習

４年次　前期前半

江藤 真紀、赤星 琴美、高波 利恵、堀 裕子、桜井 礼子、平野 亙、井ノ口 明美、山田 淳子、佐藤 弥生、桑野 紀子、秦 さと子、栗林 好子、福元 幸志、佐藤 秋子、河野 梢子、田中 佳子、薬師寺 綾、津隈 亜弥子、安東 照美、白石 京子

大分県下全域の保健所（保健支所含む）９か所と市町村保健センターおよび支所21か所、訪問看護ステーション24か所、合計54か所の施設に、それぞれ２～４名の学生を配置し１～２週間（大分市保健所のみ３週間）の実習をおこなった。

実習指導体制は、それぞれの施設の看護職（保健所と市町村は保健師、訪問看護ステーションは看護師）が実習の現場で直接的な指導をおこない、担当教員は各施設を巡回することで学生と指導者の双方の状況把握をおこないながら、中間カンファレンスや修了カンファレンスでの指導、記録物の指導などをおこなった。実習内容は、市では少なくとも１件の訪問指導を、訪問看護ステーションでは数件の訪問看護を体験せきるように調整をおこなった。また、全員の学生が保健所または市で健康教育について計画・立案、実施、評価の一連の過程を体験し、集団を対象とした看護支援を学習した。

今後は、学生が法改正や保健事業の見直し等に対応できる実習を展開できるよう実習内容や形態の工夫がさらに必要となる。

４　卒業研究

・育児不安研究における不安の具体的内容
・B社における職場の組織特性と労働者の心理的ストレス反応の関係
　～職場の指示系統に着目して～
・地域高齢者の転倒に及ぼしている影響要因の検討
　－視認能力と下肢筋力の関連性に着目して－
・がんに対する予防行動の特徴と関連要因の検討
　－女性パートタイム従事者に着目して－

３－５－17　国際看護学研究室

１　教育方針

International nursing courses aim at the development of an understanding of global cooperation and networking of health and of nursing, and the development of an understanding of global health issues and strategies; and the realization of roles and responsibilities of nursing profession in the global era in the diverse socio-economic, cultural, and eco-geological context. The age of transculturalism and the trend of globalization of ursing are essential today. Globalization necessitates a comparative perspective with the maintenance of holistic care and the prevention of illnesses.

Transcultural Nursing as well as International Nursing has also emphasized a comparative and holistic perspective. Nurses must move beyond an international focus of studying the relationships between two cultures to that of considering several cultures from a transcultural comparative focus. This means expanding one's views and using critical analysis by contrasting insights and knowledge from several country cultures.

Three mandatory courses for baccalaureate students, one for sophomore class and two for junior students are planned and carried out.

２　教育活動の現状と課題

Language used for the classroom activities; Texts, sentations, questions and answers are carried out in English. To promote the understanding, texts including the lists of references with exercise questions are distributed at least one week ahead of actual lectures. English proficiency of the students are to be promoted.

Autonomy of the study; Detailed seminar orientation such as on the themes of selfstudy, references, methods of presentation, and a focus of group-study were planned and presented by the faculty at the beginning of the Quarter. Grouping of students for selfstudy and choice of the themes are assigned to the students for the student's autonomy by the class-leader.

Activities and autonomous participation by the students are to be promoted.
Evaluation of the courses by the students; Students were provided with the opportunities to evaluate the course. Evaluation for the level of achievement of the aims and objectives of the course, contents of the course, time allotment and teaching methodology etc. were planned by the faculty and carried out by the students.

３　科目の教育活動

１）　国際看護学概論

２年次　後期後半

S. W. Lee, N. Kuwano

Objectives and contents:

1.To develop an understanding of the concept of, and to define international health and international nursing.
2.To describe the background, course and trends of international cooperation and globalization of health care.
3.To understand the context, scope, principles and approaches of international nursing.
4.To develop an understanding of the perspectives of international health issues and strategies.
5.To develop an understanding of the international health and nursing networks.

Contents:

1.Orientation and introduction to the nature of international nursing -definition, characteristics, aims-
2.Introduction to the nature of international nursing - relations with some factors: preparation, history-
3.Main nursing concepts and trends of international nursing and health - Globalization nursing, transcultural nursing, international cooperation-
4.Trends of international nursing and health, -Global health care problems, history, models for services-
5.Risks to health and life in the world - Introduction, risks factors, mortality causes, communicable disease -
6.Risks to health and life in the world - Non-communicable disease -
7.International networking of health; WHO
8.Wrap-up, evaluation of the course

２） 国際看護比較論

３年次　後期後半

S. W. Lee, N. Kuwano

Objectives:

1. To develop an understanding of the context, scope and approaches of international nursing and international health.
2. To develop a global perspective of issues and strategies on health and of nursing
3. To develop an understanding of the need for human resources development for global health and nursing.
4. To develop an understanding of the role of the international health, nursing and relief networks and the impact of international aids during war and disaster.

Contents :

1. Overview of international nursing from international health & nursing to global health perspectives Issues & challenges for health development (Poverty, Gender, Culture & Health Care, Environment)
2. Global strategies for all health Human resources
3. Work force related to ICN International Relief Organization: JICA
4. International Relief Organization Red Cross

３） 国際看護学演習

３年次　後期後半

S. W. Lee, N. Kuwano

Objectives of the Course:

1. To develop an understanding of the concept, scope and approaches of international nursing/health in the diverse eco-geological, socio-economic, cultural and political context.
2. To develop understanding of the system of and the need for planning and development of the human resources for global nursing and health.
3. To develop an understanding of the role of the international nursing, health and relief networking.

Activities:

Orientation to the course activities includes;
Aims and objectives of the course, grouping, designation of role of each member, themes of the group study and presentations, time allotment and place allocation, references, soft and hard computer aids and equipments for the study and presentation.

Group-works / studies:

Carried out by students; grouped into 4Gr.-5Gr., according to prior planned schedule.

Themes for the group-works / studies and presentations;

I. Health issues and strategies; of a population group
II. Health issues and strategies; of a nation
III. Human resources for health or/and nursing of a nation
IV. Foreign Country’s Impact and context of aids by JICA

４　卒業研究

・日本と韓国の女子大学生の性教育に関する意識
　— 看護系大学生と一般大学生を対象として —
・看護学生の死に対する意識　— 日本と韓国、インドネシアを比較して —
・看護学生の国際看護活動に対する興味と関心　— 日本と韓国を比較して —

３－５－18　人間科学科目

１）　自然科学の基礎

１年次　前期

甲斐 倫明、小嶋 光明、岩崎 香子、定金 香里、品川 佳満、小野 孝二、吉田 成一、首藤 信通、佐伯 圭一郎

自然科学の基礎として習得しておくべき基本的事項を学ぶ。高校までに十分に習得できなかった項目を学ぶための講義であると同時に、自然科学の考え方について理解するための講義となっている。講義内容は次の通りである。
1) 入学後試験（物理、化学、生物、数学）、2)科学的自然観とは、3)生物：細胞、4)生物：細胞分裂の仕組み、5)生物：DNA複製の仕組み、6)生物：遺伝子・遺伝の仕組み、7)生物：遺伝の仕組み、8)生物：タンパク質合成の仕組み、9)生物：生物の発生-受精、10)生物：生物の発生-胚発生、11)化学：原子の構造と化学結合、12)化学：モルと濃度計算、13)化学：化学変化：酸化と還元、14)酸とアルカリ、15)化学：有機化合物の構造、16)物理：力とエネルギー、17)物理：熱・温度と相変化、18)物理：電気と磁気、19)数学：数学の基礎１、20)数学：数学の基礎２、21)数学：数学の基礎３

２）　健康科学実験

２年次　後期

下田 浩、岩崎 香子、安部 眞佐子、市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里、甲斐 倫明、小嶋 光明、小野 孝二、稲垣 敦、外部講師１名

本健康科学実験は２年次生に実施しており、基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的としている。これ迄1年次に行ってきた解剖実習（大分大学医学部で行われている）を今年度より２年次の健康科学実験に取り入れた。実験テーマは以下、10テーマからなる実験を行った。1）組織学実習、２）解剖実習、３）血液検査、４）基礎微生物学実習、５）ラットの解剖、６）室内空気汚染と水質汚染、７）放射線、８）染色体異常、９）最大下負荷での呼吸循環器系持久力の測定、10）心電図。

３）　総合人間学

４年次　後期前半

教育研究委員会委員

さまざまな分野で活躍され、かつ造詣の深い講師の物の見方や考え方を通して、人間として、医療者として備えておくべき豊か知識と感性を養うことをねらいとしている。なお、本科目は公開講義とし、県内に広く情報を提供して参加を促している。本年度の開講日、テーマ、講師を以下に示す。

第1回10月17日：国政を担当して　：南野知恵子
第2回10月19日：ピノキオコンサートat大分県立看護科学大学：出口正子、伊藤京子
第3回10月24日：社会人のマナー　：酒井祐一
第4回10月31日：　ワークライフバランス　：小川　忍
第5回11月7日：　災害看護　：黒田裕子
第6回11月14日：生命倫理・医療政策　：薬師寺道代
第7回11月21日：色彩心理「カラーセラピー」　：鍵谷英美
第8回11月28日：世界への挑戦　：本間三和子

３−５−19　統合科目

１）　看護と遺伝

２年次　前期後半

定金 香里、岩崎 香子、吉河 康二

講義前半では、中学・高校レベルの基礎的な遺伝の仕組みについて学習することに重点を置いた。メンデル遺伝および遺伝疾患発現、遺伝子変異が関与する疾患や体質との関連について講義し、看護師として知るべき単一遺伝子疾患の遺伝メカニズムを理解できるよう配慮した。講義後半では臨床遺伝学についての講義を行った。メンデル遺伝病、多因子遺伝病、ミトコンドリア遺伝病、および染色体異常症、遺伝学的検査について、概要を述べるとともに、実際の遺伝カウンセリングにおいてどのように応用されるのかについて述べた。

２）　看護の倫理

２年次　後期

平野 亙、小野 美喜

看護職に必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的規範に基づく判断のための思考訓練を行うことを目的に講義を行った。講義は、「Bioethics・新しい医療倫理の展開」・「生命倫理の方法」・「Profession の責任と倫理」・「個人の尊重、人間の尊厳と自立支援」・「生殖と誕生にかかわる倫理」・「生と死に関わる倫理」・「医療従事者の責任と事故対応」の７回を平野、「看護職の価値観と文化、社会規範」を小野が担当した。また講義の中で、「ケースブック医療倫理」（医学書院）をテキストに事例演習を行った。講義時間中にミニレポートを課して講義内容の整理と出席管理を行い、ミニレポートの提出と個人課題レポートにより成績評価を行った。

今後の課題としては、学生に予習の習慣がなく、また少人数での討論が形成できないために、事例演習が双方向的な討論の場になりにくく、教員の注釈に終始することがあげられる。学生の主体的な講義参加を促すための工夫が改めて必要と感じられた。

３）　保健活動論

前期後半・後期

桜井 礼子、平野 亙、高波 利恵、井ノ口 明美、山田 淳子

地域に在住する人々で、特に学校、産業の場での法令に基づいた保健活動のあり方と実際を教授した。また、看護職として個人及び集団の健康の保持・増進、疾病予防のための支援のあり方を理解するとともに、保健活動の具体的な実践方法とその評価について学ぶことができるよう講義を構成した。また、地域の救急医療の現状と災害看護活動、及び救命活動の実際を理解し、救急救命処置の一つとして心肺蘇生術の実践、AEDの使用ができるよう、日本赤十字社の協力を得て演習を行った。さらに、災害看護について授業時間を増やし、災害サイクルに応じた看護職の役割について教授した。

４）　在宅看護論

３年次　前期前半

桜井 礼子、平野 亙、佐藤 弥生、井ノ口 明美、山田 淳子

疾病や障害をもちながら地域で生活する人々とその家族に対して、在宅看護を行うために必要とされる基本的な考え方や援助方法を理解することをねらいとした。新カリキュラムとなり、３年前期に講義が早まったことから、できるだけ在宅でのイメージを持つことができるよう事例などを提示しつつ教授した。

５）　総合看護学演習

４年次　後期前半

市瀬 孝道、桜井 礼子、藤内 美保、秦 さと子、関屋 伸子、猪俣 理恵、小代 仁美、桑野 紀子、高波 利恵、津隈 亜弥子、中釜 英里佳

４年次生後期に看護基礎教育の総仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を有機的に統合し、適切なアセスメント能力および看護技術を提供できる能力を養うことをねらいとしている。専門領域の６事例（小児、母性、急性期、慢性期、ターミナル、在宅）を用いて、アセスメント能力や、安全安楽な看護技術を提供できることを目標とし、課題にそったグループワークを行い、その成果を全体発表会で、事例報告とロールプレイを行った。
グループワークやロールプレイのための事前練習には、どのグループも熱心に取り組んでいた。

事例発表と課題のロールプレイでは、事例について病態生理やアセスメントをきちんと行うことができているか、実際の医療的処置や看護ケアの場面がイメージできるかによって、事例の健康問題の捉え方やロールプレイの完成度に差がみられた。ロールプレイでは、今年度も教職員が患者・家族役を演じてもらい、その後感想を述べてもらったが、患者・家族がその場面でどのようなことを感じているのかといったコメントが多く、学生の気づきにつながったと考える。また、ロールプレイ後のディスカッションも、学生がそれぞれ疑問点などを出し合い、学びを深めるのによい機会となっていた。

６）　基礎看護技術演習

３年次　前期後半

看護系教員全員　運営担当：津隈 亜弥子、桑野 紀子、足立 綾、藤内 美保

３年生の専門看護学実習の前に、看護系教員全員が関わり技術チェックを行うものである。卒業までに、学生全員が、看護実践の基本的能力として幅広い視野から人間と人間生活を理解し、確実な倫理観をもって行動する態度と姿勢を身につけること、自己研鑽しながら看護実践能力を高めていく姿勢をもつことをねらいとし、4年間の学習進度に合わせて段階的に学習できるように３段階からなる技術演習を設けており、本演習はその第１段階である。10年以上前から自主学習として技術チェックを行ってきたが、今年度より単位化された。

本演習の目的は、対象への安全・安楽に配慮した看護基本技術の実践能力を身に付けることであり、具体的には以下の４点を習得する。1）日常生活援助技術は、１人で確実に実施できる。2）患者の安全・安楽を保障する技術は確実に実践でき、リスクの判断ができる。3）単に技術のhow-toだけではなく、技術の根拠・方法の選択など判断能力を養う。4）患者への配慮を実践に反映できる。学生オリエンテーションを7月に行い、必修項目の血圧測定と14の課題事例を提示し、それぞれに必要なケアを考えさせ、技術練習を行うよう指示し、9月の4段階実習前に技術チェックを行う。教員１名につき2～3名の少人数の学生を担当し、きめ細かにチェックする。今年度は、課題事例に必要なケア計画を立案させ、実施し、終了後は観察項目を記録用紙に記載することを試み、学習効果があった。終了後は自己評価および教員評価を行い学生へのフィードバックを行った。１回目で合格したものは76名中64名、2回目では全員が合格した。

７）　総合看護学実習

４年次　前期後半

看護系教員

本科目は実習教育の最終段階に位置づけられており、学生の自律性と総合的な判断力を育成することをねらいとしている。学生は第４段階までの実習体験から各自の到達度を踏まえて課題を明らかにし、自らが希望する領域と実習施設を選択する。各施設（部署）には原則として学生1名の配置とし、自ら実習目標・計画を立て、主体的に実習を展開する。総合実習の具体的な準備については、教育研究委員会所管の実習WGが担当した。実際の実習では看護系教員全員が学生を分担し、学生は配置決定後の２月から担当教員の助言を得ながら実習目標・計画の立案を行なった。実習に際して、担当教員は学生に同伴しないが、施設側との情報交換を十分に行い、学生の実習目標の達成を支援した。今年度は大分県内の43施設の協力を得て実習を行なった。

８）　看護科学研究

３年次　後期後半

桜井 礼子、大賀 淳子、吉田 成一、松本 初美、影山 隆之、稲垣 敦、小野 孝二、秦 さと子

本科目は、卒業研究の意義や論文作成迄の一連の過程で必要とされる基本的な考え方、進め方、知識や技術を修得することを目的としている。２日間の集中講義で行なった。講義のテーマと講師は以下のとおりである。

(1)卒業研究の意義　：桜井礼子
(2)研究の倫理と安全　：大賀淳子
(3)実験研究の進め方の基礎　：吉田成一
(4)文献的研究の進め方の基礎　：松本初美
(5)調査研究の進め方の基礎　：影山隆之
(6)データ解析の基礎　：稲垣　敦
(7)文献検索の方法・文献の入手法　：小野孝二
(8)論文のまとめ方・発表の方法　：秦さと子

９）　卒業研究

４年次　前期後期

教授、准教授、講師、助教、助手

本年度は各研究室に配属された卒論生81名が卒業研究を行った。卒論生は平成23年12月9日に卒業論文を提出し、平成23年12月12日、13日の卒業研究発表会にて学生一人一人が研究成果を発表した。

３－６　大学院における教育活動

３－６－１　博士（前期）課程

１）　老年ＮＰ特論

１年次　後期後半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、桜井 礼子、安部 眞佐子、影山 隆之、佐藤 弥生、宮成 美弥、木本 ちはる

EBNに基づいたケアを提供できる実践能力を高めるために、加齢に伴い生じる身体的・精神的・社会的機能の変化と、老年期の発達課題を理解し、NPとしての看護を実践する理論、方法を探究することを目的として講義を行った。NPの看護の対象者は、健康増進や疾病予防を必要とする高齢者や、慢性疾患をもち生活している高齢者であり、各健康レベルにおける看護を専門とする大学教員や臨床で活動する認定看護師などがオムニバス方式で教授した。昨年度に引き続き、学生の身近な高齢者ケースをアセスメントしマネジメントプランを立案する課題を課しプレゼンテーションを行った。発表に対する意見交換によって各自の課題が明らかになり、今後の学生に継続する学びとなった。

２）　老年疾病特論

１年次　前期後半

麻生 哲郎、安東 優、糸永 一朗、伊奈 啓輔、兒玉 雅明、小寺 隆元、財前 博文、竹下　泰、藤富豊、増井 玲子、吉留 宏明

老年期にある対象者に適切なプライマリケアを提供するために、NPに必要な老年期によくみられる疾病について学び、その診断・治療（検査・処方）について理解することを目的に行った。実際にNP実習を指導している医師および地域の医療機関で診療を行っている医師を、新たに非常勤講師として依頼し各専門領域の講義を展開した。NP対する理解が深い非常勤講師によって授業が行われたため、プライマリ診療を行うNPに必要な疾患の知識にかなり的をしぼった内容とすることができた。ただし各診療領域の時間数は限られており、すべての疾患を取り扱うことは難しく、学生の授業外の主体的な学習は必要であることは、例年通りの課題である。さらに、診療ガイドラインを用いて基本的な治療を学習することを強化していきたい。

３）　老年臨床薬理学特論

１年次　後期

吉田 成一、伊東 弘樹

診断後、医薬品を処方するにあたり必要となる基礎的な薬理学総論および各種疾患の治療に用いる医薬品に関し、作用、副作用、相互作用等の面を重点的に身につけるための講義を行った。医薬品の商品名と一般名の双方を理解できるよう心がけ、講義を行った。最終日に筆記試験を行い、当該科目の理解度を確認した。

全ての学生は看護職のため、自身の勤務先で使用している医薬品に関しては商品名での理解は高いものの、一般名に触れる機会がないため、習得が難しい部分が散見された。本年度より、講義回数が増えたため、受講生にとって、幅広い知識を得ることができたと思われる。

４）　老年診察診断学

１年次　後期

下田 浩、三重野 龍彦、矢野 庄司、石飛 裕和、岩波 栄逸、安部 航、吉岩 あおい

プライマリーケアの修得を目的として、症状や徴候から病因や病態を診断するための診察や検査（尿・血液検査、X線レントゲン、超音波など）の基礎知識と基本技術について教授した。講義・演習は医師所属の医療施設や本学講義室などで行われ、最終日には筆記試験を実施した。

５）　老年アセスメント学演習

２年次　後期前半

下田 浩、兒玉 雅明、立川 洋一、小野 美喜、松本 初美、桜井 礼子、石田 佳代子、福田 広美

老年ナースプラクティショナー養成コースの授業科目として、老年看護の対象（高齢者・家族・地域社会）への健康アセスメント、家族的治療アセスメントを行うための専門的知識と技術の習得を目的として、症状をもつ対象者の初期診療と慢性疾患をもつ対象者の継続診療に関するトレーニングを行った。

６）　老年薬理学演習

２年次　前期前半

濱田 一、須崎 友紀、松崎 忠史

成人や高齢者の初期治療、症状マネジメントに使用される薬物使用について、アセスメントおよび医療処置管理ができることを目的に、事例に適した薬物の選択やマネジメントについて演習を通してトレーニングを行った。高齢者に生じやすい副作用や薬価も考慮した薬物選択について事例を通して学習を行った。

７）　老年ＮＰ実習

２年次　前期後半・後期前半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、桜井 礼子、石田 佳代子、下田 浩、立川 洋一、小寺 隆元、財前 博文、増井 玲子、石丸 修、麻生 哲郎、川上 克彦、酒井 浩徳

実際のプライマリ診療を行う場で実践力を身につけることを目的にNP実習を展開した。昨年度の実習評価から改善を加え、今年度は病院施設8週間、老人保健施設２週間、診療所4週間の合計12週間で構成され、病院実習と老人保健施設実習の間に１週間のセミナー期間を設けた。昨年同様に１施設1名の学生配置で4名の学生が履修し、医師、大学教員ともマンツーマンでの指導形式をとった。さらに実習前後に施設長、主指導医、看護部長、大学側との合同会議を設け、実習目標と方法の共通理解、評価を共有し大学と各施設との連携をとった。事故なく無事に実習を終了することができた。臨床実習では医行為のみならず、医療スタッフとの連携・協働の実践を強化し、NPに必要な7つの能力をそれぞれ到達させていくことが今後の課題である。

８）　老年実践演習

２年次　前期後半

小野 美喜、下田 浩、藤内 美保、福田 広美、松本 初美、古川 雅英、佐藤 博、山本 真

老年NPに必要な医療行為を習得するために集中演習をおこなった。学生相互による医療面接や診察技術の訓練と患者体験を実施しスキル向上につなげた。さらにシミュレーターを用いて創傷処置、胃ろうカテーテルの交換など複数の治療技術について個々の病態をふまえて安全・確実に実施できるようにした。臨床現場からのニーズもあり気管挿管や末梢動脈血採血も加え、実習前に習得すべき医療行為を学び自己トレーニングを繰り返し実施した。

９）　老年ＮＰ探求セミナー

２年次　後期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、桜井 礼子、石田 佳代子、下田 浩

老年NP実習にて診療を担当したケースを振り返り、文献等を活用しながらケースレポートの作成をした。ケース発表会では担当教員や他学生との意見交換をとおして知識強化し、全学生との共有を促進した。さらに次段階の実習準備として介護老人保健施設での研修を設けた。セミナーによって病院実習の学びの整理ができ、医療体制や保険制度の異なる実習施設で療養する高齢者の健康問題とNP役割の考察につなげられた。

10）　小児アセスメント学演習

２年次　前期・前半

高野 政子、小代 仁美、岩松 浩子

小児ナースプラクティショナー養成コースの授業科目として、小児看護の対象への健康アセスメント、家族的治療アセスメントを行うための専門的知識と技術の習得を目的として、県立病院外来等で症状をもつ対象者の初期診療と慢性疾患をもつ対象者の継続診療に関するトレーニングを行った。

11)　小児薬理学演習

２年次　前期・前半

松本 康弘、吉田 成一、高野 政子、小代 仁美

小児の初期治療、症状マネジメントに使用される薬物使用について、アセスメントおよび医療処置管理ができることを目的に、症状別、事例別に適した薬物の選択やマネジメントについて演習を通して学んだ。小児への薬剤投与における副作用や薬価も考慮した薬物選択、使用について事例を通して学習を行った。

12)　小児NP実習

２年次　後期・前半

高野 政子、小代 仁美、江口 春彦、鈴木 正義、福永 拙、岩永 知久、

小児診療の場面で実践力を身につけることを目的に小児NP実習を展開した。病院５週間、個人クリニック４週間、肢体不自由福祉施設３週間の合計12週間で構成され、病院実習とクリニック実習の間に1週間のセミナー期間を設けた。１施設１名の学生配置で３名の学生が履修し、医師、大学教員ともマンツーマンでの指導形式をとった。さらに実習前後に施設長、主指導医、看護部長、大学側との合同会議を設け、実習目標と方法の共通理解、評価を共有し大学と各施設との連携をとった。事故なく無事に実習を終了することができた。臨床実習では特定の医行為だけでなく、さまざまな医療スタッフとの連携・協働の実践と、NPに必要な7つの能力を意識させ、小児の領域のNPの活動のモデル化が課題と考える。

13)　小児実践演習

２年次　前期後半

高野 政子、小代 仁美、古川 雅英、佐藤 博、山本 真

小児NPに必要な医療行為を習得するために集中演習をおこなった。学生相互による医療面接や診察技術の訓練と患者体験を実施しスキル向上につなげた。さらにシミュレーターを用いて創傷処置、胃ろうカテーテルの交換など複数の治療技術について個々の病態をふまえて安全・確実に実施できるようにした。臨床現場からのニーズもあり気管挿管や末梢動脈血採血も加え、実習前に習得すべき医療行為を学び自己トレーニングを繰り返し実施した。超音波検査やレントゲン写真の診方などを行った。

14)　小児ＮＰ探求セミナー

２年次　後期

高野 政子、小代 仁美、井上 敏郎、鈴木 正義

小児NP実習にて診療を担当したケースレポートを作成し、ケースについては、担当教員や他学生との意見交換をとおして知識強化し、３人の学生で共有した。さらに、次の実習施設の診療の準備として相互に情報交換した。セミナーによって個々の病院実習の学びを整理し、医療体制の異なる実習施設での子どもの健康問題と、自己の課題に気づき、将来の小児NPとしてどのような役割を担えるかなど考察することができた。

15)　看護アセスメント学特論

１年次　後期

藤内 美保、高野 政子、伊東 朋子、石田 佳代子

クライアントマネージメントを遂行するために、看護職が問題解決過程を展開し、信頼性のある方法論に従った身体的、包括的な機能評価のための情報収集の基礎理論と技法について教授した。1つは看護過程を展開する場合の看護理論による違いにより、看護診断に違いがあるか、診断過程の違いがあるかなど検討する。2つは小児のフィジカルアセスメント、看護過程の展開を行い、レポートさせた。３つ目は在宅看護における神経難病の患者理解と看護判断についての演習をした。いずれも、基礎理論を踏まえた看護判断に関する具体的適用方法の課題学習を行い、レポートおよび出席状況により評価した。

16)　精神保健学特論

１年次　前期

影山 隆之、大賀 淳子

精神保健の歴史、精神健康の概念・モデルと評価、ライフサイクルと精神健康、精神保健の法制・システム、主な精神保健対策などについて講義を行った。

17)　基盤看護学演習

２年次　前期

志賀 壽美代、影山 隆之、藤内 美保、伊東 朋子

担当教員の専門とする分野をチュートリアル形式の演習によって展開した。研究方法の具体的方策を「看護の安全と看護管理」、「精神健康測定法と睡眠測定法」、「看護師の臨床判断と形成過程」、「看護研究と自律神経機能評価指標」の観点から解説した。

18)　発達看護学演習

２年次

林 猪都子、梅野 貴恵、高野 政子、小代 仁美、小野 美喜、福田 広美

老年看護学領域における看護の現状と課題を主たる内容として演習を展開した。老人施設で働く看護師に着目し、文献を通して特別養護老人ホームの看護職の自律性について検討した。また、老人施設での医療的ニーズに着目し、特別養護老人ホームにおける急変時の老人の状況とその看護について探究した。

19)　地域看護学特論

１年次　後期後半

江藤 真紀、赤星 琴美、佐藤 玉枝

ヘルスプロモーションを基盤としたコミュニティエンパワメントの視点から、地域における個人、家族、集団へのアプローチの方法や地域看護診断の手法と理論を用いながら教授した。さらに行政システムの看護の視座から、新たな健康ニーズへの対応や地域看護の機能についてもディスカッションを含めて講義を展開した。

20）　放射線保健学特論

１年次　後期後半

甲斐 倫明、小嶋 光明

放射線の物理から医学までの放射線の基礎全般をカバーすると共に、放射線の健康影響と健康リスクに関する基礎情報について教授した。とくに、胎児の健康影響の推定に関する論争、原爆被爆生存者におけるがんリスク推定に関して講義を行った。

21）　広域看護学概論

１年次　前期前半後半

江藤 真紀、赤星 琴美、李 笑雨、桑野 紀子、藤内 修二、佐藤 玉枝

地域社会におけるヘルスプロモーションおよびプライマリヘルスケアの概念やそのアプローチ方法、健康の保持・増進を支援するための理論と概念、活動方策を習得する。さらに、個人・家族・集団・地域社会の視点、家庭・職場・学校・国際社会の視点、全てのライフステージの視点という広域的に看護活動の意義、目的、機能、役割を探究した。

22）　地域保健特論

１年次　前期前半後半

江藤 真紀、赤星 琴美、桜井 礼子、高波 利恵、中野 洋子

地域で生活する個人・家族、集団を対象とした保健師がおこなう支援の基本的な考え方を理解し、人びとが生活している地域における看護の役割と機能を理解する。また、個人を対象と支援から地域社会全体を対象とした支援までの保健師活動方法を教授した。

23）　産業保健特論

１年次　前期後半

高波 利恵、田吹 光司郎

労働環境・作業上の諸条件から発生しやすい疾病・障害を防止し、身体的・精神的・社会的健康と福祉を保持・増進するための、産業保健システム、活動、看護職の位置づけと役割・具体的な活動方法をヘルスプロモーションや産業保健に関する理論やモデルを用いて教授した。

24）　健康増進技術演習

１年次　前期

関根 剛、安部 眞佐子、稲垣 敦

本講義では、発達段階や健康レベルに応じた個人・集団の健康と生活を評価し、効果的な疾病予防・健康増進の支援ができる知識と能力を養うことを目標に、運動指導、栄養指導、心理相談の３テーマから、講師による講義を行った。

運動指導（合計６回）は、健康づくりのための施策と運動、運動の健康効果、体力と身体活動量の測定と評価、健康づくりの運動、運動メニューの作成、運動指導の心理・社会学。

栄養指導（合計７回）は、エネルギー代謝、栄養素について、消化と吸収、食事摂取基準、食事バランスガイド、ライフステージ別栄養のトピックス、食品と食品表示。

心理相談（合計８回）は、心理相談の技術（１）講義、心理相談の技術（２）ロールプレイ 傾聴技法を中心に、心理相談の技術（３）ロールプレイ 積極技法を中心に、グループダイナミクス（１）リーダーシップ、グループダイナミクス（２）構成的グループエンカウンター、リラクゼーション法（自律訓練、行動療法）、ＰＴＳＤの予防および被害者や被災者への支援、社会資源の利用とリファーの仕方。

25）　健康教育特論

１年次　前期

赤星 琴美、高波 利恵、江藤 真紀、桑野 紀子

個人と集団が自らの健康および福祉の維持増進のための主体的な取り組みを行うための支援方法について講義を行った。必要な知識・技術が理解できるよう心がけ、講義を行った。

健康教育に関連した理論を理解し、教育的働きかけのあり方と保健師の地区活動の展開方法を具体的な事例を挙げ、基礎知識・技術が習得できるような講義内容とした。

26）　疫学特論

１年次　前期

佐伯 圭一郎

人間集団における健康事象の頻度分布とそれに影響を与える多様な因子を分析するために不可欠な疫学の理論と実践の手法を身につけることを目的として講義を行った。さらに保健師としての活動で特に必要度の高い調査手法とその具体例について事例を通じて理解を深めた。講義の内容は以下の通り。

１．疫学の基礎
２．疫学調査の方法
３．曝露の効果の指標
４．バイアスへの対処
５．疫学的因果推論
６．感染症、食中毒の疫学
７．疫学調査の計画・実例
８．スクリーニング理論

27）　社会保障システム特論

１年次　前期

平野 亙

社会保障制度の理念と構造を理解するために、生存権の意味と法・行政など社会制度の位置づけ、社会資源としての諸制度に対する理解を深めることを目的に、講義を構築した。具体的には、法と行政の構造、財政の仕組み、社会保障理念の変遷、所得保障の諸制度、医療制度とマンパワー、公衆衛生施策の体系、高齢者の保健とケアの制度、児童福祉、障がい者福祉の諸制度である。受講生が1名であったため、ゼミのような一問一答の討論も可能であった。成績評価は、講義内容に関連して、中間と期末の２回のレポート提出により行った。

28）　保険医療福祉政策論

１年次　後期

平野 亙、阿倍 実

保健師として各種保健事業を企画・執行するのに必要な、政策形成、企画立案の能力を涵養する目的で、保健・医療・福祉の政策理念と政策上の課題、社会保障財政の現状、保健活動と社会福祉の評価について講義し、県の保健福祉行政に長年携わってこられた阿倍講師（非常勤）から、地方保健福祉行財政の計画と実際について講義をいただいた。さらにノーマライゼーショと自立支援、権利擁護について講義を行い、地域ケアシステムの構築について討論した。成績評価は、実際の大分県の保健・医療・福祉に関する基本計画を検索、整理して課題分析を行う最終レポートの提出によって行った。

29） 疾病予防学特論

１年次 前期前半後半

江藤 真紀、藤内 修二、織部 安裕、小野 重遠、増井 玲子、三浦 源太

さまざまな健康レベルにある個人、個人を取り巻く家族、集団、社会の健康状態を的確に判断・評価する能力を身につけるために、解剖・生理学、疾病病態学、フィジカルアセスメント、臨床検査法等、診断治療学などの医学的な知識を習得する。また、疾病予防のためにエビデンスに基づいた保健師としての健康教育・健康相談の実践活動ができるようにするために、必要な知識、および実践能力を習得できるように教授した。

30） 実践薬理学特論

１年次　前期前半

吉田 成一

生体内に投与された薬物の生体への影響（薬力学）と、生体内に入った薬物の生体処理法（薬物動態学）を理解し、薬害と有害作用、処方概要と投薬設計、治療効果と副作用についての基礎知識に関する講義を行った。特に生活習慣病を中心とした疾患（糖尿病、高脂血症、高血圧症など）に対する主な治療薬の作用機序、副作用、注意事項など、保健指導に活用できる実践薬理学の基礎知識が習得できるような講義内容とした。

本年度は受講者が１名であったため、受講者の学習状況を把握しながら講義が行えたため、高い学習効果であったと考える。

31） 環境保健学特論

１年次　前期

甲斐 倫明

環境と健康との関係を理解するために、社会的ニュースを事例にして、物理的要因、化学的要因、生物的要因および社会的要因と健康との関係についての基礎概念の整理を行い、最新の研究論文を解読した。論文で抄読したテーマとしては、1)DALYs（障害調整生存年数）、2) What is a QALY?、3)Age standardization of rates、4)日本人の受動喫煙と肺がんリスク、5)携帯電話とがんリスク、6)IARCモノグラフ、7)ドイツ大腸菌事件、8)放射線発がん、9)化学発がん

32） ＮＰ論

１年次　前期前半

草間 朋子、林 猪都子、藤内 美保、桜井 礼子、高野 政子、小野 美喜

米国および韓国から学ぶＮＰの歴史的変遷、ＮＰの役割と実践活動と、日本におけるＮＰの必要性と教育カリキュラム、ＮＰの求められる能力について教授し、今後の自分たちの目指すＮＰの活動の場と実践内容について検討した。また、韓国に施設見学を行った際、その内容を踏まえて「今後自分の目指すＮＰ活動」についてレポートを課した。

33)　フィジカルアセスメント学特論

１年次　前期後半

藤内 美保、石田 佳代子、下田 浩

クライアントの包括的・全身的な身体的健康状態のアセスメント能力を高めることを目的に教授した。五感を駆使した問診、視診、触診、打診、聴診の基本技術を身につけるため、講義および演習形式で行った。全身、頭部、頸部、胸部（肺および心血管系）、腹部、直腸、四肢、神経系のフィジカルアセスメントを系統的に実施した。演習では異常な状態把握ができるようにフィジカルアセスメントモデル、高機能シミュレーター、眼や耳のシミュレーターを使用した。確実な知識・技術が身につくように中間試験と総合試験を実施した。試験は筆記試験およびOSCEを行った。OSCEの実施の後は、学生全員とOSCEのビデオを視聴しながら、振り返りを行った。

34)　生体機能学特論

１年次　前期

下田 浩、安部 真佐子、岩崎 香子

生体機能学特論（上）は臨床解剖学として、人体の構造と機能を病態生理や疾患の発生、身体診察と関連させて講義するとともに、人体解剖見学実習と組織学実習を行った。生体機能学特論（下）は臨床生化学として、主に栄養学的側面から講義を行った。

35)　病態機能学特論

１年次　前期

市瀬　孝道、卜部　省吾

疾病の基本的事項を理解するために生体防御システムに関わる炎症、免疫やアレルギー、腫瘍、更に系統別の疾患についてハンドアウトを用いて詳しく講義した（市瀬）。また、病理標本の作成法、病気の肉眼標本やプレパラートを用いた顕微鏡観察を行い、種々の臓器に発生した炎症やがん組織・がん細胞を理解させた（卜部）。

36)　看護倫理学特論

前期

平野 亙、小野 美紀、関根 剛

倫理的思考は、すべての看護職に必要であることから、各受講者が専攻する領域での臨床に活かせることを基本とし、必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的行動規範に基づく思考訓練を行うことを目的とした。11回の講義と３回の事例演習を行い、さらに最終回には受講生の事例報告による評価を行った。講義は、「Profession の責任と倫理」・「Bioethics・新しい医療倫理の展開」・「生命倫理の基本原則と思考方法」・「人間の尊厳と患者の権利」・「個人の尊重と自己決定権・プライバシー権」・「ケアとしての苦情解決」を平野、「倫理的行動とコミュニケーション」・「問題解決のためのコミュニケーション・スキル」を関根、「看護職の責任と倫理規程」・「看護職の価値観と倫理」、「看護場面の倫理的ジレンマとその解決ステップ」を小野が担当した。事例演習は、３名の教員各々が講義と関連付けて行い、受講生による事例報告は３名の教員すべてが出席してコメントし、評価を行った。

選択科目であったが、オリエンテーション時に履修促進を行われた結果、10名と多数が受講した。そのため事例報告においても、活発で有意義な討論ができた。

37)　看護政策論

１年次　後期前半

草間 朋子、薬師寺 道代、南野 千恵子、甲斐 仁美、小山 秀夫、甲斐 倫明

保健・医療・福祉を取り巻く制度や政策がどのようなプロセスで決定されるか、さらには決定された政策が看護の現場にどのように影響を及ぼすか考えるために、学外講師によりオムニバス形式で講義を行った。国政レベルで保健医療政策、最新の保険と医療費に関する動き、今日における看護政策課題などの講義から学生自らが看護政策を立案するための視点を教授した。

38)　看護管理学特論

後期前半

桜井 礼子、志賀 寿美代、福田 広美、山西 文子(非常勤)

保健・医療・福祉に関する制度と組織、看護管理の基本となる理論とその展開について学び、これまでの自らの経験を踏まえて、具体的な管理プロセスに対する理解を深めるとともに、質の高い看護サービス提供のために看護組織が備えるべき機能について考えることを目指した。

39)　看護コンサルテーション論

１年次　前期

大賀 淳子、吉村 匠平、関根 剛

看護コンサルテーションの歴史の浅い我が国では、確かな理解のもとに看護コンサルテーションが実践されているとは言い難い。よって本講義ではまず、看護におけるコンサルテーションの概念とプロセスについて原著を用いて理解を深めた。次に、対象者理解のための心理的アセスメントおよび効果的な心理教育と心理的援助の具体的方法について学んだうえで、コンサルテーションの実際を演習方式で体験した。まとめとして、我が国における看護コンサルテーションの今後の課題についてディスカッションを行った。

40)　看護教育特論

１年次　後期後半

高野 政子、宮崎 文子、梅野 貴恵、石田 佳代子

講義はオムニバス形式で実施した。講義内容は1.看護の専門性と教育的意義、2.看護教育の歴史的意義、3.看護教育制度と現状、4.看護教育におけるカリキュラム、5.看護教育評価、6.看護基礎教育と継続教育、7.自己教育力・生涯教育能力の開発、8.現任教育の在り方、スタッフ教育、9.看護実践能力の育成、10.認定看護師制度と専門看護師制度、11.看護教育方法論(1-3)とした。その後で、各自の教育的課題についてレポートとしてまとめ、発表し、ディスカッションした。

41)　人間関係学特論

後期

関根 剛、吉村 匠平

毎回、参加者各人の関心のあるテーマを中心にした関連書籍や文献の購読、紹介などを行わせた上で、全員による討議、講師からの解説などを行った。なお、今年度は、夜間開講のみであった。

42)　保健情報学特論

前期

佐伯 圭一郎、品川 佳満

保健医療福祉分野において必要とされる情報入手・情報処理・情報管理の基盤となる理論と技術について、演習も交えながら教授した。各回の内容は下記の通り。

１．情報管理・処理のためのコンピュータ技術
２．医療・保健分野でのデータ処理
３．情報システムの構築と管理
４．測定の方法（誤差論、尺度構成）
５．調査デザインとバイアス
６．統計データ解析の実践
７．因果推論の技法
８．EBN・EBMにおける判断の技法

43)　看護科学研究特論

前期

小嶋 光明、江藤 真紀、林 猪都子、小野 美喜、下田 浩、安部 眞佐子、平野 瓦、品川 佳満、梅野 貴恵、坂口 隆之、吉村 匠平、関根 剛

EBNの基礎をなす看護科学研究の理論および手法を概観し、研究活動を自ら展開するために必要な事項を論じた。さらに、実際の研究例の輪読と検討により、研究活動に関する実践的能力の育成をおこなった。

1.	看護研究の意義	江藤
2.	調査研究の進め方	林
3.	質的研究の進め方	小野
4.	実験研究の進め方	下田
5.	文献研究の進め方	安部
6.	研究の倫理と安全	平野
7.	文献検索の方法	小嶋
8.	データ解析の基礎	品川
9.	研究のまとめ方・発表の方法	梅野
10.	研究デザイン	小嶋
11.	観察研究	坂口
12.	介入研究	吉村
13.	二次研究	小嶋
14.	その他の研究	関根

44)　英語論文作成概論

１年次　前期前半

甲斐 倫明、影山 隆之

修士論文で英文アブストラクトを書くための基礎的事項を教授した。講義内容は次の通りである。1)英語科学論文の特徴、2)論文を科学的に構成する5つのステップ、3)日本人が間違いやすい英語表現、4)調査研究データ特有の英語表現の事例とアブストラクトの書き方、5)実験研究データ特有の英語表現の事例とアブストラクトの書き方

45)　Intensive English Study

１年次　前期

Gerald T. Shirley

Competence in English is important for graduate students. This course aimed at improving the basic English language ability of students through intensive practice in reading, listening and grammar. It was an eight-week course in which students practiced reading, listening and grammar problems to help them improve their basic language abilities in these important areas. The course used a Computer Assisted Language Learning (CALL) system. The CALL course is designed so that students can access and practice CALL at any time on their computers at home and in the Graduate Student Room. There were no classroom sessions in this course. Students practiced the CALL course problems during their own time. Their progress was monitored and evaluated by the instructor during the eight-week course. Individual assistance and instruction was available to each student through consultation with the instructor. The course consisted of an orientation session in the CALL classroom in which the CALL course was introduced and class guidelines were discussed. The TOEIC-IP test was administered before and after the CALL course, and it was mandatory that students take both tests.

46)　原書購読演習

１年次　後期

宮内　信治

原著論文「Outcomes of Nurse Practitioners in Acute Care: An Exploration」を教材として英文解釈の基礎に取り組んだ。同時に、各自の興味関心のある分野に関連する文献を学生自身が選択し、担当教員の助言を受けながら英文の内容解釈に取り組んだ。本年度から、講義開始に先立ち、基本的な文法事項を復習する演習を冊子の形で手渡し、課題として提出させた。

47)　研究のすすめ方

１年次　前期

小嶋 光明、江藤 真紀、林 猪都子、小野 美喜、下田 浩、
安部 眞佐子、平野 瓦、品川 佳満、梅野 貴恵

以下の内容で、研究を進める上で必要な技術的側面について講義し、研究活動の実践に必要な知識と技術を養った。

１．看護研究の意義	江藤
２．研究の倫理と安全	平野
３．実験研究の進め方	下田
４．文献研究の進め方	安部
５．調査研究の進め方	林
６．質的研究のすすめ方	小野
７．データ解析の基礎	品川
８．文献検索の方法	小嶋
９．研究のまとめ方・発表の方法	梅野

48）　臨床薬理学特論

１年次　後期

吉田 成一、伊東 弘樹

本年度は、老年臨床薬理学特論として開講した。

49）　診察・診断学特論

１年次　後期

下田 浩、岩波 英逸、糸永 一郎、矢野 庄司、安東 優、岡崎 敏郎、兒玉 雅明、林 良彦、安部 航、吉岩 あおい

初期診療の知識と技術の習得を目的として、症状や兆候から病因や病態を診断するための診察や検査（尿・血液検査、Ｘ線、超音波など）の基礎知識と基本技術について教授した。5施設の臨床医師９名の協力を得て行われた。講義と演習は医師所属の医療施設や本学講義室などで行われ、最終日には筆記試験を実施した。

50）　健康社会科学特論

前期

平野 亙

人間の健康に関する考察・研究においては、個々の人間行動の分析・探求と並んで、社会政策など社会システムに対する分析、人間行動に対する社会学等の社会的アプローチが重要である。これら社会科学的な思考と方法論の基礎を習得することを目的として、講義と課題演習を行った。講義は、「社会システム論１　法と行政」、「社会システム論２　生存権と社会保障制度」、「障がい論とノーマライゼーションの理論」、「社会科学の方法（概論）」、「社会学の方法」、「医療人類学の方法」、「医療経済学の方法」の各講で、課題演習は、１）日本における医療・保健・介護の政策に関するレポート作成と解題、２）医療・保健領域における社会諸科学の方法論による文献の抄読を行った。

51）　健康運動科学演習

２年次　前期・後期

稲垣 敦

科学の考え方を学べる専門書を選び、修士論文に関係づけながら解説した。また、それに関連する論文を教員が選び、フォームにまとめで発表した。

52）　身体機能適応科学演習

２年次　前期・後期

稲垣 敦

修士論文テーマに関連する論文を学生および教員が選んで精読し、フォームにまとめで発表した。また、随時、修士論文の指導を実施した。

53)　放射線健康科学特論Ⅰ

１年次　前期

甲斐 倫明、小嶋 光明

tutorial方式で「放射線基礎医学第11版」を教科書として、次の内容を教授した。1)物質の構造と放射線、2)放射線の物質と相互作用、3)放射線に関する量と単位、4)放射線の測定、5)X線発生装置とX線撮影の原理、6)放射線治療装置、7)線量分布と線量計算、8)放射線生物作用の一般的特徴、9)放射線生物作用の化学的過程、10)放射線の生体応答、11)染色体異常と細胞死、12)放射線がんリスク

54)　放射線リスク学特論

１年次　後期

甲斐 倫明、小嶋 光明、小野 孝二

医療被ばくや放射線健康影響に関する英語論文や資料を輪講形式で抄読し解説した。とりあげたテーマは次の通りである。1)モンテカルロ法、2)防護線量概念（CTDI、臓器線量、実効線量）、3)乳がんの放射線治療、4)CT画像のボクセルファントム化、5)幹細胞とニッチ、6)発がんモデルの動向、7)チェルノブイリ事故と甲状腺がん、8)血液系がんの数理モデル、9)CT撮影からの被ばく線量、10)低線量放射線による細胞応答反応 -DNA損傷の修復パターンに着目して、11)患者サイズとCTスキャン

55)　特別研究（修士論文）

通年

指導教員：稲垣 敦、影山 隆之、桜井 礼子、藤内 美保、平野 瓦
副指導教員：小野 美喜、甲斐 倫明、草間 朋子、志賀 寿美代、品川 佳満、関根 剛、福田 広美、吉村 匠平

下記の研究の成果発表並びに論文作成の指導を行った。
看護学専攻研究者コース
1) 麻生 優恵：病棟看護師の診療支援看護の実践過程と臨床判断の分析　―参加観察による看護業務調査とインタビューを通して
2) 石岡 洋子：看護学生を対象にした質問紙調査を行う際の倫理的配慮に関する実態調査 ―看護教員の倫理的配慮に関する認識と実践
3) 杉本 圭以子：自傷患者に対する救急看護師の関わりの実態と関連要因
4) 山田 貴子：早期退職した新卒看護師の入職から退職後までの心理的プロセス
健康科学専攻
1) 加藤 貴志：片麻痺上肢に対する新型電極導電サポーターの考察：慢性期脳卒中症例に対する予備的研究

56)　課題研究（管理者）

通年

指導教員：大賀 淳子、佐伯 圭一郎、藤内 美保
副指導教員：稲垣 敦、河野 梢子、志賀 寿美代、下田 浩、秦 さと子、宮内 信治

下記の課題研究の成果発表並びに論文作成の指導を行った。
1) 橋口智美：看護師長・主任・副主任の看護管理実践の現状と課題　自己評価指標を用いて
2) 村上麻紀：看フィジカルアセスメントの病院スタッフへの定着を目指して ―院内インストラクターの介入を通しての検討―
3) 渡邉 彩子：新人看護職員研修の現状調査

57)　課題研究（ＮＰ）

通年

指導教員：石田 佳代子、江藤 真紀、小代 仁美、小野 美喜、桜井 礼子、高野 政子、藤内 美保、福田 広美
副指導教員：安部 眞佐子、井伊 暢美、伊東 朋子、岩崎 香子、甲斐 倫明、坂口 隆之、定金 香里、志賀 寿美代、品川 佳満、関根 剛、高波 利恵、松本 初美、吉田 成一、吉村 匠平、李 笑雨

下記の課題研究の成果発表並びに論文作成の指導を行った。
1）安部 涼子：慢性疾患を持つ高齢者に対する特定看護師（仮称）の活動モデル案の検討　―健康相談内容の分析に基づいた試案―
2）岡田 茂美：本態性高血圧のプロトコールの検証による高血圧診療記録用紙の提案
3）原 正範：NPの薬剤選択プロセスに関する検討 - 糖尿病及び高血圧症合併症患者を通じて
4）原田 由紀子：離島医療における看護師の業務実態と医療行為に関する認識 -特定看護師（仮称）の必要性の検討
5）平木 和宏：老年ナースプラクティショナー実習における外来診療の考察 -高血圧の事例を通して-
6）黒木 雪絵：小児NPが行う医行為に関する小児を診療する医師の意識調査
7）小泉 恵子：小児NP学生の初期診療能力向上にむけた高機能シミュレータの活用方法の検討
8）後藤 愛：重症心身障害児(者)通園事業における特定看護師(仮)の業務拡大に関する医師、看護の意識調査

58)　課題研究（助産）

２年次

指導教員：梅野 貴恵、林 猪都子、吉村 匠平
副指導教員：市瀬 孝道、稲垣 敦、小嶋 光明、関屋 伸子、松本 初美、吉田 成一

下記の課題研究の成果発表並びに論文作成の指導を行った。
1）荒井美由紀：月経随伴症状の緩和に関するマンスリービクスの効果
2）河原聡美：母乳育児支援の実態と生後１か月以降の児を持つ母親が望む支援－出産施設別による比較－
3）光武智美：特別支援学校における性教育についての文献的検討

３－６－２　博士（後期）課程

１）　生命病態学特論

１年次　後期

下田 浩、市瀬 孝道、吉田 成一

大学院博士後期課程看護学研究科看護学専攻の選択科目として開講した。人体の発生と構築・機能の形成について講義と討論を行った（下田）。病態とその成り立ちについて実験動物を用いて講義と実習を行った（市瀬・吉田）。

２）　国際看護学特論

１年次　後期

李 笑雨

This course was an introduction to the global perspectives of health and nursing issues using some nursing theories. The nature of scientific explanation and inquiry of theoretical conceptualizations in nursing for analyze and evaluation of the international nursing and health were examined.

３）　放射線健康科学特論Ⅱ

１年次、後期

甲斐 倫明、小嶋 光明、小野 孝二

医療被ばくや放射線健康影響に関する英語論文や資料を輪講形式で抄読し解説した。とりあげたテーマは次の通りである。1)モンテカルロ法、2)防護線量概念（CTDI、臓器線量、実効線量）、3)乳がんの放射線治療、4)CT画像のボクセルファントム化、5)幹細胞とニッチ、6)発がんモデルの動向、7)チェルノブイリ事故と甲状腺がん、8)血液系がんの数理モデル、9)CT撮影からの被ばく線量、10)低線量放射線による細胞応答反応 -DNA損傷の修復パターンに着目して、11)患者サイズとCTスキャン

４）　健康統計学特論Ⅱ

１年次 前期

佐伯 圭一郎、坂口 隆之

科学的推論の重要な道具である「統計学」の理論と手法を保健医療看護の領域において高度に活用する能力を養うことを目的として、保健医療看護領域のデータの特性に対応した高度な統計手法を教授するとともに、データを適切に収集するための調査・実験の計画・実施に関する実践的な演習を行った。

履修者が1名であったため、履修者の研究に関連した事例、トピックを中心に教授した。

５）　精神保健学特論

１年次　後期

影山 隆之

今年度はアジアのコミュニティ精神保健に関する文献を読み、特にスティグマの問題や人的資源の問題を中心に討論を行った。

６）　看護専門科学演習

後期

高野 政子、小野 美喜、藤内 美保、桜井 礼子、林 猪都子、李　笑雨、江藤 真紀

今年は受講学生が、成人老年領域であったので、成人及び高齢者が療養する医療・福祉施設における看護に焦点をあて、演習を通して高齢者の自立、生活の質の向上とケアについてレポートした。

７）　特別研究（看護学専攻）

通年

指導教員：甲斐 倫明
副指導教員：草間 朋子、佐伯 圭一郎

博士論文の指導は、各指導教員による個別指導と、研究計画報告会および研究中間報告会での全教員が関わる議論によって、研究方法、結果の分析および考察などの各指導が進められた。

下記の論文は、論文審査会を経て学位審査に合格し、博士（看護学）が授与された。

大津 佐知江：外来看護のあり方に関する研究　ーシステムに着目した外来看護モデルの提案

３－７　ボランティア活動

１）　きょうだいクラブ

井伊 暢美
３年次生：荒木 庸輔、池田 晋、後藤 和恵、佐藤 謙次、丹野 佑希、鳴海 興亮
１年次生：関口 翠

きょうだいクラブは、自閉症児のきょうだいを対象として、きょうだい達の交流やその経験を知ることを目的としている。今年度は２回のレクレーション活動を行った。８月は川遊びとバーベキュー、３月はチーズ作りの体験を行った。

２）　第26回Young Wing Summer Camp

高野 政子
大学院生：黒木 雪絵、小泉 恵子、後藤 愛
４年次生：安部 早紀奈、穴見 美穂、衛藤 裕美、渡辺 希
２年次生：迫田 愛、小野 由稀

サマーキャンプは１型糖尿病のある子どもとその保護者を対象とするキャンプで、学生は大分大学、別府女子短期大学など他大学の学生や医師、看護師、栄養士などと協働して運営実行した。キャンプの目的は同じ病気がある子どもたちの仲間づくりや病気の正しい理解、あるいは自信を持たせるというもので、海水浴やハイキングなど実施する。そのためには学生は５月より８回の事前ミーティングに参加し、子どもたちとのキャンプは８月７日から12日までの国東半島にある国民宿舎を拠点に実施した。今年は大学院小児NPコースの学生が医療職グループとして活動した。

３）　こどもの健康週間 2011

高野 政子、中垣 紀子
４年次生：徳丸 裕泰、甲斐 小妃江、山内 美奈子

こどもの健康週間は、日本小児保健協会の大分県支部の取り組みの一つである。大分市高尾山公園で10月10日（体育の日）に開催された。障がいや小児慢性疾患の親の会などの活動報告のあと、野外活動で子どもたちの交流を目的にしているので、本学からは小児看護学研究室のメンバーで参加し、ゲームコーナーでの遊びの支援を行った。

４）　第17回日本ALS協会大分県支部総会

伊東 朋子
４年次生：徳丸　裕恭、川添　絢子、荒木　麻優、衛藤　裕美、横田　晴香、柾木　夢加、首藤　梓、金城　まどか、２年次生：杉原　健太、関　安香里、下岡　美紀、１年次生：松坂　初美

平成23年5月29日、大分県立病院内で行われた第17回日本ALS協会大分県支部総会での患者・家族のつどいに参加し、会場準備、車いす移動の介助、物品販売、交流会での司会補助などを行った。

５）　福祉農場コロニー久住「第35回収穫祭参加」

伊東 朋子、１年生18名

平成23年10月31日に開催された福祉農場コロニー久住での第35回収穫祭に18名で参加し、障害者の介護や物品販売、ステージ発表など行った。

６）　大分県立看護科学大学「平成23年度オープンキャンパス」

高野 政子、学部生40名

掲示物の作成および掲示、受付、誘導、TAKIOソーラン節、模擬授業補助、進学相談、各種体験イベント補助、合格体験談、在学生メッセージ、お茶会を担当した。

７）　富士見が丘団地「第38回夏祭り」

宮内 信治、稲垣 敦、１年次生18名

トキハインダストリー富士見ヶ丘団地店周辺で開催された富士見が丘団地夏祭りで、カラオケおよびステージイベントに参加し、ポン菓子、魚つかみ取り、お化け屋敷等の準備および当日の運営を担当した。

８）　大分七夕まつり（大分県立看護科学大学「地域ふれあい祭り」）

高野 政子、教員38名、１年次生16名、２年次生６名、３年次生６名、４年次生８名

竹町ドーム広場で市民の健康チェックを行い、チキリンばやし市民総踊り大会に参加した。

９）　大分トリニータホームゲーム

稲垣 敦、桜井 礼子、１年次生４名、３年次生２名

９月17日（土）に大銀ドームで開催された大分トリニータ対サンガ鳥栖戦で、観客希望者に健康チェックを実施した。

１０）　おおいたホームタウン推進協議会「おおいたスポーツ広場2011」

稲垣 敦、河野 梢子、田中 佳子、１年次生６名、３年次生２名、４年次生６名

９月19日（月）にコンパルホールで開催された「おおいたスポーツ広場2011」で、プロスポーツ選手および参加者の健康・体力チェックを実施した。

１１）　富士見が丘団地自治会「第37回体育祭」

稲垣 敦、赤星 琴美、１年生24名

10月23日（日）に横瀬小学校グラウンドで開催された「富士見が丘団地自治会体育祭」で、当ってごろん、玉入れ、ダンス、健康サンバ、綱引き、４×100mリレー、仮装リレーに参加し、参加者の希望者に健康チェックを実施した。

１２）　大分丘の上病院「丘の上祭」

大賀 淳子、稲垣 敦、１年生８名

10月30日（日）に大分丘の上病院で開催された「丘の上祭」でTAKIOソーラン節を踊り、ゲーム、屋台、ゴミ整理を担当した。

１３）　大分県こころとからだの相談支援センター「第2回こころのからだの健康フェスティバルinたまざわ」

大賀 淳子、１年次生13名

11月６日（日）に大分県こころとからだの相談支援センターで開催された「第２回こころのからだの健康フェスティバルinたまざわ」で、司会、放送、カメラ撮影、着ぐるみ等を担当した。

１４）　野津原地区「第26回ななせの里まつり」

稲垣 敦、桜井 礼子、大賀 淳子、河野 梢子、１年生19名

11月６日（日）にみどりの王国で開催された「第26回ななせの里まつり」でTAKIOソーラン節をステージで踊り、参加者の健康チェックを実施した。

１５）　富士見が丘団地「文化祭」

宮内 信治、１年生２名、２年生２名

11月12日（土）～13日（日）に富士見が丘団地内各会場で開催された文化祭で、写真展の受付等を行った。

１６）　大分大学附属特別支援学校「学習発表会」

大賀 淳子、１年生14名

12月10日（日）に大分大学附属特別支援学校で開催された学習発表会で、会場設営等を行った。

１７）　大分県自閉症協会　夏季療育キャンプ

平野 亙、飯田 好（３年次生）、下岡 美紀（２年次生）、関 安香里（２年次生）

平成23年８月20日（土）・21日（日）の両日、博愛会パルクラブ（久住）において開催された自閉症児療育キャンプにボランティアとして参加した。学生はきょうだい児を担当して、食事介助、レクリエーション等の活動支援を行うと共に、保護者と県職員との懇談会の時間帯にはレスパイト・ケアを行って、キャンプの運営に貢献した。

４　学内セミナー

４－１　CALL英語学習システム講座

CALLシステムについて、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、7月18日（日）のオープンキャンパスにて、午前・午後1セッションずつ合計2回の模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際にCALLシステムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

５　学内プロジェクト研究

５－１　プライマリケア領域ＮＰ修了生の役割拡大の効果評価に関する研究

研究者　藤内 美保、小野 美喜、江藤 真紀、小代 仁美、甲斐 倫明、桜井 礼子、下田 浩、
高野 政子、林 猪都子、福田 広美、宮内 信治、草間 朋子

平成22年度にプライマリケア領域NP修了生を輩出し、23年度より日本で初めて医行為を実施する看護師が現場で活動することとなった。修了生が現場で特定医行為を実施するために、平成23年度に厚労省が行う特定看護師（仮称）業務試行事業において医行為を実施することが可能となる。そこで、修了生が、検査の実施の判断や薬剤の選択・使用などの特定医行為を医師の包括指示のもとに行うことで、どのような効果がもたらされたのかを明らかにすることを目的とした。

調査対象はプライマリケア領域NP修了生8名、主指導医5名、看護部長5名、看護師11名、 受持ち患者または家族4名である。同意の得られた対象者に対して、インタビューガイドに基づき半構成的面接を行った。これは、NP修了生が少なく、事実を丹念に記述することが必要と考え、質的帰納的に分析を行った。

一般病院の病棟・外来、老人保健施設、訪問看護など様々な場で活動を行っており、先駆的医行為の効果を示していた。病棟では、指導医が手術や外来診療などにあたっている時間は、受け持ち患者の検査の判断や薬剤の選択・使用、治療食等の変更を行い、患者に素早く対応でき、医師には訴えにくい軽度な症状に対してもきめ細かに応じたり、軽微な外傷の表創の縫合などもタイムリーに行えていた。外来では、医師の診察の前の待ち時間の間に予診をとり、必要時血液検査やレントゲンの検査の判断なども行い医師に引き渡す。待ち時間も少なく、医師と複数の目で見ることから、見落としもなく異常の早期発見になっている。老人保健施設では、医師は病院との兼任、非常勤医師のため入所者の詳細な状況を把握していないことが多い。修了生が対応することで、身体面や生活面を詳しく調べ、薬剤の変更や中止により、長期間続いていた副作用の症状が消失するケースもあり、効果的な症状マネジメントができていた。訪問看護については、病院受診が困難な高齢者や障害者の自宅を訪問し、必要な検査、薬剤の調整、褥瘡の壊死組織のデブリードマン、胃瘻や膀胱瘻のチューブ・ボタン交換など行ない、病院への受診アクセスが困難な患者・家族の負担軽減を図っている。以上のように、先駆的医行為の実施は、タイムリーで、包括的・全人的な視座でアセスメントし、対象者の生活の合わせたきめ細やかな医療サービス提供に貢献していた。

本調査では、NP修了生の職務満足度はもちろん、患者や医師、看護師への効果も認められたが、試行事業段階であること、修了生の人数も少なく、調査対象者も限られていたことから、プライマリケア領域NP修了生が現場での活動を一定期間積み重ねた上で、再度効果評価をすることが必要である。

５－２　健康増進プロジェクト

研究者　稲垣 敦、桜井 礼子、平野 亙、江藤 真紀、赤星 琴美、江月 優子、河野 梢子、田中 佳子

1.　高齢者の足指筋力と足の形状とバランス能力との関連

高齢者108名に、足指筋力（立位・座位）と一般的な体力テストを実施し、既往歴、生活習慣、足型を調査した結果、足指筋力は加齢に伴って低下し、特に女性で著しかった。また、足指筋力は、外反母趾、転倒経験、つまづき経験等とは有意な関係は認められなかった。一方、握力、脚筋力、上体起こし、開眼片足立ち、ステッピングと有意な相関を示し、重心動揺、5m歩行タイムとは有意な相関は見られなかった。以上の結果から、足指筋力は単にバランス能力の指標ではなく、高齢者の運動機能を総合的に反映している指標と考えられる。

2.　運動日記の運動継続効果

健康な女子大学生17名（19～20歳）を運動日記群（9人）と統制群（8人）に分け、ウォーキングの指導をした後、4週間毎日ウォーキングをするよう教示した結果、運動実施頻度には有意差がみられなかったが、速歩運動に相当する中程度の強度（4～6Mets）の運動時間（$p<0.05$）および自己効力感の「能力の社会的位置づけ」（$p<0.001$）の交互作用が認められた。したがって、本研究で開発した運動日記には運動時間を増す効果があり、自己効力感も高まったことから、被験者を増やして長期間に調査を実施すれば運動継続効果が認められる可能性もある。

3.　特定高齢者および要支援１・２高齢者の運動機能

現在、特定高齢者および要支援１・２という区分での運動機能は充分に把握されておらず、施策や事業にも活用されていない。対象者は、大分県内の15市町村に在住する65歳以上の男性520名（79.7±6.6歳）、女性2242名（80.6±6.5歳）であり、内訳は特定高齢者が1268名（45.9%）、要支援１は754名（27.3%）、要支援2は629名（22.8%）、111名（4.0%）は不明であった。運動機能の検査としては、握力、開眼片足立ち、ファンクショナル・リーチ、Timed Up & Go Testであった。集計の結果、女性の握力では特定高齢者で18.6±4.7kg、要支援１は15.0±3.8kg、要支援２は13.1±3.9kgと介護度が上がるほど低水準であり、男性および他の項目でも同様であった。

4.　介護予防運動「お元気しゃんしゃん体操」の効果

64～90歳の自宅在住の自立高齢者130名が月2回の高齢者サロンおよび自宅で3ヶ月間この体操を実施した結果、自宅でほぼ毎日実施したのは82.9%、週に3、4回も加えると91.4%に達し、体操で怪我をした者はいなかった。また、体重、等尺性膝関節伸展力、上肢屈曲角、10m全力歩行タイム、最大一歩幅、ステッピングは有意に改善（$p<0.05$）したが、体脂肪率、握力、長座体前屈、重心動揺、開眼片足立ち、全身反応時間では有意な改善は認められなかった。一方、体の動きが良くなった、脚の動きが良くなった、肩の動きが良くなった、肩こりが良くなった、痛みが良くなった、疲れにくくなった等、男性では91.2%、女性では81.3%が身体効果を実感していた。さらに、気分が爽快になった、意欲が増した、自信が増した、ストレスが解消した等の精神的効果も実感していた。以上の結果は、過去に提案された介護予防運動と同等かそれ以上であることから、「お元気しゃんしゃん体操」は、安全性、継続可能性および効果の点で、在宅高齢者に相応しい介護予防体操と考えられる。

5.　森林ウォーキングのストレス低減効果

車椅子利用者10名が県民の森（大分市）の「水辺の森コース」を約20分間散策した結果、SBPとDBPは低下し、唾液アミラーゼも低下し、POMS（気分尺度）では抑うつ尺度と疲労尺度の得点が低下し、活気尺度の得点が増加した。以上の結果から、本コースの利用は車椅子利用者のストレスを低減する効果があると推測される。

５－３　基礎看護技術におけるe-learningシステム開発プロジェクト

研究者　秦 さと子、伊東 朋子、栗林 好子、水野 優子、福元 幸志、志賀 寿美代、佐藤 秋子、品川 佳満

本プロジェクトでは、本学学生が基礎看護技術習得のために自律的に反復学習が出来る環境システムの提供を目的とし、視聴覚教材の開発とe-learningシステムの構築、実用化をめざして2009年度より取り組んできた。実用化に至る為には、コンテンツの充実が先決であるが、コンテンツの素材であるDVDを効率的に量産しにくい状況にある。その原因は、①DVD作成費用が高い、②撮影日が1日掛りとなるため休日撮影になりやすい、③外部業者との日程調整が必要なためスケジュールが長期的になるであった。本年度は、これらの問題点を解決することでコンテンツをこれまでより量産できることを目的に取り組んだ。

【主な取り組み】

1.完全手作りDVD作成

専門業者への委託を中止し、プロジェクトチームでのDVD作成を試行した。

(評価)

・DVD作成のための設備環境を整えることができたことから、残りのコンテンツ18項目を完成させるのに必要な経費の確保の心配はなくなり、システムの完成が実現可能となった。

・撮影に関しては、修正したい部分の取り直しが何度でもすぐにできることから、内容の完成度をより高いものに仕上げることが可能となり、また1回の撮影でいろいろなアングルの画像を保存しておく必要がなくなったので撮影時間の短縮につながった。

・DVDの作成に外部業者が関与しなくなった分、時間調整がしやすくなったので、1コンテンツ作成にかける期間も以前よりも大幅に短縮できた。

(追加コンテンツ)

「体位変換」、「車いす移乗」、「ストレッチャー移送」、「ベッドメイキング」

2.システム運営に関する取り組み

マニュアル作成(新規登録手順,DVD作成における編集作業手順)

3.システム活用に関する取り組み

実習室内の無線LAN環境の整備

【今後の計画】

・平成24年度

残りの14項目のコンテンツ完成

基礎看護技術演習にベッドサイドでのノートパソコンやタブレットの導入

・平成25年度

システム使用による学習効果の評価

６　先端研究

1件の応募があったが、他の研究補助金に採択されたため辞退した。

７　奨励研究

７－１　わが国のCT診断件数の推定

研究者　小野 孝二, 甲斐 倫明

2007年に我々は独自のアンケート調査を実施し、病院ベッド数とCT診断件数の相関関係からCT診断件数を推定する関係式を導いた。さらに本研究では、国の統計情報を利用してわが国のCT診断件数の推定について可能かどうか分析を試みた。厚生労働省の統計情報を利用してデータの収集をおこなった。全ての医療施設を対象としている医療施設調査社会医療診療行為別調査を利用した。医療施設調査では全体数のCT画像診断件数を把握は可能であるが、年齢別の件数推定はできない。年齢別の件数について社会医療診療行為別調査の利用について分析した結果、DPC対象病院の情報が含まれていないことなどから全体および年齢別のCT画像診断件数の推定には困難であることが判明した。

７－２　高齢者の服薬状況と保健師による保健指導の必要性

研究者　赤星 琴美、江藤 真紀、佐伯 圭一郎、草間 朋子

特定健康診査・特定保健指導の主な目的は、生活習慣病の減少と生活習慣病の重症化の予防である。高齢者は、複数の疾患を持ち、医療機関から多種類の処方を受け薬物療法を行っている者は年々増加している。しかし、高齢者の服薬状況については必ずしも明らかでない。本研究では、B市で行われた調査結果をもとに、高齢者の服薬状況について明らかにすることを目的とした。高齢者の服薬状況として、服薬している者は930人で83.7%である。男性の服薬者は356人で81.8%、女性は574人で84.9%であった。高齢者の服薬については、保健師として支援していくべき課題であることが確認された。特定保健指導の対象者から治療中の者を除くのではなく、住民の生活パターンを理解している保健師が、積極的に保健指導を行い、対象者自身で服薬管理ができるようにしていくことが、これからの超高齢社会において重要であることが示唆された。

７－３　小学生及び幼稚園児の保護者における子宮頸がん予防ワクチンに関する意識調査

研究者　関屋 伸子

わが国の若年女性の子宮頸がん罹患者の増加は、少子高齢化が進む社会背景からも女性の娠孕性の維持という点で問題である。子宮頸がんは性交渉によるヒト・パピローマウィルス（HPV）の持続感染が主な原因であり、HPVワクチンによる予防が可能ながんである。HPVワクチンの適応は９歳もしくは10歳以下の女性である。本研究は、小学生以下の子どもの保護者を対象に子宮頸がん及びHPVワクチンに関する意識を調査し、保護者を対象としたHPVワクチン接種に関する健康教育を構築するための基礎資料を得ることを目的とした。調査は2012年２月に実施し、調査方法は集団調査で調査票は独自に作成した無記名自記式質問紙を用いた。データはSPSS　PASW Statistics 18を用いて集計した。調査対象のうち母親・父親以外の続柄を除いた50名を分析対象とした（有効回答率71.4%）。子どものHPVワクチン接種希望は73.7%と多かったが、子宮頸がん及びHPVワクチンに関する正しい知識は少なかった。すでに子どもにHPVワクチンを接種している者は14.0%であった。HPVワクチンに関する情報提供の希望は68.8%で、その多くが医師からの情報提供を希望し、内容は副反応がもっとも多かった。

８　インターネットジャーナル「看護科学研究」

平成11年12月に「大分看護科学研究」として創刊し、平成17年に名称変更したインターネットジャーナル「看護科学研究」は、第10巻第１号が平成24年６月に刊行予定。
論文および執筆要綱等は本学ホームページ（http://www.oita-nhs.ac.jp/journal/index.html）に公開されており、誰でも無料で投稿、購読することができる。

９　業績

著書

稲垣 敦

地域高齢者のための転倒予防：転倒の基礎理論から介入実践まで, 杏林書院, 東京都, 2012

影山 隆之

ストレス科学事典 デイケア，実務教育出版，東京都，2011.
ストレス科学辞典 ナイトケア，実務教育出版，東京都，2011

土山 幸之助、松尾 佳子、森 亜由美、吉田 陽子、影山 隆之

自殺対策のための相談の手引き 保健・医療・福祉・介護従事者用, 大分県こころとからだの相談支援センター, 大分市, 2012
自殺対策のための相談の手引き 一般住民と接する職員のために, 大分県こころとからだの相談支援センター, 大分市, 2012

N. Doba, S. Hinohara, H. Yanai, K. Saiki, H. Takagi, M. Tsuruwaka, M. Hirano, H. Matsubara (Edited by Y. Matsumoto)

Faces of Aging The lived experiences of elderly in Japan (2.The New Elder Citizen Movement in Japan), Stanford University Press, California, 2011

関根 剛

「９章児童期の発達課題と心の病理」、ライフサイクルの臨床心理学シリーズ１：乳幼児期・児童期の臨床心理学，培風館，東京都，2012

K. Inoue, R. Yanagisawa, E. Koike, R. Nakamura, T. Ichinose, S. Tasaka, M. Kiyono, H. Takano., Effects of carbon black nanoparticles on elastase-induced emphysematous lung injury in mice., Basic Clin Pharmacol Toxicol, 108(4), 234-40, 2011.

N. Ding, N. Kunugita, T. Ichinose, Y. Song, M. Yokoyama, K. Arashidani, Y. Yoshida., Intratracheal administration of fullerene nanoparticles activates splenic CD11b+ cells., J Hazard Mater. 194:324-330, 2011.

M. He, T. Ichinose, S. Yoshida, S. Yamamoto, K. Inoue, H. Takano, R. Yanagisawa, M. Nishikawa, I. Mori, G. Sun, T. Shibamoto., Asian sand dust enhances murine lung inflammation caused by Klebsiella pneumoniae., Toxicol Appl Pharmacol, 258(2), 237-47, 2012.

軽部 薫、林 猪都子、稲垣 敦、安部 眞佐子, 妊娠中からの運動習慣が産後の姿勢に及ぼす影響　産後1ヵ月と産後4ヵ月の比較, 助産雑誌, 65(10)，910-915, 2011.

Y. Iwasaki, H. Yamato, M. Fukagawa., Treatment with pravastatin attenuates oxidative stress and portects osteoblast cell viability from indoxyl sulfate., Ther Apher Dial, 15(2), 151-155, 2011.

Y. Iwasaki, JJ. Kazama, H.Yamato, M.Fukagawa., Changes in chemical composition of cortical bone associated with bone fragility in rat model with chronic kidney disease., Bone, 48(6), 1260-1267, 2011.

佐藤 彰子，梅野 貴恵, 褥婦のバースプランの認識と出産満足度との関連に関する研究, 日本助産学会誌, 25(１)、27-35, 2011.

M. Ojima, H. Eto, N. Ban and M. Kai., Radiation-induced bystander effects induce radioadaptive response by low-dose radiation., Radiat. Prot. Dosimetry, 46, 267-269, 2011.

K. Ono, T. Yoshitake, T. Hasegawa, N. Ban and M. Kai., Estimation of the number of CT procedures based on a nationwide survey in Japan., Health Physics Society, 100(5), 491-496, 2011.

K. Ono, N. Ban, M. Ojima, S. Yoshinaga, K. Akahane, K. Fujii, M. Toyota, F. Hamada, C. Kouriyama, S. Akiba, N. Kunugita, Y. Shimada and M. Kai., Nationwide survey on pediatric CT among children of public health and school nurses to examine a possibility for a follow-up study on radiation effects, Radiation Protection Dosimetry, 146, 260-262, 2011.

F. Takahashi, K. Sato, A. Endo, K. Ono, T. Yoshitake, T. Hasegawa, Y. Katsunuma, N. Ban and M. Kai., WAZA-ARI: computational dosimetry system for X-ray CT examinations. I. Radiation transport calculation for organ and tissue doses evaluation using JM phantom, Radiation Protection Dosimetry, 146, 241-243, 2011.

N. Ban, F. Takahashi, K. Ono, T. Hasegawa, T. Yoshitake, Y. Katsunima, K. Sato, A. Endo and M. Kai., WAZA-ARI: computational dosimetry system for X-ray CT examinations II: Development of web-based system, Radiation Protection Dosimetry, 146, 244-247, 2011.

N. Ban, F. Takahashi, K. Sato, A. Endo, K. Ono, T. Hasegawa, T. Yoshitake, Y. Katsunuma and M. Kai., DEVELOPMENT OF AWEB-BASED CT DOSE CALCULATOR: WAZA-ARI, Radiation Protection Dosimetry, 147, 333-337, 2011.

T. Kageyama, T. Kobayashi, A. Abe-Gotoh., Correlates to sleepiness on night shift among male worlers engaged in three-shift work in a chemical plant: its association with sleep practice and job stress, Industrial Health, 49, 634-641, 2011.

久保 陽子、小林 敏生、影山 隆之, 男性労働者における定年退職5年前と定年退職年の抑うつ度の変化, 産業精神保健, 19、316-324, 2011.

T. Kageyama., Views on suicide among middle-aged and elderly population in Japan: their association with demographic variables and feeling of shame in seeking help, Psychiatry and Clinical Neurosciences, 65, 105-112, 2012.

影山 隆之, 大分県において「自損行為」で救急車が出動した事例の発生率と性・年齢分布, 自殺予防と危機介入, 32(1)、53-59, 2012.

H. Shimoda, MJ. Bernas, MH. Witte., Dysmorphogenesis of lymph nodes in Foxc2 haploinsufficient mice., Histochem Cell Biol, 135: 603-613, 2011.

Y. Ito, M. Goto, Y. Hatano, F. Shimizu, K. Katagiri, S. Fujiwara, T. Hirano, T. Watanabe, S. Yokoyama, H. Shimoda., Inability to detect sentinel lymph node metastasis due to an obstruction of the lymphatics by metastatic Merkel cell carcinoma., J Dermatol, 38: 805-807, 2011.

磯貝 純夫、下田　浩、出口 友則、人見 次郎、Brant M. Weinstein, 魚類で辿るリンパ系の起源と発生, リンパ学, 34：39-42, 2011.

高波 利恵、大神 優子、植木 絢子, A県における保健師等の個別保健指導時の環境への着目, 産業看護, 4(2), 96-103, 2012.

田中 美樹、布施 芳史、高野 政子, 「父親になった」という父性の自覚に関する研究, 母性衛生, 52(1), 71-77, 2011.

藤内 美保、桜井 礼子、草間 朋子, 在宅終末期医療に関わる訪問看護師の「死亡確認」に関する実態・提案, 看護管理, 22(4), 324-332, 2012.

芦刈 弘枝、藤内 美保、中尾 勇祐、中尾 千香子, 介護保険施設での医行為必要時の連携実態と特定看護師（仮称）に求める特定医行為　Part Ⅰ, 看護, 63（5）, 98-103, 2011.

芦刈 弘枝、藤内 美保、中尾 勇祐、中尾 千香子, 介護保険施設での医行為必要時の連携実態と特定看護師（仮称）に求める特定医行為　Part Ⅱ, 看護, 63（6）, 100-102, 2011.

本田 彰子、真田 弘美、山田 雅子、洪 愛子、小池 智子、佐々木 吉子、藤内 美保、井上 智子, チーム医療の推進における看護師等の役割拡大・専門性向上に関する研究, 厚生労働省科学研究費補助金地域医療基盤開発推進研究事業　平成23年度報告書, 2011.

福田 晴美，宮﨑文子，梅野 貴恵, 産科診療所における母乳育児推進にむけてのあり方の検討 BFHとの比較から , 日本母子看護学会誌, ５(２), 37-45, 2012.

宮内 信治, Pitch movement in question sentences in graded readers: the distribution and interpretation of discoursal meaning in direct narratives, 日本英語音声学会　学術論文集　「英語音声学」, 14・15, 109-120, 2011.

その他の論文

影山 隆之, 労働者のストレスとコーピング特性 BSCPによる評価, 産業精神保健, 19, 290-295, 2011.

影山 隆之, 青年期における自殺予防, 保健の科学, 54, 185-189, 2012.

影山 隆之, メンタルヘルスリテラシーを育てる保健体育教育と自殺予防教育, 学校メンタルヘルス, 11 (2), 28-30, 2012.

甲斐 倫明, 放射線の健康リスクについて考える, 宮崎県放射線技師会会誌, 91, 5-8, 2012.

甲斐 倫明, 冷静に理解したい被ばくによる人体への影響, ヘルシスト, 35, 12-15, 2011.

M. Kai, Some lessons on radiological protection learnt from the accident at the Fukushima Daiichi nuclear power plant, J Radiological Protection, 32, N101-N105, 2012.

桑野 紀子, 韓国における看護基礎教育　2016年までに全ての看護基礎教育の大学化を, 看護, 64(5), 87-91, 2011.

桑野 紀子, イギリスにおけるNurse Practitioner(NP)の活躍と社会的背景, 病院, 70巻10号, 783-785, 2011.

桜井 礼子, 養成課程修了後の研修システムへの提案, 看護管理, 22（4）, 320-321, 2012.

佐藤 弥生, 研修生の変化と、教育課程が培ってきたもの, 訪問看護と介護, 16(4), 298-299, 2011.

高波 利恵, あなたの活動を研究につなげよう！事例で学ぶ研究の仕方・論文の書き方最終回論文作成へ向けて, 産業看護, 3(6), 61-65, 2011.

高波 利恵, 今月の海外文献　Why are financial incentives not effective at influencing some smokers to quit? Result of a process evaluation of a worksite trial assessing the efficacy of financial incentives for smoking cessation., 産業看護, 4(1), 2012.

高波 利恵, 今月の海外文献　An effective physical fitness program for small and medium-sized enterprises., 産業看護, 4(2), 104, 2012.

高波 利恵, あなたの活動を研究につなげよう！事例で学ぶ研究の仕方・論文の書き方第４回結果の表し方 図表作成の効果的な提示と文章化, 産業看護, 3(4), 64-69, 2011.

高野 政子, 米国ナースプラクティショナーの活動と課題 米国ナースプラクティショナー学会会長講演より, 看護科学研究, 9, 42-45, 2011.

宮内 信治, 死者と生者との対話　ある看護学生の英語読書記録から, 日本看護倫理学会誌, 3/1, 71-73, 2011.

渡邉 寿子, 宮内 信治, Shirley, G. T., 今年度のCALL学習の現状と今後の取り組み, 平成22年度大分県立看護科学大学　アニュアルミーティング抄録, 2011.

学術講演等

市瀬 孝道, 黄砂の健康影響, 福岡県保険医協会講演会, 福岡, 2011.11.

市瀬孝道, 黄砂アレルギーと微生物, 兵庫 Allergy Meeting 2012, 兵庫, 2012.2.

市瀬孝道, 黄砂アレルギーと微生物の役割, 第11回東海アレルギーフォーラム, 名古屋, 2012.2.

岩崎 香子, 慢性腎臓病（CKD）に伴う低代謝回転骨に関する検討-無形成骨症（ABD）モデルの骨密度・骨形態計測・骨強度・骨質-, 第3回骨形態フォーラム, 山梨県, 2011.6.

小野 孝二, わが国のCT画像診断件数の推定とCT診断からの臓器線量計算システムWAZA-ARIの開発, 第31回大塚ゼミ, 山口県宇部市, 2012.1.

甲斐 倫明, 放射線の健康影響と放射線防護, 福岡大学RI教育訓練講習会, 福岡市, 2011.4.

甲斐 倫明, 放射線防護の立場から, 日本リスク研究学会春季シンポジウム, 東京都, 2011.6.

甲斐 倫明, 屋内退避・避難, 日本保健物理学会福島第一原子力発電所事故対応Ｉシンポジウム, 東京都, 2011.6.

甲斐 倫明, 放射線の健康影響とその防護, 第8回大分県放射線管理研究会, 大分市, 2011.7.

甲斐 倫明, 被曝リスクとその防護基準, 放射線被曝についての公開討論会, 東京都, 2011.6.

甲斐 倫明, 放射線の発がん作用についてのいくつかの考え方, 日本学術会議緊急講演会「放射線を正しく恐れる」, 東京都, 2011.7.

甲斐 倫明, 人体の影響と防護の仕組み, 第48回アイソトープ・放射線研究発表会緊急公開講座, 東京都, 2011.7.

甲斐 倫明, 放射線の健康影響, 早稲田大学理工学術院主催未来エネルギーシンポジウム「東電福島原発事故とその教訓」, 東京都, 2011.7.

甲斐 倫明, 放射線のリスク評価の課題と展望, 京都大学原子炉実験所専門研究会「放射線防護研究と放射線生物研究の交点」, 大阪府熊取町, 2011.7.

甲斐 倫明, 発がんのリスクについて, 第4回食の安全・安心財団意見交換会, 東京都, 2011.8.

甲斐 倫明, 甲状腺がんの小児期感受性, 放射線影響研究所疫学研修会, 広島市, 2011.9.

M. Kai, Some lessons on radiological protection learned from the accident of the Fukushima Daiichi nuclear power plant, International Expert Symposium in Fukushima - Radiation and Health Risk, Fukushima city, 2011.9.

甲斐 倫明, 放射線リスク対応　−事故と問われた専門家と社会の接点, 日本放射線影響学会第54回大会特別シンポジウム「福島原子力発電所事故の概 要と人への影響」, 神戸市, 2011.11.

影山 隆之, 労働者のストレスとコーピング特性 BSCPによる評価, 第18回日本産業精神保健学会, 東京, 2011.7.

影山 隆之, 騒音による健康影響をめぐる近年の動向, 日本騒音制御工学会研究発表会2011年秋期研究

発表会, 東京, 2011.9.

影山 隆之, 「相談相手がいない」住民の割合の性・年齢・婚姻状況・地域差と地域における自殺対策, 第70回日本公衆衛生学会総会, 秋田, 2011.10.

Ito S., Yamamoto H., Kageyama T., Stress management services provided by a workers' mental health center in Japan, The 21st World Congress on Psychosomatic Medicine, Seoul, 2011.8.

下田　浩、村上正裕、Bernas MJ、Witte MH, リンパ管形成におけるAngiopoietin-2の発現・機能解析, 日本顕微鏡学会・第67回学術講演会　シンポジウム, 福岡, 2011.5.

関根 剛, 犯罪被害者等施策における地方公共団体の役割, 犯罪被害者等に関する地方公共団体職員研修会（内閣府）, 青森県, 2011.10.

関根 剛, 犯罪被害者等施策における地方公共団体の役割, 犯罪被害者等に関する地方公共団体職員研修会（内閣府）, 三重県, 2011.11.

関根 剛, 犯罪被害者等施策における地方公共団体の役割, 犯罪被害者等に関する地方公共団体職員研修会（内閣府）, 沖縄県, 2012.2.

S. W. Lee, Job Satisfaction and Stress Management, The 21st World Congress on Psychosomatic Medicine, Seoul, Korea, 2011.8.

学会発表

赤星 琴美、江藤 真紀、佐伯 圭一郎, 高齢者の健診・保健指導における保健師の関与についての一考察, The 76th annual meeting of the Japanese Society of Health and Human Ecology, 韓国（釜山）, 2011.11.

赤星 琴美, 妊娠中から始める 子育て支援のあり方, 大分県国保地域医療学会, 大分市, 2011.11.

井伊 暢美, Development of the Therapeutic Visual Structure Care Model for Person with Dementia, ICPM 2011, Seoul, 2011.8.

石田 佳代子, 高度救命救急センターにおける看護師による医療行為の実施可能性　救急看護師・医師に対する意識調査 , 第37回日本看護研究学会学術集会, 神奈川県, 2011.8.

石田 佳代子, 看護師の身体診察技術を活用した災害時遺体対応に関わる課題　災害医療活動の経験者に対する面接調査より , 第31回日本看護科学学会学術集会, 高知県, 2011.12.

T. Ichinose, M. He, Asian dusts and allergy, The 42 nd Annual meeting of Japanese Society of Ocupational and Environmental Allergy, Nagoya, 2011.6.

市瀬 孝道、賀 淼、吉田 成一、定金 香里、西川 雅孝、森 育子、高野 裕久, 黄砂が卵白アルブミン誘発性の肺の好酸球性炎症に与える影響, 第52回大気環境学会年会, 長崎県, 2011.9.

M. He, T. Ichinose, S. Yoshida, M. Nishikawa, Effect of Asian sand dust on expression of cytokine and chemokine induced by Klebsiella pneumoniae in mouse macrophage, 第52回大気環境学会年会, 長崎県, 2011.9.

B. Liu, S. Yoshida, M. He, T. Ichinose, Effect of microorgranisms attached onto yellow dust on inflammatory cytokines and TLRs expression in mouse macrophages, フォーラム2011 衛生薬学・環境トキシコロジー, 石川県, 2011.10.

賀 淼、市瀬 孝道、吉田 成一、劉 博瑩, 化学物質の複合曝露がアレルギーに及ぼす影響, フォーラム2011 衛生薬学・環境トキシコロジー, 石川県, 2011.10.

市瀬 孝道、賀　淼、吉田 成一, 化学物質が花粉症に与える影響, フォーラム2011 衛生薬学・環境トキシコロジー, 石川県, 2011.10.

市瀬 孝道、高野 裕久、井上 健一郎、柳沢 利枝, 黄砂の肺炎桿菌誘発性肺炎に対する増悪作, 第61回日本アレルギー学会秋季学術大会, 東京都, 2011.11.

岸川 禮子、下田 照文、吉田 誠、岩永 知秋、今井 透、市瀬 孝道, 2010年黄砂における喘息など呼吸器疾患への影響調査, 第61回日本アレルギー学会秋季学術大会, 東京都, 2011. 11.

M. He, T. Ichinose, S. Yoshida, S. Yamamoto, K. Inoue, H. Takano, R. Yanagisawa, M. Nishikawa, I. Mori, G. Sun, T. Shibamoto, Asian Sand Dust Enhances Murine Lung Inflammation Caused by Klebsiella Pneumoniae, 51th Society of Toxicology, San Francisco, 2012.3.

賀 淼、劉 博瑩、吉田 成一、尾立 翠、市瀬 孝道, 成分組成の異なる黄砂の気管支喘息増悪作用の比較, 第132回日本薬学会, 北海道, 2012.3.

市瀬 孝道、賀 淼、吉田 成一, 黄砂のスギ花粉症増悪作用, 第132回本薬学会, 北海道, 2012.3.

中間 優美、伊東 朋子、塩月 成則, 打診技術修得におけるスクラッチ法併用の有用性, 第16回日本看護研究学会九州・沖縄地方会学術集会, 大分市, 2011.11.

稲垣 敦, 体力テストの測定値を利用した身体組成の推定：妥当性の検討, 日本体育学会第62回大会, 鹿児島県, 2011.9.

稲垣 敦, 体力テストを利用した身体組成の推定式の妥当性, 第70回日本公衆衛生学会総会, 秋田県, 2011.10.

稲垣 敦, 大分県立看護科学大学健康増進プロジェクトの活動, 第70回日本公衆衛生学会総会, 秋田県, 2011.10.

稲垣 敦, 特定高齢者および要支援１・２高齢者の運動機能：運動機能向上標準プログラム（大分県版）の効果検証調査より, 日本体育測定評価学会第11回大会, 神奈川県, 2012.2.

R. Inomata, T. Inui, I. Hayashi, 20th WORLD CONGRESS FOR SEXUAL HEALTH, INFORMATION ABOUT SEXUAL RELATIONS DURING PREGNANCY FROM MATERNITY MAGAZINES IN JAPAN, Glasgow UK, 2011.6.

猪俣 理恵、乾つぶら、林猪都子, フリースタイル分娩導入に対する認識と障害　研修参加者への質問紙調査より, 第52回日本母性衛生学会学術集会, 京都府, 2011.9.

乾つぶら、猪俣 理恵、林猪都子, フリースタイル分娩研修会とその効果の検討, 第52回日本母性衛生学会学術集会, 京都府, 2011.9.

岩崎 香子、 風間 順一郎、大和 英之、深川 雅史, 腎不全動物における骨中メーラード反応生成物蓄積と骨弾性率低下との関連, 第31回日本骨形態計測学会, 岐阜県, 2011.5.

Y. Iwasaki, JJ. Kazama, H.Yamato, M.Fukagawa, Changes of chemical composition affect bone mechanical property in early chronic kidney disease., International Society of Nephrology 7th International congress on uremic research and toxicity, Nagoya, Japan, 2011.5.

河野 歩美、岩崎 香子, 高ホモシステイン血症による骨芽細胞機能低下はNMDA受容体を介する, 第54回日本腎臓学会学術集会, 神奈川県, 2011.6.

岩崎 香子、 風間 順一郎、大和 英之、深川 雅史, 慢性腎臓病に伴う低代謝回転骨の易骨折性には骨組成変化が関与する, 第13回日本骨粗鬆症学会学術集会, 兵庫県, 2011.11.

岩崎 香子, 腎機能低下と骨脆弱性との関連, 第23回日本腎性骨症研究会, 東京都, 2012.2.

梅野 貴恵, 角沖 久夫, 更年期女性の授乳経験が更年期症状や脂質代謝・動脈硬化に及ぼす影響 授乳婦と非授乳婦の比較 , 第26回日本女性医学学会, 兵庫県, 2011.11.

江月 優子, 影山 孝之, 一般病棟看護師のがん患者家族アセスメントの実際：その視点および実施頻度に関連する要因, 第16回日本看護研究学会九州・沖縄地方学術集会, 大分市, 2011.11.

M. Ojima, M. Kai, Persistence of DNA double-strand breaks in normal human cells induced by radiation-induced bystander effect, 14th International Congress of Radiation Research, Poland, 2011.8.

小嶋 光明、中山 恵輔、伴 信彦、甲斐 倫明, 放射線の分割照射によるDNA損傷の低減, 第44回日本保健物理学会, 茨城県, 2011.10.

小嶋 光明、中山 恵輔、伴 信彦、甲斐 倫明, 放射線の繰り返し照射によるDNA損傷の蓄積性の検証, 第54回日本放射線影響学会, 兵庫県, 2011.11.

小野 孝二、吉武 貴康、長谷川 隆之、勝沼 泰、高橋 史明、佐藤 薫、遠藤 章、伴 信彦、甲斐 倫明,

CT診断からの臓器線量評価システムWAZA-ARIの実験的検証, 日本保健物理学会　第44回研究発表会, 茨城県, 2011.10.

佐藤 薫、高橋 史明、遠藤 章、小野 孝二、長谷川 隆幸、勝沼 泰、吉武 貴康、伴 信彦、甲斐 倫明, CT診断からの臓器線量評価に用いる日本人女性ボクセルファントムの構築, 日本保健物理学会　第44回研究発表会, 茨城県, 2011.10.

高橋 史明、佐藤 薫、遠藤 章、小野 孝二、長谷川 隆幸、勝沼 泰、吉武 貴康、伴 信彦、甲斐 倫明, 日本人成人の男女ファントムを用いたマルチスキャナーCT撮影における臓器線量の数値解析, 日本保健物理学会　第44回研究発表会, 茨城県, 2011.10.

三浦 美和、林田 りか、高尾 秀明、吉田 正博、小野 孝二、松田 直樹, 放射線専門家が考える放射線リスク認知, 日本放射線安全管理学会, 第10回学術大会, 神奈川県, 2011.11.

甲斐 倫明, 疫学・生物の量的データを基にした新しい機構モデルに関する研究, 日本保健物理学会第44回研究発表会, 茨城県, 2011.10.

小西 恵美子、小野 美喜, 看護師がとらえる「よい看護実践」の枠組み, 日本看護倫理学会, 岩手県, 2011.8.

西部 由里奈、小野 美喜、江月 優子, 終末期の臨床が看護学生に与える「生きること」の尊さ, 第41回日本看護学会　成人看護Ⅱ, 大阪府, 2011.9.

小野 美喜, 大学院修士課程を修了した特定看護師（仮称）の活動の現状, 第31回日本看護科学学会学術集会, 高知県, 2011.12.

久保 陽子、小林 敏生、影山 隆之, 定年退職前後の男性労働者の退職に対する思いと精神健康度, 第84回日本産業精神衛生学会, 東京都, 2011.5.

S. Ito, H. Yamamoto, T. Kageyama, Stress reaction and coping behaviors of newly assigned managers, The 21st World Congress on Psychosomatic Medicine, Seoul, 2011.8.

河野 梢子, 病院内におけるMRSAの存在場所を明らかにするための調査研究, 日本看護研究学会九州・沖縄地方会学術集会, 大分市, 2011.11.

N. Kuwano, S. W. Lee, H. KIM, S. Nakata, Industrial Nurse's Activities for the Health Management of Worker's Working in Small-to-medium-sized Company - Compared to Korea and Japan -, The 21st World Congress on Psychosomatic Medicine, Seoul, Korea, 2011.8.

K. Sadakane, T. Ito, Effects of active ingredients in hand antiseptics on atopic dermatitis model nc/nga, The 14th East Asian Forum of Nursing Scholars(EAFONS), seoul, 2011.2.

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、小池 英子, 好乾性真菌アスペルギルス抽出物をアトピー性皮膚炎発症部位に塗布したときの影響, 第51回大気環境学会年会, 長崎県, 2011.9.

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、小池 英子, マウス脾細胞におけるユズ果皮抽出物のTh2サイトカイン産生抑制能, 第61回日本アレルギー学会秋季学術大会, 東京都, 2011.11.

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、小池　英子, アトピー性皮膚炎モデルマウスに対するフタル酸ジエチルヘキシル経口曝露の影響, 第82回日本衛生学会学術総会, 京都府, 2012.3.

佐藤 みつよ、宮崎　望、吉村 匠平、関根 剛, 音楽刺激が認知処理に及ぼす影響 リーディングスパンテストを用いて , 九州心理学会第72回大会, 熊本県, 2011.11.

Shimoda H, Isogai S, Histochamical demonstration of lymphatic vessels in zebrafish, 第116回日本解剖学会総会・学術集会, 神奈川県, 2011.3.

下田 浩、磯貝 純夫, ゼブラフィッシュのリンパ管の組織化学的解析, 第35回日本リンパ学会・総会アワードセッション, 東京都, 2011.6.

下田 浩、磯貝 純夫, ゼブラフィッシュのリンパ管の組織化学, 第52回日本組織細胞化学会総会・学術集会, 石川県, 2011.9.

関根 剛, 医療機関において犯罪被害者が経験する肯定的・否定的体験（２） 当事者による著書やホームページにおける記述から, 九州心理学会, 熊本県, 2011.11.

吉田 紗穂、関屋 伸子、生野 末子, 下肢の洗いづらさを軽減するマタニティ入浴用品開発へ向けた一考察, 第52回日本母性衛生学会学術集会, 京都府, 2011.9.

関屋 伸子, 妊娠末期の妊婦における入浴時の身体の洗いにくさと入浴用品の選択, 第52回日本母性衛生学会学術集会, 京都府, 2011.9.

関屋 伸子, 性犯罪被害者の診察における実状と問題点 一次医療機関の課題点 , 平成23年度宮崎県母性衛生学会, 宮崎県, 2011.10.

高波 利恵, 個別保健指導時の対象者をとりまく環境への着目の実態 某県内の事業所や健診機関等に所属する保健師に着目して , 日本産業衛生学会, 東京都, 2011.5.

高波 利恵, 個別保健指導時の環境への着目の実態 A県内の事業所や健診機関等の保健師への調査 , 第20回日本健康教育学会, 福岡県, 2011.6.

Rie Takanami, Health support cultural environment of workers in a large-sized company in Japan, The 21st World Congress on psychosomatic Medicine, Korea Seoul, 2011.8.

高波 利恵, 外部の専門職による中小企業のヘルシーカンパニーづくり支援の試み, 第76回　日本民族衛生学会, 福岡県, 2011.11.

松本 侑子、田中 美樹、高野 政子, 慢性疾患および障がいをもつ子どもへの保育士の支援と看護職との連携, 第16回日本看護研究学会九州・沖縄地方会学術集会, 大分市, 2011.11.

丸井 沙也加、高野 政子、田中 美樹, 小児がんの告知の動向に関する文献的研究, 第16回日本看護研究学会九州・沖縄地方会学術集会, 大分市, 2011.11.

高野 政子, 院内学級、原籍校と小児病棟看護師の連携の現状と課題, 日本育療学会小規模研究会, 岡山県, 2012.3.

Tonai, Miho, Sakurai, Reiko, Ono, Miki, Fukuda, Hiromi, Takano, Masako, Ojiro, Hitomi,Hayashi, Itoko, Eto, Maki, Kusama, Tomoko, Introduction of a new education curriculum for primary care nurse practitioners in graduate school programs in Japan, 第3回日中韓看護学会, ソウル, 2011.10.

藤内 美保, 生理学的バイオメカニクス的観点からの介助動作, 第31回日本看護科学学会, 高知県, 2011.12.

本田 彰子、川本 祐子、藤内 美保、佐々木 吉子、小池 智子、井上 智子, チーム医療の推進における看護師等の専門性の向上・役割拡大に関する研究　看護師の専門職性の発揮の実際と発展, 第31回日本看護科学学会交流集会, 高知県, 2011.12.

Itoko Hayashi, Tsubura Inui, Rie Inomata,Atsuko Yoshidome, MihoTonai,and Kiyomi Konishi, Married couples’ knowledge and actuality of family planning in Japan, The 20th WAS World Congress for Sexual Health, Glasgow, United Kingdom, 2011.6.

佐藤 かなえ、林 猪都子、乾 つぶら、猪俣 理恵, 女性の出産満足を高める要因に関する文献的検討, 母性衛生, 京都府, 2011.9.

河野 ちかの、乾 つぶら、林 猪都子、猪俣 理恵, 産後１カ月の母親と家族との睡眠の関連, 母性衛生, 京都府, 2011.9.

平野 亙, 自閉症児とその保護者　障がい受容の課題と支援, 第12回九州発達障害療育研究会大分大会シンポジウム, 別府市, 2011.12.

吉田 成一、高野 裕久、市瀬 孝道, 大気中に含まれる微粒子の胎仔期暴露が雄性胎仔の遺伝子発現に与える影響, 第132回日本薬学会, 北海道, 2012.3.

吉田 成一、押尾 茂、西川 雅高、賀 淼、市瀬 孝道, 風送黄砂によるマウス精子性状への影響, 第52回大気環境学会, 長崎県, 2011.9.

吉田 成一、高野 裕久、市瀬 孝道, 大気中浮遊粒子状物質の次世代雄性生殖機能への影響, フォーラム2011：衛生薬学・環境トキシコロジー, 石川県, 2011.10.

吉村 匠平, webカメラを用いた簡易応答確認装置, 第17回大学教育研究フォーラム, 京都府, 2011.3.

吉村 匠平, 「正解が提示されない」授業を看護学生はどう受け止めるか？, 第8回日本協同教育学会, 千葉県, 2011.10.

吉村 匠平、佐藤 みつよ、関根 剛、矢野 奈々美, 自閉症児を対象とした音楽療法に関する文献的研究, 第72回九州心理学会, 熊本県, 2011.11.

S. W. Lee, N. Kuwano, N. Damiati, H. S. Kim, M. O. Kim, S. Kashima, “ Perception of the Life and Death among Japanese, Korean and Indonesian Nurses”, The 9th Asia Pacific Hospice Conference, Malaysia, 2011.7.

N. Damiati, S. W. Lee, N. Kuwano, H. Fukuda, H. J. Yoo, A Comparative Study on Nurses Attitudes toward Dying Care of Terminally Ill Patients among Indonesia, Japan and Korea, The 9th Asia Pacific Hospice Conference, Malaysia, 2011.7.

10　地域貢献

講演等

井伊 暢美

高齢者のケアにおける構造化の有効性，おしまコロニー　侑愛荘学習会，北海道，2011..12.

市瀬 孝道

黄砂とアレルギー，　　京都府立医科大学公開講座「子どもの健康と化学物質」，京都府，2011.12.

石田 佳代子

フィジカルアセスメント，平成23年度大分県看護協会研修会，大分市，2011.4.
フィジカルアセスメント，平成23年度大分県看護協会研修会，大分市，2011.5.
フィジカルアセスメント，平成23年度大分中村病院看護師研修会，大分市，2011.6.
フィジカルアセスメント，平成23年度大分岡病院看護師研修会，大分市，2011.9.
看護過程，平成23年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会，大分市，2011.9.
看護職員に必要な検査の知識，平成23年度看護力再開発講習会，大分市，2011.10.

稲垣 敦

いきいき姫島体操の指導，ケーブル姫島TV収録，姫島村，2011.4.
骨と運動，大分市人生いきいきはつらつスクール，大分市，2011.5.
介護予防と生活習慣病予防のための運動，竹田市食生活改善推進協議会員養成講座，竹田市，2011.6.
体力測定・運動指導，大分丘の上病院sport day（１），大分市，2011.7.
健康チェック，大分トリニータホームゲーム，大分市，2011.9.
健康チェック・体力測定，大分スポーツ広場，大分市，2011.9.
体力測定・運動指導，大分丘の上病院sport day（２），大分市，2011.10.
企画指導，日本テレビ「名峰・立山の風に吹かれて」，大分市，2011.10.
健康チェック，第36回富士見が丘団地体育祭，大分市，2011.10.
健康チェック，ななせの里まつり，大分市，2011.11.
メタボ予防のための運動・運動指導，ソニーコンダクタ九州大分TECセンター「３５歳セミナー」，国東市，2011.11.

猪俣 理恵

看護職 命でつながる仕事，出前講義，杵築高校，大分市，2011.7.

岩崎 香子

簡単な理科実験，大分県立看護科学大学若葉祭，大分市，2011.5.

梅野 貴恵

看護研究の基礎，平成23年度大分県看護協会研修会，大分市，2011.5.
看護研究の基礎，平成23年度大分県看護協会研修会，大分市，2011.6.
助産師教育課程，平成23年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会，大分市，2011.7.
大学等出張講義「看護職とは？」，大分県中津南高等学校大学等出張講義，中津市，2011.9.
4年生「第二次性徴と妊娠」，大分市立三佐小学校「いのちの教育」，大分市，2011.10.

小野 孝二

放射線業務従事者のための教育訓練，大分県立病院　放射線業務従事者のための教育訓練，大分県大分市，2011.6.
放射線と健康，大分県竹工芸・訓練支援センター，大分県別府市，2011.10.
放射線被ばくと健康影響，豊後大野市民病院，大分県豊後大野市，2011.10.
「放射線の人体に与える影響」および「放射線障害の防止に関する法令」，事業所内教育・訓練講習，新日鐵，大分市 2012.2.
放射能と食品の安全，消費者研修会　Oita賢いくらしの会，大分市，2012.3.

小野 美喜

実習指導計画・指導案の作成，平成23年度保健師助産師看護師実習指導者講習会，大分市，2011.9.
「特定看護師（仮称）の今」，埼玉県看護師職能集会，埼玉県，2011.11.
看護倫理とは，臼杵コスモス病院看護部研修会，臼杵市，2012.1.
「看護倫理ーよい看護とは」，大分県立病院　看護倫理研修会，大分市，2012.2.
倫理的思考のステップ，臼杵コスモス病院看護部研修会，臼杵市，2012.3.
日本の特定看護師の現状と課題，第13回NPプロジェクト国際会議，大分市，2012.3.

甲斐 倫明

原子力災害と放射線対応, 放射線・放射線影響に関する研修会, 大分市, 2011.4.
放射線の健康影響と放射線防護, 放射線・放射能を学ぶワークショップ, 東京都, 2011.5.
放射線の健康リスクと放射線防護, 食品保健科学情報交流協議会会員研修シンポジウム, 東京都, 2011.5.
放射線被ばくの健康影響について, JA日出講演会, 日出町, 2011.6.
放射性物質による健康影響および農畜産物への影響, コープ大分講演会, 大分市, 2011.6.
放射線の健康影響とその防護, 大分市養護教諭前期研修会, 大分市, 2011.8.
放射性物質が健康に及ぼす影響, 大分県食品安全講演会「食品と放射能について、知りたいこと、伝えたいこと」, 大分市, 2011.9.
放射性物質による農畜産物の影響と健康影響, 第21回大分県生協大会, 大分市, 2011.10.
低線量放射線被ばくのリスク, 日本放射線影響学会第54回大会一般公開講座, 兵庫県, 2011.11.

影山 隆之

中津市でできる自殺対策，平成23年度中津市自殺対策連絡協議会，中津市，2011.1.
中津市民にできる自殺対策，平成23年度中津市自殺対策人材養成研修，中津市，2011.2.
自殺対策と精神保健福祉士の役割，平成23年度大分県自殺対策出前講座，大分市，2011.5.
職場のメンタルヘルス，大分県平成23年度マネジメント研修，大分市，2011.5.
職場のメンタルヘルス，平成23年度大分市管理職員研修，大分市，2011.6.
睡眠と健康，大分県立社会教育総合センター「おおいた学びの輪」ふるさと学講座，別府市，2011.7.
自殺予防と事後対策，大分産業保健推進センター平成23年度産業医研修，大分市，2011.7.
労働者のメンタルヘルスづくりの基本的理解，大分県各市公平委員会連絡会研究会，大分市，2011.7.
大分県における自殺予防対策の現状と課題 いま個人・組織としてできること，平成23年度第1回玖珠町自殺対策連絡協議会，玖珠町，2011.7.
ストレス対処のスタイル それでも人生にイエスと言えるか？，大分ヤングの会，大分市，2011.7.
自殺予防と事後対策：自殺リスクを抱えた人への対応，大分県弁護士会研修会，大分市，2011.8.
自殺対策の現状と看護師の役割，大分県看護協会平成23年度自殺対策専門研修，大分市，2011.8.
自殺対策は地域でつながることから 地域病院の役割，豊肥保健所平成23年度自殺対策専門研修会，豊後大野市，2011.9.
自殺と自殺対策の基礎 いのちの貴さを訴えるだけでよいのか？，平成２３年度豊後大野市自殺対策ゲートキーパー養成研修，豊後大野市，2011.9.
働き盛りの自殺と自殺対策，大分県自殺対策シンポジウム，大分市，2011.9.
職員の心の健康づくり 管理監督者の役割と方法，別府市水道局全国労働衛生週間講演会，別府市，2011.10.
自殺と自殺対策の基本的な知識，平成２３年度豊後大野市自殺対策ゲートキーパー養成研修，豊後大野市，2011.10.
地域で取り組む自殺・うつ対策，南部保健所平成23年度自殺・うつ対策支援ネットワーク会議，佐伯市，2011.11.
学校教職員の心の健康づくりと自殺対策，津久見市メンタルヘルス研修会，津久見市，2012.1.
職場復帰の支援，大分産業保健推進センター平成23年度第21回衛生管理者等研修，大分市，2012.1.
日出町職員研修会，自殺と自殺対策の基本的な知識，日出町，2012.2.

河野 梢子

フィジカルアセスメント，平成23年度大分県看護協会研修，大分市，2011.4.
フィジカルアセスメント脳神経系、運動系，フィジカルアセスメント，大分市，2011.8.

桑野 紀子

看護の展望　これからの看護に求められる役割 ，高等学校　出前講義，大分鶴崎高等学校，大分市，2011.10.

桜井 礼子

看護管理研究の活用，大分県看護協会認定看護管理者セカンドレベル教育課程，大分市，2011.11.

定金 香里	「色が変わる不思議なブーケ」，大分県理科・化学懇談会主催　「夏休み子供サイエンス2011.」，大分市，2011.8.
佐藤 みつよ	簡単な理科実験，大分県立看護科学大学若葉祭，大分市，2011.5.
佐藤 弥生	在宅医療管理の標準的な作業手順の活用、訪問看護における静脈注射とガイドライン，平成23年度訪問看護専門分野講習会，大分市，2011.4. 訪問看護に期待すること 認定看護師の立場から(パネルディスカッション)，平成23年度大分県訪問看護ステーション連絡協議会研修会，大分市，2011.7. 難病療養者を支えるケアチームの連携と協働，大分県特定施設連絡協議会講習会，大分市，2011.9. 「痰の吸引」における介護職との連携，大分県特定施設連絡協議会職種間研修，大分市，2012.2.
品川 佳満	データ解析入門，鹿児島大学　医学部保健学科　公開講座，鹿児島県，2011.7. 情報テクノロジー ，大分県看護協会　認定看護管理者（セカンドレベル）教育課程，大分市，2011.10. 看護研究Ⅱ，大分県看護協会　教育研修，大分市，2011.11. 看護研究Ⅱ，大分県看護協会　教育研修，大分市，2011.12.
G.T. Shirley	簡単な理科実験，大分県立看護科学大学若葉祭，大分市，2011.5.
下田 浩	特殊感覚器（聴覚・平衡器），解剖学講義，大分大学医学部医学科，由布市，2011.6. 特殊感覚器（聴覚・平衡器），組織学実習，大分大学医学部医学科，由布市，2011.6.

関根 剛

メンタルヘルス，大分県職員研修所，大分市，2011.5.
犯罪被害者支援とは何か，紀の国被害者支援センターボランティア講座，和歌山県，2011.6.
直接的支援マニュアルの作成，紀の国被害者支援センター直接支援員継続研修，和歌山県，2011.6.
メンタルヘルス，大分県職員研修所新任斑総括研修，大分市，2011.6.
こころの健康づくりー笑顔、相談、自殺予防ー，別府市こころの健康づくり研修会（民生委員対象），別府市，2011.6.
自殺予防のために地域でできること，別府市心の健康づくり研修会，別府市，2011.6.
犯罪被害者自助グループファシリテーター（10回），公益社団法人大分被害者支援センター，大分市，2011.6.
支援員のメンタルヘルス，全国被害者支援ネットワーク九州沖縄ブロック研修会，沖縄県，2011.7.
カウンセリングスキルの基礎／支援者の自己理解，山口被害者支援センターボランティア養成研修会，山口県，2011.7.
大分県心の緊急支援チーム支援活動（高校への出動３日間）　隊長，大分県心の緊急支援チーム，玖珠町，2011.7.
保護者との関係作り，県立緑が丘高校教育相談・生徒指導部合同主催教職員研修，大分市，2011.7.
ケース検討，由布支援学校，由布市，2011.7.
スクールセクハラの及ぼす影響と具体的事例への対応，大分県スクールセクハラ防止相談窓口担当者研修（県教育センター），大分市，2011.7.
カウンセリングの原理と実際’（２日間），大分県看護協会保健師助産師看護師実習指導者講習会 ，大分市，2011.8.
トラウマとそのケア，大分県心の緊急支援チーム研修会，大分市，2011.8.
カウンセリングの技法 自殺念慮者への対応，弁護士司法修習生研修，大分市，2011.8.
面接技術，大分県看護協会「訪問看護eラーニング」を利用した訪問看護師養成講習会，大分市，2011.8.
スクールセクハラの及ぼす影響と具体的事例への対応，大分県スクールセクハラ防止相談窓口担当者研修（宇佐市），宇佐市，2011.8.
スクールセクハラの及ぼす影響と具体的事例への対応，大分県スクールセクハラ防止相談窓口担当者研修（大分県教育センター），大分市，2011.8.
被害者の心情（１）（２）（３）（４）（５）（６），大分刑務所，大分市，2011.8.
ＤＶ相談員のストレスケア（6回），大分県消費生活・男女共同参画プラザ，大分市，2011.8.
東日本大震災派遣職員ストレスケアセミナー；派遣部隊Ａ，大分県警察，大分市，2011.9.
パネルディスカッション（コーディネイター）：被害者支援と地域社会における連携，全国被害者支援フォーラム2011，東京都，2011.9.
被害者の心情を考える，大分少年院，豊後大野市，2011.9.
東日本大震災派遣職員ストレスケアセミナー；派遣部隊Ｂ，大分県警察，大分市，2011.10.
東日本大震災派遣職員ストレスケアセミナー；派遣部隊Ｃ，大分県警察，大分市，2011.10.
惨事ストレス対策，大分県消防学校，大分市，2011.10.
パネルディスカッション（パネリスト）：東日本震災におけるネットワーク加盟団体の活動 災害事故においてネットワークができること，全国被害者支援ネットワーク秋期全国研修会，東京都，2011.10.
震災における事務局対応 これからの対応システム，全国被害者支援ネッ

トワーク秋期全国研修会，東京都，2011.10.
面接技術ロールプレイ，全国被害者支援ネットワーク秋期全国研修会，東京都，2011.10.
利用者や利用者家族とよりより関係を築くために　コミュニケーション技術 ，大分県安心サポートセンター，大分市，2011.10.
被害者の心理と二次受傷，大分県警察学校，大分市，2011.10.
児童・生徒が性被害にあったとき，性に関する指導についての研修会（大分県教育庁），大分市，2011.11.
育成の技術，全国被害者支援ネットワーク東海地区ブロック研修会，岐阜県，2011.11.
学校におけるクレームへの対応，私立中学高等学校事務職員研修会，大分市，2011.11.
介護現場で毎日のたまる自分たちのストレスを何とかしてみよう，介護職のためのメンタルヘルス研修，豊後大野市，2011.11.
被害者と法，中央大学法科大学院，東京都，2011.12.
こころの健康づくりー日常の小さな悩みへの相談ー，津久見市心の健康講演会，津久見市，2011.12.
介護現場でたまる自分たちのストレスを何とかしてみよう，別杵東速ブロック在宅介護支援センター協議会，別府市，2012.1.
聴くということ／ロールプレイ，チャイルドラインおおいた受け手養成講座，大分市，2012.1.
ケース検討，由布支援学校，由布市，2012.1.
他団体との共同支援，全国被害者支援ネットワークコーディネィター研修前期，東京都，2012.2.
他団体との共同支援（２），全国被害者支援ネットワークコーディネィター研修中期，東京都，2012.2.
被害者の心情を考える，大分少年院，豊後大野市，2012.2.
カウンセリング技術 意思決定，全国被害者支援ネットワーク九州沖縄ブロック研修会，沖縄県，2012.2.
認知行動療法の考え方（１）（２），大分保護観察所所内研修会，大分市，2012.2.
対応が難しい相談を受ける時のポイント，おおいた人権相談ネットワーク相談員研修会（大分県人権・同和対策課），大分市，2012.2.
希死念慮者に対する相談，社会的包括サポートセンター，大分市，2012.2.
面接相談技術 意思決定，全国被害者支援ネットワーク近畿ブロック研修会，和歌山県，2012.2.
支援員・相談員のメンタルヘルス，公益社団法人熊本被害者支援センター継続研修会，熊本県，2012.3.
高齢者の心の健康と自殺予防のためにできること，臼杵市保健所，臼杵市，2012.3.
惨事ストレス対策／ロールプレイ，大分県消防学校，大分市，2012.3.

高波 利恵

夏の健康，木の上新町公民館健康教育，大分市，2011.6.
講評，別府市医師会看護職研修会　第21回研究発表会，別府市，2012.2.

高野 政子	たんの吸引の基礎，大分県立日田支援学校，日田市，2011.6. 超高齢社会における小児医療・看護の重要性，大分県立中津北高等学校模擬授業，中津市，2011.6. 障害の重い児童・生徒の呼吸管理，大分県立大分支援学校校内研修会，大分市，2011.7. 超高齢社会における小児医療・看護の重要性，大分県立鶴城高校「鶴城大学」出前講義，佐伯市，2011.7. たんの吸引の基礎・経管栄養の基礎，平成23年度大分県教育委員会主催「医療的ケア研修会」，大分市，2011.8. 保育所における看護と健康管理，平成23年度保育所健康・安全保育研修会，別府市，2011.9. 実習指導の実際（小児看護学），平成23年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会，大分市，2011.9. 家族看護について学ぼう，大分県看護協会教育研修会，大分市，2011.11. 家族看護について学ぼう，平成23年度大分県看護協会教育研修会，大分市，2012.1.
田中 佳子	フィジカルアセスメント，平成23年度大分県看護協会研修，大分市，2011.4. フィジカルアセスメント脳神経、運動系，中村病院看護師研修会，大分市，2011.8. 健康チェック・体力測定，大分スポーツ広場，大分市，2011.9.
田原 歩	簡単な理科実験，大分県立看護科学大学若葉祭，大分市，2011.5.

藤内 美保

臨床に役立つフィジカルアセスメントの基礎，大分県看護協会一般研修，大分市，2011.4.
看護研究の基礎　質的研究，大分県看護協会　一般研修，大分市，2011.5.
臨床に役立つフィジカルアセスメントの基礎，大分県看護協会　一般研修，大分市，2011.5.
フィジカルアセスメントの基本，中村病院看護師研修会，大分市，2011.5.
フィジカルアセスメント，大分県看護協会　訪問看護師研修会，大分市，2011.6.
看護研究の基礎　質的研究，大分県看護協会　一般研修，大分市，2011.6.
訪問看護に役立つフィジカルアセスメント　，大分県看護協会　訪問看護師研修会，大分市，2011.6.
チーム医療と特定看護師，大分県看護協会　認定看護師研修，大分市，2011.7.
呼吸器系のフィジカルアセスメント　，大分岡病院　看護師研修，大分市，2011.7.
フィジカルアセスメントの基礎，河野脳神経外科病院　看護師研修，大分市，2011.7.
フィジカルアセスメント，大分県教員再教育研修，大分市，2011.7.
フィジカルアセスメント，大分赤十字病院　レベルⅡ研修，大分市，2011.7.
フィジカルアセスメント，厚生連鶴見病院　看護師研修会，別府市，2011.8.
フィジカルアセスメントの基礎，大分赤十字病院　レベルⅠ研修，大分市，2011.8.
循環器系のフィジカルアセスメント　，大分岡病院　看護師研修，大分市，2011.8.
実習指導案・指導計画，大分県看護協会　実習指導者講習会，大分市，2011.9.
フィジカルアセスメン，別府医師会看護師研修，別府市，2011.9.
チーム医療，認定看護管理者制度ファーストレベル教育課程，広島県，2011.10.
呼吸器・循環器系のフィジカルアセスメント，国立病院機構西別府病院看護師研修会，別府市，2012.3.

林 猪都子

大学の教育課程・自己啓発，平成23年度　保健師・助産師・看護師実習指導者講習会，大分市，2011.8.
大切な命をつないで，性教育，大分市，2011.12.

平野 亙

福祉における権利擁護　権利としての自立，大分県社会福祉介護研修センター　県・市町村福祉担当新任職員研修会，大分市，2011.5.
発達障がい児の理解と支援　保護者の立場から，豊肥地区保育協議会総会・研修会，豊後大野市，2011.5.
保護者が教師に期待すること　障がい児の生きる力を育てるために，大分県教育センター　平成23年度初任者研修，大分市，2011.6.
発達障がい児の未来のために　専門職に寄せる親の願い，大分県　平成23年度発達障がい者支援専門員養成研修，大分市，2011.6.
患者・障がい者の自立権，大分県教育庁　平成23年度人権教育専門講座，大分市，2011.7.
訪問看護における患者の権利と意思決定の支援，大分県看護協会　平成23年度訪問看護基礎研修，大分市，2011.7.
発達障がい児の理解と支援　保護者の視点から，玖珠郡幼稚園会　第１回研修会，九重町，2011.8.
自閉症スペクトラムの理解と支援　保護者の視点から，中津市教育委員会　平成23年度第２回中津市特別支援教育研修会，中津市，2011.8.
利用者の権利保障の方法 自立支援と苦情解決，大分県社会福祉協議会平成23年度福祉サービス苦情解決事業　第三者委員等研修会，大分市，2011.8.
特別な支援を必要とする子どもたちの理解と支援Ⅰ　自閉症スペクトラムの特性と基本的な支援スキル，大分市教育委員会　平成23年度特別支援教育研修講座（実践２），大分市，2011.8.
福祉サービス第三者評価基準（特別養護老人ホーム版）について，大分県社会福祉協議会　福祉サービス第三者評価調査者継続研修会，大分市，2011.8.
安全教育とリスク・マネジメント，大分県看護協会　保健師・助産師・看護師実習指導者講習会特別講演，大分市，2011.10.
医療をめぐる人権問題，大分県　平成23年度人権問題研修講師「入門講座」，大分市，2011.10.
障がい者の自立権　障がいをめぐる人権問題から，平成23年度人権教育校内研修支援事業　大分県立盲学校教員研修，大分市，2011.12.
発達障がい児の理解と支援　保護者の視点から，平成23年度大分市発達障がい児支援研修，大分市，2011.12.
自閉症スペクトラムの特性と基本的な支援スキル，平成23年度児童デイサービス事業療育担当職員等研修会，大分市，2012.2.
自閉症児の特性理解と支援，株式会社ＥＣ　職員研修会，大分市，2012.2.
医療における倫理の意味とProfession の責任，豊後大野市民病院職員研修，豊後大野市，2012.2.
医療における倫理原則と患者の諸権利，豊後大野市民病院職員研修，豊後大野市，2012.3.
問題解決の方法，豊後大野市民病院職員研修，豊後大野市，2012.3.
利用者の権利擁護と虐待の防止，別府発達医療センター平成23年度特別研修，別府市，2012.3.
自閉症児・者の特性理解と支援，大分県障害者相談支援事業推進協議会県南ブロック研修会，津久見市，2012.3.

吉村 匠平

保育士に必要な傾聴の技術　その１，社会福祉法人皆輪会　カウンセリング研修，福岡県，2011.5.
コミュニケーション論　１，アルメイダ病院　初任者研修1回目，大分市，2011.6.
広汎性発達障がいの理解，社会福祉法人皆輪会　障がい児保育研修，福岡県，2011.6.
「やる気がない」を理解する，大分県PTA連合会母親部会研修会，大分市，2011.6.
脳が世界を生み出す　～認知機能のはたらき～，2011年度　公開講座，大分市，2011.7.
動機付けの心理学，大分医師会立アルメイダ病院　プリセプター研修，大分市，2011.7.
発達障がいのある児童・生徒の心理・行動面の対人援助について，平成23年度特別支援学校内研修会，由布市，2011.8.
マイクロカウンセリング　ワークショップ，社会福祉法人皆輪会　カウンセリング研修，福岡県，2011.8.
広汎性発達障害を持つ子どもとの関わり方，社会福祉法人皆輪会　障害児保育研修会，福岡県，2011.9.
「やる気がない」を理解する，別府市PTA母親部会講演会，別府市，2011.10.
初任者研修　集団での意思決定，大分医師会立アルメイダ病院　初任者研修，大分市，2011.10.
２時間半「愉しく」過ごすワークショップ，大分県竹工芸・訓練支援センター　フォローアップ研修，別府市，2011.10.
理解しやすいコミュニケーション法，福岡県栄養士会　研修会，福岡県，2011.10.
マイクロカウンセリング　ワークショップ，社会福祉法人皆輪会　カウンセリング研修，福岡県，2011.12.

研究指導

大分県立病院	石田 佳代子、関根 剛
独立行政法人国立病院機構大分医療センター	岩崎 香子、猪俣 理恵
大分赤十字病院	江月 優子、定金 香里
大分県厚生連鶴見病院	江月 優子
中津市民病院	小野 孝二、桜井 礼子
国立病院機構西別府病院	佐藤 みつよ
大阪大谷大学薬学部薬剤学講座	下田 浩
アルメイダ病院研究指導	秦 さと子、吉村 匠平

学会その他の役員等

赤星 琴美

大分市建築審査委員
大分市風俗関連営業建築物審議会委員
湯のまち別府健康21計画策定委員会委員
大分県国民健康保険団体連合会介護サービス苦情処理委員会

井伊 暢美

TEACCHプログラム研究会大分県支部

石田 佳代子

中津ファビオラ看護学校　非常勤講師

市瀬 孝道

環境省黄砂問題検討会委員
福岡市黄砂影響検討会委員
大気環境学会九州支部会役員

伊東 朋子

日本ALS協会大分県支部運営委員
平成23年度　大分県准看護師試験委員

稲垣 敦	日本体育測定評価学会　常任理事・副理事長 日本体育測定評価学会　将来検討委員長 日本体育測定評価学会　学会賞選考委員長 日本体育学会　編集委員 日本体育学会　学会賞選考委員 大分県スポーツ学会　運営委員 大分県スポーツ学会　人材育成委員 熊本大学教育学部　非常勤講師 大分大学医学部　非常勤講師
猪俣 理恵	大分県母性衛生学会副事務局長 第８回大分県母性衛生学会運営実行委員会委員 公益社団法人全国助産師教育協議会 国際活動小委員会委員
岩崎 香子	日本骨粗鬆症学会評議委員 腎性骨症研究会幹事
梅野 貴恵	大分県母性衛生学会理事 平成23年度助産師確保連絡協議会委員
小嶋 光明	日本保健物理学会企画検討委員
小野 孝二	社団法人　日本アイソトープ協会　広報委員会委員 久留米大学認定看護師教育センター　非常勤講師
小野 美喜	大分県脳卒中懇話会世話人 第23回日本リハビリテーション看護学会査読委員 日本看護研究学会九州・沖縄地方学術集会　実行委員 日本看護倫理学会　評議員
甲斐 倫明	国際放射線防護委員会(ICRP) 第4専門委員会委員 文部科学省放射線審議会委員 文部科学省放射線審議会基本部会 部会長 内閣府原子力安全委員会専門委員　放射線防護部会副部会長 人事院安全専門委員会委員 国連科学委員会国内対応委員会委員 日本リスク研究学会副会長・編集委員会委員長 日本医学放射線学会放射線防護委員会委員 日本歯科放射線学会防護委員会委員 独立行政法人日本原子力研究開発機構原子力基礎工学研究・評価委員会委員 九州大学非常勤講師 日本放射線影響学会評議員 鹿児島県地域防災計画検討有識者会議委員 福岡県防災会議専門委員 独立行政法人日本原子力研究開発機構　国際放射線防護委員会技術基準等の整備運営委員会委員 財団法人放射線影響協会　ICRP調査・研究連絡会平成23年度連絡委員会委員 公益財団法人原子力安全研究協会　地層処分に係る社会科学的方策検討会委員 日本学術会議　放射線の健康への影響と防護分科会

影山 隆之	大分県地域福祉権利擁護事業契約締結審査会委員 大分県自殺対策連絡協議会副会長 日本学校メンタルヘルス学会運営委員 日本自殺予防学会理事・編集委員 豊後大野市自殺対策連絡協議会助言者 日本精神衛生学会常任理事・編集委員長 日本社会精神医学会評議員
河野 梢子	ななせ生きがいクラブアドバイザー
佐伯 圭一郎	日本民族衛生学会評議員 大分県情報公開・個人情報保護審査会委員 生涯健康県おおいた21推進協議会幹事
桜井 礼子	大分地方労働審議会委員 大分県福祉審議会民生委員審査専門分科会委員 大分県看護協会認定看護管理者教育課程運営委員会委員 大分市食育推進計画策定委員会委員 日本災害看護学会国際交流委員会委員 日本看護管理学会査読委員
定金 香里	大気環境学会誌　編集委員 大分県理科・化学懇談会　幹事 平松学園　大分リハビリテーション専門学校　非常勤講師 大気環境学会第51回大気環境学会年会企画委員 大分県産官学連携推進会議コーディネーター
佐藤 弥生	大分県看護協会訪問看護推進協議会委員
品川 佳満	別府医療センター附属 大分中央看護学校 非常勤講師
下田 浩	日本リンパ学会　評議員 日本組織細胞化学会　評議員 日本解剖学会　評議員 大分Gut Science　世話人 リンパ微小循環研究会　世話人
関根 剛	消防庁緊急時メンタルサポートチームメンバー 大分県こころの緊急支援チームメンバー 大分市男女共同参画審議会　会長 公益社団法人　大分被害者支援センター　理事 ＮＰＯ全国被害者支援ネットワーク　理事 NPO全国被害者支援ネットワーク　支援活動検討委員会委員長代行 大分いのちの電話　スーパーバイザー 公益社団法人　紀の国被害者支援センター　評議員・相談員 大分県臨床心理士会　理事
関屋 伸子	日本看護協会　平成23年度出産環境の場や新人助産師臨床研修などの助産師の育成などに関する課題整理ワーキンググループ 大分県看護協会　平成22年度大分県看護協会教育委員会　委員長

高波 利恵	日本産業衛生学会代議員 大分事業所看護職研究会世話人 第76回日本民族衛生学会実行委員 第20回日本健康教育学会ラウンドテーブルファシリテーター 産業看護を考える会（仮称）メンバー 雑誌「産業看護」編集同人
高野 政子	日本看護研究学会九州・沖縄地方会役員 九州・沖縄小児看護教育研究会幹事 大分県小児保健協会理事 大分県医療的ケア運営協議会
田中 佳子	第32回大分県少年の船運航事業看護師
津隈 亜弥子	大分県看護協会実習指導者講習運営委員会委員
藤内 美保	大分県医療費適正化推進協議会委員 大分市総合計画第2次基本計画検討委員会環境部会長 第16回日本看護研究学会九州沖縄地方会学術集会企画委員 第16回日本看護研究学会九州沖縄地方会学術集会査読委員 東京医療保健大学非常勤講師 広島大学非常勤講師 ファビオラ看護専門学校非常勤講師 ウズベキスタン国看護教育改善プロジェクトフォローアップ調査団
林 猪都子	大分県母性衛生学会　副会長（事務局長） 第8回　大分県母性学会学術集会　実行委員 おおいたコンソーシアム大分運営委員
平野 亙	医療事故防止・患者安全推進学会　理事 福岡大学法科大学院非常勤講師 大分県発達障がい研究会　理事 大分県人権尊重社会づくり推進審議会　副会長 大分県地域・職域連携推進部会　委員 大分県発達障がい者支援センター連絡協議会　委員 大分県福祉サービス第三者評価事業推進組織　第三者評価基準等委員会委員 大分県国民健康保険団体連合会　介護給付費審査委員会　委員 社会福祉法人「萌葱の郷」　評議員 大分健生病院　倫理委員会　委員
松本 初美	大分県ナースセンター事業運営委員会
宮内 信治	大分県立芸術文化短期大学　非常勤講師
吉田 成一	東京理科大学薬学部客員准教授 日本アンドロロジー学会　評議員 環境省PM毒性文献レビューワーキンググループ委員
吉村 匠平	平成23年度学習障がい児等支援体制整備事業に係わる専門家チーム委員

11　助成研究

井伊 暢美

ICFを活用した自閉症スペクトラム者の就労における生活支援サービスの検討

日本学術振興会科学研究費助成事業挑戦的萌芽研究

石田 佳代子

看護師の身体診察技術を活用した災害時遺体対応能力の開発

日本学術振興会科学研究費補助金挑戦的萌芽研究

市瀬 孝道

化学物質の複合曝露によるアレルギー・免疫系への作用についての検討

日本バイオアッセイ研究センター

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

黄砂の呼吸器疾患への影響調査と遺伝子解析によるアレルギーの増悪・感受性要因の解明

日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)　3年予定の2年目

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

環境化学物質による発達期の神経系ならびに免疫系への影響におけるメカニズムの解明

平成23年度環境省環境研究総合推進費（４年目の２年目）

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

風送ダスト（黄砂・バイオエアロゾル）の飛来量実態解明に基づく予報モデルの精緻化と健康・植物生態影響評価に関する研究

平成23年度環境省環境研究総合推進費（３年の３年目）

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

国東オリーブ事業を推進させる抗アレルギー食用油の開発

大分県農業共同組合国東地域本部（２年予定の２年目）

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里、賀 淼

黄砂エアロゾル及び付着微生物・化学物質の生体影響とそのメカニズム解明に関する研究

平成23年度環境省環境研究総合推進費（３年目の１年目）

岩崎 香子

慢性腎臓病における骨折寄与因子の検討-骨組成変化に着目した解析-

日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究(C)

岩崎 香子

骨強度低下に対する尿毒症物質影響-培養細胞を用いた振動分光学手法による解析-

日本腎臓財団

梅野 貴恵

母乳育児経験のある更年期女性の脂質代謝・動脈硬化プロフィールと更年期症状

日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究(C)

江藤 真紀

高齢者の転倒発生に関わる視知覚と姿勢制御に影響する下肢筋力と柔軟性の検討

日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)

甲斐 倫明

人の体型を考慮したＣＴ診断時臓器線量の個人差を評価できるWEBシステムの開発

日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究(C)

甲斐 倫明

診療放射線被ばくに伴う放射線誘発がんのリスク評価

がん研究開発費

甲斐 倫明

疫学・生物の量的データを基にした新しい機構モデルに関する研究

内閣府原子力安全推進事業委託業務

影山 隆之

交替勤務者への生活習慣指導による睡眠改善プログラムの開発と勤務時への眠気の効果

日本学術振興会学術研究費助成事業基盤研究(C)

影山 隆之

施設高齢者の残尿及び尿失禁改善の為のリハビリテーションプログラム開発に関する研究

日本学術振興会学術研究費助成事業基盤研究(C)

影山 隆之

定年退職と再雇用が労働者のメンタルヘルスに与える影響に関する産業看護学的研究

日本学術振興会学術研究費助成事業基盤研究(C)

河野 梢子

院内感染の接触伝播に関する調査及び感染管理のためのシミュレーションによる研究

日本学術振興会若手研究(B)

定金 香里

好乾性真菌がダニ抗原誘発性アトピー性皮膚炎の発症と増悪に及ぼす影響

日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究(C)

下田 浩

リンパ管新生におけるアンジオポエチンの発現・機能解析とリンパ管誘導システム開発

科学研究費基盤研究(C)

秦さと子

唐辛子添加食品による加齢性の嚥下機能低下予防法の検証

日本学術振興会科学研究費助成事業若手研究(B)

関根 剛

看護現場における犯罪被害者への対応の実態およびニーズの検討

日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究(C)

高野 政子

光ブロードバンド回線を利用して病院内学級と原籍校を結ぶ学童の復学支援

日本学術振興会科学研究費助成事業挑戦的萌芽研究（３年予定の１年目）

高波 利恵

生産的・健康的な社会文化的環境づくりを通した中小企業の産業保健活動支援の検討

日本学術振興会科学研究費助成事業若手研究(B)

藤内 美保

生理学・バイオメカニクスの視点から分析する効率的な力発揮の介助動作の開発

平成23年度科学研究費補助金基盤研究(C)

藤内 美保

チーム医療の推進における看護師等の役割拡大・専門性向上に関する研究

厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）

平野 亙

患者の権利保障のための地域臨床倫理コンサルテーション・システムの確立に関する研究

日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)

吉田 成一

大気中浮遊粒子状物質の次世代免疫系への影響とそのメカニズム解明に関する研究

文部科学省科学研究費補助金若手研究(B)（２年予定の１年目）

12　各種研究・研修派遣

安部 眞佐子

派遣先　製鉄記念八幡病院

平成24年3月18日から30日までの８日間、病院で実働しているNSTと、ICUでの栄養管理を見学した。当病院のNSTは、感染コントロール、褥瘡、呼吸器管理と共に総合的に行われ、患者の全身管理の一環として生きたシステムとなっていた。院内の情報伝達もスムーズで、活発な意見交換、学会発表を各職種が行っていた。また、NST介入前から、エネルギー投与量に対する配慮がなされており、加算はとっていないが、院内教育がいきとどいており、栄養療法が基本的な治療として自然と行われるようになっていた。また、ICUでは、担当看護師が、NSTの際の説明役となっており、ベッドサイドで看護を行う看護師が患者の栄養状態を理解し、適切な看護を行う重要性を再認識した。これらの情報を今後の講義に反映して行きたいと考えている。

石岡 洋子

派遣先　社会保険小倉記念病院

平成21年のカリキュラム改正により、「会陰の切開および裂傷に伴う縫合術」の到達度が「学内演習で実施できる」こととされた。そのため、会陰縫合は実施することを前提とした教育が必要となることが考えられる。そこで、産婦人科医師の指導のもと縫合技術の習得を目的に研修を行った。局所麻酔の留意点や、縫合方法について実際に経験し技術を習得することが出来た。

河野 梢子

派遣先　サンフランシスコ大学　看護学部

2012年２月20日～３月8日までの間、USAの学部教育の実際を学ぶため、サンフランシスコ大学看護学部の授業に参加した。２年生の講義とシミュレーションラボ、放課後にスキルラボの見学をさせてもらった。スキルラボは夜８時まで学生は夜遅くまで熱心に技術の練習をしていた。また、指導にあたっていたのはT.A（学部４年次生）であった。

津隈 亜弥子

派遣先　東北福祉大学せんだんホスピタルS-ACT

目的を1)地域で精神障害者を支える方法のあり方について学ぶ、2)看護職に求められるこころのケアについての考えを深める、とした。ACTの実際の活動に同行しながら、のべ34人の利用者と関わった。その中で、精神障害者が地域に身を置き、希望を持ちながら自己実現を果していけるような支援のあり方、そのための支援者―利用者の丁寧な関係づくりについて学ぶことができた。なお、研修の詳細については、平成24年３月２日に報告会を行った。

藤内 美保

派遣先　国立長寿医療研究センター

８月７日～８月１３日の間、名古屋の国立長寿医療研究センターにて研修を行った。研修目的は、①フィジカルアセスメントの教育に役立てるためプライマリケア領域の老年を対象にした臨床実践を見学すること、②老年NPコース学生の教育、および修了者の研修に関する知見を得るためである。高齢者医療を中心に外来、病棟、在宅との連携などを見学した。最先端の認知症医療を誇る「ものわすれ外来」では研究と医療を並行したアセスメントを行っていた。高齢者総合外来では、認知症スケールによるアセスメント、家族の支援、薬物作用・副作用など総合的なアセスメントを行うとともに、患者家族と接する対応は大変参考になるものであった。在宅医療支援病棟では、今後のモデル的な終末期医療の提供ができる素晴らしい取り組みをしていた。

福田　広美

派遣先　国立長寿医療研究センター病院

NPコース履修者および修了者の教育に役立てるため、高齢者医療を中心に外来、病棟、在宅との連携や医療体制のあり方について研修を行った。認知症医療については、国内最大規模の「ものわすれ外来」を見学し、認知症の最先端医療について研修を行った。また、認知症の早期発見と重症化の予防につながる外来診療のあり方、画像や検査所見を含めた認知症の鑑別診断と治療の実際についても学習の機会を得た。

13　学外研究者の受入

本学教員　市瀬 孝道

受入者　賀　淼

平成23年度環境省環境研究総合推進費「研究課題名」黄砂エアロゾル及び付着微生物・化学物質の生体影響とそのメカニズム解明に関する研究（C-1155）の博士研究員として受入、黄砂の生体影響に関する研究に従事した。

本学教員　市瀬 孝道

受入者　劉　博瑩

平成23年度環境省環境研究総合推進費「研究課題名」黄砂エアロゾル及び付着微生物・化学物質の生体影響とそのメカニズム解明に関する研究における支援研究員として受入れ、黄砂の生体影響に関する研究に従事した。

本学教員　稲垣 敦

受入者　保科 早苗

本学共同研究員として受け入れ、ジュニアスポーツ選手の歯科的食育サポートについての研究に従事した。

本学教員　甲斐 倫明

受入者　伴　信彦

内閣府平成23年度業務委託「疫学・生物の量的データを基にした新しい機構モデルに関する研究」の共同研究員として受入れ、AMLの発症機構に関する研究に従事した。

本学教員　甲斐 倫明

受入者　和泉 志津恵

内閣府平成23年度業務委託「疫学・生物の量的データを基にした新しい機構モデルに関する研究」の共同研究員として受入れ、疫学データを基礎にした発がんモデル研究に従事した。

本学教員　甲斐 倫明

受入者　谷 修祐

内閣府平成23年度業務委託「疫学・生物の量的データを基にした新しい機構モデルに関する研究」の学術研究員として受入れ、疫学データを基礎にした発がんモデル研究に従事した。

14 教職員名簿

1 専任教員

生体科学	教授	下田　浩	H24.3.31	退職
	准教授	安部　眞佐子		
	助教	岩﨑　香子		
生体反応学	教授	市瀬　孝道		
	准教授	吉田　成一		
	助教	定金　香里		
	学術研究員	賀　淼	H23.6.6	採用
健康運動学	教授	稲垣　敦		
人間関係学	准教授	吉村　匠平		
	准教授	関根　剛		
	非常勤助手	佐藤　みつよ	H24.3.31	退職
環境保健学	教授	甲斐　倫明		
	講師	小嶋　光明		
	助教	小野　孝二	H23.4.1	採用
	学術研究員	谷　修祐	H23.4.1	採用
			H24.3.31	退職
健康情報科学	教授	佐伯　圭一郎		
	講師	品川　佳満		
	助教	坂口　隆之	H23.9.30	退職
言語学	教授	G.T.Shirley		
	准教授	宮内　信治		
	非常勤助手	田原　歩	H23.4.1	採用
基礎看護学	教授	志賀　壽美代	H23.6.30	退職
	准教授	伊東　朋子		
	講師	秦　さと子		
	助手	栗林　好子	H23.4.1	採用
	助手	水野　優子	H23.7.1	採用
	臨時助手	福元　幸志	H23.4.1	採用
			H24.3.31	退職
	臨時助手	佐藤　秋子	H23.4.1	採用
			H23.8.31	退職
看護アセスメント学	教授	藤内　美保		
	准教授	石田　佳代子		
	助教	河野　梢子		
	助手	田中　佳子		
成人・老年看護学	教授	小野　美喜		
	准教授	福田　広美		
	講師	松本　初美		
	助教	井伊　暢美		
	助教	江月　優子		
	助手	津留　英里佳		
	臨時助手	橋口　久代	H23.4.6	採用
			H24.3.31	退職

小児看護学	教授	高野　政子		
	講師	小代　仁美	H23.4.1	採用
			H24.3.31	退職
	助手	足立　　綾		
	臨時助手	中垣　紀子	H23.9.1	採用
	短期非常勤助手	田村　委子	H23.10.1	採用
			H23.12.15	退職
母性看護学	教授	林　猪都子		
	講師	猪俣　理恵		
	臨時助手	安東　照美	H23.4.1	採用
			H24.3.31	退職
助産学	准教授	梅野　貴恵		
	講師	関屋　伸子	H24.3.31	退職
	助教	樋口　幸		
	助手	石岡　洋子		
	臨時助手	渡邉　文子	H23.6.6	採用
精神看護学	教授	影山　隆之		
	准教授	大賀　淳子		
	助手	津隈　亜弥子	H24.3.31	退職
保健管理学	教授	草間　朋子	H24.3.31	退職
	教授	桜井　礼子		
	准教授	平野　亙		
	臨時助手	井ノ口　明美	H23.4.1	採用
	臨時助手	山田　淳子	H23.4.11	採用
地域看護学	准教授	江藤　真紀		
	講師	赤星　琴美		
	助教	高波　利恵		
	臨時助手	堀　裕子	H23.4.1	採用
国際看護学	教授	李　笑雨	H24.3.31	退職
	助教	桑野　紀子		
看護研究交流センター	助手	佐藤　弥生		
	短期非常勤助手	突田　和	H23.10.1	採用
			H24.3.15	退職

２　特任教授

特任教授	志賀　壽美代	H23.7.1	採用
		H24.3.31	退職

３－１　非常勤講師（学部）

日高　貢一郎	言語表現法
西　英久	哲学入門
劉　美貞	韓国語
大杉　至	社会学入門
二宮　孝富	法学入門
足立　恵理	文化人類学入門
宮本　修	音楽とこころ
澤田　佳孝	美術とこころ
福元　満治	保健医療ボランティア論
西園　晃	微生物免疫論

吉河　康二	看護と遺伝
戸高　佐枝子	母性看護援助論Ⅰ
谷口　一郎	母性生理・病態論
肥田木　孜	母性生理・病態論
堀永　孚郎	母性生理・病態論
上野　桂子	母性生理・病態論
西田　欣広	母性生理・病態論
宇津宮　隆史	母性生理・病態論 助産診断・技術学Ⅲ
佐藤　昌司	母性生理・病態論 助産診断・技術学Ⅰ 助産診断・技術学Ⅲ
飯田　浩一	助産診断・技術学Ⅲ
後藤　清美	助産診断・技術学Ⅲ
豊福　一輝	助産診断・技術学Ⅲ
嶺　真一郎	助産診断・技術学Ⅲ
山中　友希子	助産診断・技術学Ⅲ
宮崎　文子	地域助産活動論
中山　晃志	生物統計学
中山　裕晶	助産診断・技術学Ⅲ
軸丸　三枝子	助産診断・技術学Ⅲ

３－２　非常勤講師（大学院）

立川 洋一	老年アセスメント学演習
古川　雅英	老年実践演習
佐藤　博	老年実践演習
山本　真	老年実践演習
財前　博文	老年疾病特論
大濵　稔	老年疾病特論
藤富 豊	老年疾病特論
藤内 修二	広域看護学概論 健康危機管理論 疾病予防学特論
佐藤 玉枝	広域看護学概論 地域看護学特論
中野 洋子	地域保健特論 健康危機管理論
吉田 知可	健康危機管理論 健康リスクアセスメント演習
後藤 芳子	健康危機管理論
岩松　浩子	小児NP演習
松崎 忠史	老年薬理学演習
卜部 省悟	病態機能学特論
宮成 美弥	老年NP特論
玉井 文洋	健康危機管理論
山田 雅也	薬剤マネジメント特論
矢野 庄司	診察・診断学特論
伊奈　啓輔	老年疾病特論
浜崎　一	老年アセスメント学演習

糸永　一朗	診察・診断学特論 老年疾病特論
伊東　弘樹	老年臨床薬理学特論
兒玉 雅明	老年アセスメント学演習 老年疾病特論
須崎　友紀	老年薬理学演習
阿部 航	診察・診断学特論
吉岩 あおい	診察・診断学特論
岡崎　敏郎	診察・診断学特論
安東 優	診察・診断学特論
増井　玲子	老年疾病特論 疾病予防学特論
山西 文子	看護管理学特論
小寺　隆元	老年疾病特論
田吹 光司郎	産業保健特論
竹下　泰	老年疾病特論
林　良彦	診察・診断学特論
麻生　哲郎	老年疾病特論
宮﨑 文子	看護教育特論
吉留　宏明	老年疾病特論
三浦 源太	疾病予防学特論
小山　秀夫	看護政策論
甲斐 慶子	健康リスクアセスメント演習
小野 重遠	疾病予防学特論
岩波 栄逸	診察・診断学特論
織部 安裕	疾病予防学特論
阿部　実	保健医療福祉政策論
松本　康弘	小児薬理学演習

4　事務職員

	事務局長	戸田　太治	H23.5.1	転入
	参事	児玉　雅範	H24.3.31	転出
・経営企画グループ	課長補佐	錦戸　正	H23.4.30	転出
	主幹	徳永　一裕	H23.5.1	異動
			H24.3.31	転出
	副主幹	田崎　真佐恵	H24.3.31	転出
	主事	江本　華子		
	事務職員	成安　恵美	H24.3.31	退職
・財務グループ	主幹	久寿米木康裕	H23.4.30	転出
	課長補佐	越智　勲	H23.5.1	転入
			H24.3.31	転出
	副主幹	小玉　富瑞		
	主事	中野　麻梨子		
	事務職員	釘宮　裕和		
	事務職員	池邉　尚美	H24.2.4	退職
	事務職員	陸　陽	H24.1.4	採用
・教務学生グループ	課長補佐	柳井　幸雄	H23.4.30	転出
	主幹	佐藤　俊実	H23.5.1	転入
	副主幹	徳永　一裕	H23.4.30	異動

	副主幹	薬師寺　啓子	H23.5.1	転入
	主任	神﨑　正太		
	保健師	菅野　信子	H24.3.31	退職
	事務職員	岡本　香代	H24.3.31	退職
	事務職員	神﨑　純子		
	事務職員	中垣　るる	H24.3.9	退職
	事務職員	佐藤　由美	H24.3.23	採用
・図書館管理グループ	非常勤職員	白川　裕子		
	非常勤職員	中野　智子		
	非常勤職員	工藤　信二	H23.4.1	採用